



Title	現代日本語における副詞の意味と機能―〈感動詞的用法〉の派生を中心に―
Author(s)	全, 紫蓮
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2014（平成 26）年度 博士学位申請論文

現代日本語における副詞の意味と機能

—＜感動詞的用法＞の派生を中心に—

大阪大学大学院文学研究科

文化表現論専攻

専門分野 日本語学

学籍番号 20B11814

全 紫 蓮

<要 旨>

現代日本語における副詞の意味と機能

—<感動詞的用法>の派生を中心に—

全 紫 蓮

本論文の目的は、多義的な意味・機能を持つ現代日本語の副詞「もう」「まったく」「ちょっと」を対象に、どのような感動詞的な用法が派生しているのかを実例に基づいて記述し、感動詞的に用いられる場合における「もう」「まったく」「ちょっと」の相互比較を行うことにより、これらの間に見られる共通点と相違点を探ることである。

従来の研究において既に指摘されているように、副詞と感動詞は近い関係にあり、本論文で取り上げる「もう」「まったく」「ちょっと」は、(1)(3)(5)のように、時間、完全否定、程度・量に関わる副詞として用いられる一方、(2)(4)のように、話し手の評価感情表出としても、(6)のように、聞き手への注意喚起としても用いられる。

- (1) 彼は**もう**韓国に帰国した。
- (2) **もう**、惚けないでくださいよ。
- (3) あいつったら英語が**まったく**分からないんだよ。
- (4) **まったく**、どうにかしてよ。
- (5) 今日は昨日より**ちょっと**涼しいです。
- (6) **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

「もう」「まったく」「ちょっと」に(1)(3)(5)と(2)(4)(6)のような用法があることは先行研究において既に明らかになっているが、(2)(4)(6)のように用いられると、その意味・機能が類似してくる場合があることの記述はまだ行われていないと思われる。実際、(2)(4)(6)の「もう」「まったく」「ちょっと」は、次の(2')(4')(6')のように、相互に言い換えることができる。

- (2') {**もう／まったく／ちょっと**}、惚けないでくださいよ。
- (4') {**もう／まったく／ちょっと**}、どうにかしてよ。
- (6') {**もう／まったく／ちょっと**}、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

以下、(2')(4')(6')のような相互言い換えが可能になることについて、本論文で述べた「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能と、＜感動詞的用法＞に見られる共通点と相違点をまとめる。

「もう」の意味・機能

- ① 「もう」は、時間的意味を表す＜副詞用法＞が基本となる。
- ② 文体差を問わないとすれば、(1)は、(1')のように、事態の実現後を表す点で「もう」と類義関係にある「既に」に言い換えられる。しかし、話し手の評価感情が前面化された(1'')では、「既に」の使用が不適切になる。「既に」とは違って、話し手の評価感情が前面化された、くだけた会話文に使用されやすい「もう」の方から、(2)のような＜感動詞的用法＞が派生している。

(1') 彼は {もう／既に} 韓国に帰国した。

(1'') あれ、{もう／？既に} 戻ってきたの？

- ③ 収集した明治期と現代の用例を比較してみると、現代になって「もう」の＜感動詞的用法＞の使用が増加していると考えられる。

「まったく」の意味・機能

- ① 「まったく」は、完全否定を表す＜副詞用法＞が基本となる。
- ② (3)は、(3')のように、完全否定を表す点で「まったく」と類義関係にある「全然」に言い換えられる。しかし、(3'')のように、「まったく」が文頭にくると、話し手の評価感情が前面化され、「全然」の使用は不適切になる。また、(7)のように、特に肯定述語との共起において、「全然」に比べ使用範囲が広い「まったく」の方からのみ、(4)のような＜感動詞的用法＞が派生している。

(3') あいつったら英語が {まったく／全然} 分からないんだよ。

(3'') {まったく／？全然} あいつったら英語が分からないんだよなあ。

(7) 彼の話には {まったく／＊全然} 同感です／驚きました。

- ③ 収集した用例から言えば、「まったく」の＜感動詞的用法＞は、明治期にはその使用が見られない。

「ちょっと」の意味・機能

- ① 「ちょっと」は、程度・量を限定する＜副詞用法＞が基本となる。
- ② (5)は、(5')のように、程度の低さを表す点で「ちょっと」と類義関係にある「少し」に言い換えられる。「ちょっと」と「少し」は、(8)のように、量の少なさを表す点でも共通している。しかし、(9)(10)のように、話し手の評価感情が前面化された場合は、「少し」の使用は不適切になる。くだけた会話文では使用されにくく、もっぱら程度・量を限定する「少し」からは、(6)のような＜感動詞的用法＞が派生していない。

- (5) 今日は昨日より {ちょっと／少し} 涼しいです。
- (8) ワインを {ちょっと／少し} 飲んだら、気分がよくなりました。
- (9) この問題は {ちょっと／？少し} 難しい。私にはとても無理だ。
- (10) {ちょっと／？少し} やめてよ。

③ 収集した用例では、相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞は、明治期からその使用が確認できる。

＜感動詞的用法＞の相互比較

特徴	もう	まったく	ちょっと
一語文	単独で文となる。	単独で文となる。	単独で文となる。
構文的位罫	文頭にも文末にもくる。	文頭にも文末にもくる。	文頭にくる。
発話場面における聞き手の存在	任意的である。	任意的である。 (内的独白でも使用される。)	義務的である。
評価感情	否定的評価感情も肯定的評価感情も表せる。 (ただし、収集した用例を見る限り、「もう」が肯定的評価感情を表す場合において、さそいかけ文とともに用いられる例は見当たらない。)	否定的評価感情しか表せない。	評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本だが、否定的評価感情を伴うことがある。 (収集した用例では、「ちょっと」が明らかに肯定的な評価感情を伴う場合は見られない。)
文体	くだけた会話文に限定される。	くだけた会話文に限定されない。	くだけた会話文に限定されない。

① 「もう」と「まったく」は、(2)(4) のように、くだけた会話文で用いられ、話し手の否定的評価感情を表す場合、相互に言い換えることができる。しかし、(11)のように、肯定的評価感情を表す場合は、「もう」の使用が適切であり、(12)のように、主語と述語が整った文や丁寧な言い方の場合は、「まったく」の使用が適切である。

- (2) もう、惚けないでくださいよ。
- (2') まったく、惚けないで下さいよ。
- (4) まったく、どうにかしてよ。
- (4') もう、どうにかしてよ。
- (11) もう、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。
- (11') ? まったく、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。
- (12) まったく学費だした親は泣きますよ。
- (12') ? もう学費だした親は泣きますよ。

②「まったく」と「ちょっと」も、(4)(6)のように、聞き手に対する否定的評価感情の表出の場合、相互言い換えができる場合がある。ただし、「もう」と「まったく」の場合とは違って、言い換えると、それぞれの個別的な側面が前面化される。(4)のように、「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、聞き手への注意喚起という側面が前面化されるが、(6)のように、「ちょっと」を「まったく」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化する。しかし、(13)(14)のような場合は、相互に言い換えることができない。(13)のように、聞き手に向けられた評価感情ではなく、話し手自身に対する評価感情表出の場合は、「まったく」の使用が適切である。そして、(14)のように、評価感情に中立的な単なる呼びかけの場合は、「ちょっと」の使用が適切である。

(4) **まったく**、どうにかしてよ。

(4') **ちょっと**、どうにかしてよ。

(6) **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

(6') **まったく**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

(13) **まったく**自分の適応能力に私ながら呆れる。

(13') ? **ちょっと**自分の適応能力に私ながら呆れる。

(14) **ちょっと**、忘れ物ですよ。

(14') ? **まったく**、忘れ物ですよ。

③「もう」と「ちょっと」の場合も、(2)(6)のように、くだけた会話文で用いられ、話し手の否定的評価感情に関わる場面において、相互に言い換えられる場合が見られる。収集した用例を見る限り、「ちょっと」が明らかに肯定的である評価感情を伴う場合は見られず、「もう」との言い換えも否定的評価感情の場合にしかできないと判断される。ただし、この場合も、(2)のように、「もう」を「ちょっと」に言い換えると、注意喚起という側面が前面化されるが、(6)のように、「ちょっと」を「もう」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化される。また、(15)のように、もっぱら話し手の感情表出で用いられた「もう」や、(14)のように、評価感情に中立的な単なる呼びかけで用いられる「ちょっと」は、互いに言い換えることができない。

(2) **もう**、惚けないでくださいよ。

(2') **ちょっと**、惚けないでくださいよ。

(6) **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

(6') **もう**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

(15) **もう**、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

(15') ? **ちょっと**、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

(14) **ちょっと**、忘れ物ですよ。

(14') ? **もう**、忘れ物ですよ。

④「もう」「まったく」「ちょっと」の相互言い換えを総合的に言うと、＜くだけた会話文＞において、＜聞き手に対する＞、話し手の＜否定的評価感情＞と関わる場合、「もう」「まったく」「ちょっと」はいずれも使用可能となり、相互に言い換えることができる。ただし、これらが全く同じ意味・機能で用いられるのではない。「もう」と「まったく」では＜話し手の評価感情表出＞の側面が前面化されるが、「ちょっと」では＜聞き手への注意喚起＞の側面が前面化され、個別的な意味・機能上の特徴を保ちつつ、相互言い換えが可能になるのである。

以上のように、本論文では、＜感動詞的用法＞における「もう」「まったく」「ちょっと」の相互比較を行った。「もう」「まったく」「ちょっと」が＜感動詞的用法＞を持つことは、従来の研究において既に指摘されていることであるが、本論文では、＜感動詞的用法＞の「もう」「まったく」「ちょっと」の間に、互いに共通している側面があり、相互言い換えが可能になる場合があることを確認することができた。しかし、なぜこのような現象が起こるのかについて、品詞論的観点からの理論的考察を行うことができなかった。そして、使用場面と運用上の特徴に関する語用論的観点からの分析も充分にはできていない。このような文法論的かつ語用論的観点からの理論的考察は、今後の課題としたい。

本論文では、3つの部分に分けて、以上のことを記述していく。

第一部の序論（第1章）においては、本研究の目的と先行研究をまとめる。そして、本研究の立場と方法を提示する。

第二部の本論（第2章～第5章）においては、記述対象となる「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能について、類義語「既に」「全然」「少し」との比較を視野に入れ、本来的な＜副詞用法＞を先に、派生的な＜感動詞的用法＞を後に述べていく。そして、明治期と現代との比較を通して、現代に特徴的な「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の詳細を記述し、相互比較を行う。

第三部の結論（第6章）においては、「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能と＜感動詞的用法＞における共通点と相違点についてまとめを行い、今後の課題を提示する。

<目 次>

第一部 序論	1
第1章 はじめに	1
1.1. 本研究の目的	1
1.2. 先行研究の概観	2
1.2.1. 「もう」「まったく」「ちょっと」の基本的特徴	2
1.2.2. 国語辞典における記述	5
1.2.3. 意味・機能に関する先行研究	7
1.2.3.1. 「もう」について	7
1.2.3.2. 「まったく」について	10
1.2.3.3. 「ちょっと」について	11
1.3. 本研究の立場と方法	12
第二部 本論	15
第2章 「もう」の意味・機能	15
2.1. 現代語の「もう」の多義構造	15
2.1.1. 副詞用法の場合	16
2.1.1.1. 時間的意味を表す場合	16
2.1.1.2. 数量面での追加を表す場合	18
2.1.2. 感動詞的用法の場合	19
2.1.2.1. 非単独使用の場合	19
2.1.2.2. 単独使用の場合	20
2.1.3. 本節のまとめ	21
2.2. 類義語「既に」との比較	22
2.2.1. テキストタイプと「もう」「既に」	22
2.2.2. 会話文の場合	23
2.2.3. 地の文の場合	24
2.2.3.1. 終止の場合	24
2.2.3.2. 非終止の場合	25
2.2.4. 本節のまとめ	26
2.3. 明治期における「もう」の用法	26
2.3.1. 副詞用法の場合	27
2.3.1.1. 「もう」について	27
2.3.1.2. 「もうもう」について	30

2.3.2. 感動詞的用法の場合	31
2.3.3. 本節のまとめ	31
2.4. 感動詞的用法の特徴	31
2.4.1. 一語文	32
2.4.2. 構文的位罫	33
2.4.3. 評価感情	34
2.4.4. 文体	37
2.4.5. 複合形式	37
2.4.6. 本節のまとめ	39
2.5. 本章のまとめ	40
第3章 「まったく」の意味・機能	42
3.1. 現代語の「まったく」の多義構造	42
3.1.1. 副詞用法の場合	43
3.1.1.1. 非単独使用の場合	43
3.1.1.2. 単独使用の場合	46
3.1.2. 感動詞的用法の場合	47
3.1.2.1. 非単独使用の場合	47
3.1.2.2. 単独使用の場合	49
3.1.3. 本節のまとめ	50
3.2. 類義語「全然」との比較	51
3.2.1. テキストタイプと「まったく」「全然」	52
3.2.2. 会話文の場合	53
3.2.3. 地の文の場合	55
3.2.4. 本節のまとめ	55
3.3. 明治期における「まったく」の用法	56
3.3.1. 「まったく」について	58
3.3.1.1. 否定形式と共起する場合	58
3.3.1.2. 肯定形式と共起する場合	59
3.3.2. 「まったくだ」について	62
3.3.3. 本節のまとめ	62
3.4. 感動詞的用法の特徴	63
3.4.1. 一語文	64
3.4.2. 構文的位罫	64
3.4.3. 評価感情	65
3.4.4. 文体	66
3.4.5. 複合形式	67

3.4.6. 本節のまとめ	67
3.5. 本章のまとめ	68
第4章 「ちょっと」の意味・機能	70
4.1. 現代語の「ちょっと」の多義構造	70
4.1.1. 副詞用法の場合	70
4.1.1.1. 非単独使用の場合	71
4.1.1.2. 単独使用の場合	75
4.1.2. 感動詞的用法の場合	76
4.1.2.1. 非単独使用の場合	76
4.1.2.2. 単独使用の場合	77
4.1.3. 本節のまとめ	77
4.2. 類義語「少し」との比較	78
4.2.1. テクストタイプと「ちょっと」「少し」	78
4.2.2. 会話文の場合	79
4.2.3. 地の文の場合	81
4.2.4. 本節のまとめ	81
4.3. 明治期における「ちょっと」の用法	82
4.3.1. 副詞用法の場合	83
4.3.2. 感動詞的用法の場合	84
4.3.3. 本節のまとめ	85
4.4. 感動詞用法の特徴	86
4.4.1. 一語文	86
4.4.2. 構文的位罫	86
4.4.3. 発話場面における聞き手の有無	88
4.4.4. 評価感情	88
4.4.5. 文体	89
4.4.6. 本節のまとめ	90
4.5. 本章のまとめ	90
第5章 感動詞的用法の相互比較	92
5.1. 「もう」と「まったく」の比較	92
5.1.1. 「もう」と「まったく」いずれも使用可能な場合	93
5.1.2. 「もう」の使用の方が適切な場合	95
5.1.3. 「まったく」の使用の方が適切な場合	96
5.1.4. 本節のまとめ	97
5.2. 「まったく」と「ちょっと」の比較	98

5.2.1. 「まったく」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合	99
5.2.2. 「まったく」の使用の方が適切な場合	100
5.2.3. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合	101
5.2.4. 本節のまとめ	102
5.3. 「もう」と「ちょっと」の比較.....	102
5.3.1. 「もう」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合	104
5.3.2. 「もう」の使用の方が適切な場合.....	105
5.3.3. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合	106
5.3.4. 本節のまとめ	107
5.4. 本章のまとめ.....	107
第三部 結論	111
第6章 おわりに	111
6.1. 本論文のまとめ	111
6.2. 今後の課題	117
【用例出典】	119
【参考文献】	122

第一部 序論

本論文は、序論、本論、結論の三部構成となっている。

序論となる第 1 章では、まず、本研究の目的について述べる (1.1)。続いて、本論文をなすにあたって参考にした先行研究の概要をまとめ (1.2)、最後に、本研究の立場と方法について述べる (1.3)。

第 1 章 はじめに

1.1. 本研究の目的

現代日本語の「もう」と「まったく」には、次の A、B のような用法がある。

- 1A) 彼は**もう**韓国に帰国しました。
- 1B) 私に黙って韓国に帰国するなんて、**もう**。

- 2A) 彼は**まったく**韓国語が分かりません。
- 2B) こんな簡単な韓国語が分からないなんて、**まったく**。

1A の「もう」は事態が実現した後という時間的意味を表し、2A の「まったく」は完全否定を表す副詞である。A は、次の A' のように、文体差等を問題にしないとすれば、それぞれ類義関係にある副詞「既に」「全然」に言い換えることができる。

- 1A') 彼は**既に**韓国に帰国しました。
- 2A') 彼は**全然**韓国語が分かりません。

しかし、B では「もう」「まったく」の意味・機能が違ってくる。いずれも、話し手の否定的評価感情の表出で用いられており、類義語「既に」「全然」との言い換えができなくなる。A では「もう」「まったく」の意味が異なっているのだが、B になると両者の意味上の違いがほとんどなくなっており、相互に言い換えてもよくなる。

- 1B) 私に黙って韓国に帰国するなんて、**もう**。
- 1B') 私に黙って韓国に帰国するなんて、**まったく**。

- 2B) こんな簡単な韓国語が分からないなんて、**まったく**。
- 2B') こんな簡単な韓国語が分からないなんて、**もう**。

このような現象は、「もう」「まったく」だけではなく、「ちょっと」においても見られる。程度

を限定する 3A の「ちょっと」は、類義語「少し」に言い換えることができるが (3A')、非難の感情を伴って相手の注意を喚起する 3B の「ちょっと」は「少し」に言い換えることができない。むしろ、3B は、「もう」「まったく」との言い換えが考えられる (3B')。

3A) 今日は昨日より**ちょっと**涼しい。

3A') 今日は昨日より**少し**涼しい。

3B) 「そんなこと言ってないよ」「**ちょっと**、惚けないでくださいよ」

3B') 「そんなこと言ってないよ」「**{もう／まったく}**、惚けないでくださいよ」

「もう」「まったく」「ちょっと」に B のような用法があることは、従来の研究において既に指摘されている。しかし、本来は全く異なる意味・機能を有する副詞が感動詞的に用いられるとその意味・機能が類似してくる場合があることの記述はまだ行われていないと思われる。そこで、本論文では、先行研究の指摘をふまえ、「もう」「まったく」「ちょっと」にどのような感動詞的な用法が派生しているのかを実例に基づいて記述し、感動詞的に用いられた場合における「もう」「まったく」「ちょっと」の共通点と相違点を考察することを目的とする。

1.2. 先行研究の概観

本節では、本論文をなすにあたって参考にした先行研究の概要をまとめる。まず、「もう」「まったく」「ちょっと」の基本的特徴について、鈴木 (1972) の指摘をまとめる (1.2.1)。次に、国語辞書における記述をまとめたうえ (1.2.2)、「もう」「まったく」「ちょっと」を個別的に考察した先行研究を概観する (1.2.3)。

1.2.1. 「もう」「まったく」「ちょっと」の基本的特徴

本節では、副詞と感動詞の関係と「もう」「まったく」「ちょっと」の基本的特徴について鈴木 (1972) を中心にまとめる。

まず、副詞と感動詞に関する『国語学大辞典』(国語学会 1980) の記述は以下の通りである(副詞は工藤浩執筆 p.744、感動詞は渡辺実執筆 p.200。筆者による部分的な引用¹⁾)。

副詞

品詞の一種。語形変化をもたず、単独で用言またはそれ相当の語句を修飾(限定・強調)することを基本職能とする語。通常「わざわざ・ゆっくり」などの情態副詞、「もっと・やや」などの程度副詞、「けっして・おそらく」などの陳述副詞、の三つに下位分類される。

¹ 『国語学大辞典』(国語学会1980)には副詞と感動詞について重要な指摘がなされているが、今の筆者には理論的な問題に理解が及ばないため、冒頭部分の引用にとどまる。

感動詞

品詞のひとつ。感嘆詞・喚感動副詞・間投詞とも呼ばれる。interjection にあたる。意義的には自分の感動・詠嘆の感情、相手に対する呼びかけ・応答の作用を表わし、職能的には単独で文を形成することがあり、形態的には自然の叫びに近い語音構造を持つ、といった点を一般的な特徴とする。

しかしながら、副詞と感動詞との関係はそう簡単ではない。鈴木（1972）において、「もう」「まったく」は、時間副詞と程度副詞に近い陳述副詞とされている（pp.476-478）²。また、「ちょっと」は、「あい手に注意や動作をうながす」感動詞として挙げられている（p.503）³。そして、陳述副詞と感動詞は、次の①②が特徴的で近い関係にあることが述べられている（鈴木 1972：133。整理は筆者）⁴。

- ① 素材的な意味をもたず、話し手が言語活動をおこなうさいの、話し手の主体的な面をあらわしているものである。
- ② 文のなかではつねに独立語⁵となる。

² 鈴木（1972：476-478）で「もう」は「動き、状態の実現、変化のときについての判断を表す陳述副詞」で、「まったく」は「全面否定を表す陳述副詞」とされているが、それぞれ「ときをあらわす副詞」と「程度をあらわす副詞」にも近く、その性格と位置づけは、まだ十分にあきらかではないとされている。

³ 鈴木（1972：503）では、感動詞を次のように分類している（番号は鈴木1972による）。

(3) さけびをあらわす単語 ああ おう なにおっ なにくそ こんちくしょう あら

(4) あいさつをあらわす単語 おはよう こんにちは こんばんは さようなら

(5) あい手に注意や動作をうながす単語 ほら そら おい こらっ しいっ もしもし ちよっと

(6) あい手のはなしにたいするうけこたえを表わす単語 はい いいえ うん へい

⁴ 陳述副詞と感動詞が近い関係にあることについては、『国語学大辞典』（国語学会1980）にも同様のことが述べられている（渡辺実執筆pp.200-201。整理・下線は筆者）。

① 自分の感動・詠嘆の感情、相手に対する呼びかけ・応答の作用を表す。前者は「ああ」「おお」「やあ」などを言い、後者は「おい」「ねえ」などの呼びかけ、「はい」「いや」などの返答を指す。「悲しい」とか「承知する」とかが、他人のことや過去未来のことをも自由に表現できるのとは異なり、感動詞は、今のこの場という場面性に密着したものだと言える。

② 単独で情的な文を成すことがある一方、しばしば後続する知的表現と共に一文を成すと観察される場合もある（「ああ、俺は馬鹿だった」「いえ、それは違います」など）。

③ 感動詞の②のような構文論上の性格は、当然感動詞の品詞論上の位置づけの問題でもあって、他品詞と全く切り離れた独自の位置を与える考え方と、いわゆる陳述副詞などと同類に括る考え方とが対立しているのが現状である。いわゆる陳述副詞の中でも、文相当のものを導き出すような性質をも、比較的容易に獲得する。「どうぞ。」などは、「どうぞ、お入り下さい」の省略を言うより、すでに一つの感動詞と認めてよいかも知れない。特にこのような応接・挨拶の言葉は高速度に慣用化され、「今日は。」はもとより、近頃急に耳につき出した「毎度。」など、そうした位置にあたるのであろう。

⁵ 独立語とは、「文のことがらをくわしくするのではなく、もっぱら話し手の態度あるいは陳述の意味をあらわすもので、これらには対応する疑問詞はない」といった点が特徴的な文の部分である（鈴木1972：117）。独立語の特徴については、たかき（2010）でも、「対象的な内容を分担しない」「陳述性だけを分担する」「他成分との分離性が強い（＝文なのか、文の成分なのか、みわけられないものにまでいたる）」と詳しく述べられている。

本論文では、単語の文のなかでの機能についても、基本的に鈴木（1972）で示された文の部分に従う。ここでは、鈴木（1972）の文の部分についての定義を、八亀（2008）の整理を引用して簡単に示しておく（以下は八亀2008：49より抜粋。より詳しい規定については、鈴木1972：61-125、工藤2002、鈴木2010を参照されたい）。

(1)主語：述語が表す属性のもちぬしを表す文の部分。（受動文のような有標の文を除く。）

(2)述語：主語と対になり、主語の属性（動作・変化・状態・特性・関係・質）を表す。陳述の核となる文の部分。

(3)対象語：述語が表す属性の成立に必要な対象を表す文の部分。

(4)修飾語：述語にかかって、述語が表す属性の様子・程度・量などを詳しくする文の部分。

(5)状況語：主語と述語が表す事象が成り立つ時間、空間、原因・理由という外的状況を表す文の部分。（述語の属性だけを詳しくするのではなく、事象全体を詳しくする。）

(6)規定語：名詞からなる文の部分（主語・述語・対象語・状況語）にかかり、人・もの・場所・時などの特徴を説明する文の部分。

同時に、陳述副詞と感動詞には、次のような違いがあることも指摘されている（鈴木 1972：118-121 より。整理は筆者）。

陳述副詞	感動詞
①はなし手のきもちをあらわす独立語となる。 <u>たぶん</u> それは ぼくの 本でしょう。 おうさんは <u>きっと</u> 六時には かえって きます。 ②主に述語があらわす文のモダリティー（断定・推量・命令など）やみとめ方（肯定・否定など）を補足したり強調したりする文の部分である。この種の独立語は、述語の特定の陳述的意味と呼応する。 決して……………うちけし とうてい……………うちけし たぶん……………おしはかり ぜひ……………希望・命令・依頼	①よびかけ・うけこたえ・さけびをあらわす独立語となる。 <u>こらっ</u>、どろぼう、ぬすんだ ものを おいて いけ。 <u>はい</u>、わたしも いっしょに いきます。 <u>ああ</u>、うれしいな！ ②文のはじめ（文頭）にあらわれる。 ③単独で文（いわゆる独立語文⁶）になる。 ④単独の文であるか、文頭の独立語であるかのさかいめははっきりしない。後にやすみ（ポーズ）がながければ、独立の文であり、みじかければ、文頭の独立語だということになる。（書き言葉では、あとに、コンマ（読点）をうつのがふつうである。）

本論文では、品詞論に関する理論的考察ができていないため⁷、1.1 に挙げた A のような使用を＜副詞用法＞とし、B のような使用を＜感動詞的用法＞として記述する。そして、どちらとも決め難い場合についても、可能な限り、本論の箇所では指摘できるように努めたい。

(7)独立語：文が表す事象を詳しくするものではなく、話し手の態度あるいは陳述的意味を表す文の部分。

⁶ 鈴木（1972）の指摘通り、感動詞は、独立語文をつくるということで、述語文をつくる他の品詞と区別される。鈴木（1972）の述語文と独立語文の定義を簡単に示すと、次のようになる（鈴木1972：20、60、124より。整理は筆者）。

- ・述語文：主語・述語が分化している普通の文であって、話し手のことにかぎらず、相手のこと、第三者のことをあらわすことができるし、さらに、現在の目のまえのことにかぎらず、とおくのこと、過去のこと、未来のこと、現実にあること、ないこと（仮定のこと）などを表すことができる。
- ・独立語文：主語・述語の文の部分の分化がなく、おおく一単語からなる。独立語文には、話し手の態度（陳述的な意味）だけがしめされていて、素材的な内容は表現されていない。（ただし、「中村さん!」「課長さん!」のようなタイプのよびかけの場合、ことばのむけられる人がしめされている。）このタイプの文は、現在の事態に対する話し手の態度しかあらわすことができない。

よびかけの文 おうい。／ 中村さん！
 うけこたえの文 はい。／ うん。／いいえ。
 さけびの文 ああ。／ ちきしょう！
 あいさつの文 おはよう。／ こんにちは。

⁷ 品詞論における感動詞の位置づけは学者によって様々であり、何を感動詞として認めるかにおいても違いが見られることが指摘されている（鈴木1973、竹内1973、国語学会1955・1980、山口1984、金田一1988、村木2012など）。以下、鈴木1973を参照して、四代学説における品詞分類と感動詞の位置づけについて簡略にまとめる。

①山田孝雄（『日本文法論』1908）

山田文法では、語を「概念が具体的に認められ、必要に応じてひとつの語で一つの思想を発表しうる性質を持っている語」を「概念語」とし、そのような性質がないものを、「関係語」として分類する。そして、「概念語」を「それ自身で独立して概念を表すだけでなく、談話文章を構成する骨子となり、陳述をなす場合の直接材料となる性質を持つ語」を「自立語」、「観念を表すことはできても談話文章を構成する直接の骨子となることがない語」を「副用語」と分類する。山田文法では、

1.2.2. 国語辞典における記述

本節では、国語辞典において「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能がどのように述べられているのかを確認する。特に、それぞれの副詞が感動詞としても取り上げられているのか、そして、感動詞としても取り上げられている場合、どのような意味・機能が示されているのかについて確認していく。本論文では、次の①～⑤の国語辞典を参照している（以下、①～⑤の国語辞典を番号と下線部で省略して呼ぶ）。

- ① 金田一春彦、池田弥三郎編（1988）『学研国語大辞典 第二版』
- ② 西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編（2011）『岩波国語辞典 第七版新版』
- ③ 山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄、上野善導、井島正弘、笹原宏之編（2012）『新明解国語辞典 第七版』
- ④ 松村明編（2006）『大辞林 第三版』
- ⑤ 日本国語大辞典第二版編集委員会編・小学館国語辞典編集部編（2001）『日本国語大辞典 第二版』

まず、①～⑤の国語辞典から確認できたことをまとめると、次のようになる。

- A. 「もう」については、副詞としても感動詞としても取り上げている国語辞典もあれば、副詞としてしか扱っていない国語辞典もある。
- B. 「まったく」については、全ての国語辞典が副詞としてしか扱っていない。
- C. 「ちょっと」については、全ての国語辞典が副詞および感動詞として扱っている。

いわゆる副詞、接続詞、感動詞を一括して「副用語」に該当する副詞とする。いわゆる接続詞と感動詞は、接続副詞と感動副詞とされる。

②松下大三郎（『標準日本文法』1924）

松下文法では、一詞で一性能を持っているものを「単性詞」、一詞で二性能以上を持っている詞を「複性詞」とし、日本語には単性詞のみあるとする。そして単性詞を「その観念をいかに表すかによって、主観的現象としての観念そのものを表すものと観念の客観的対象を表すものとに二種とする。前者は主観詞であって後者は概念詞である」とし、主観詞を一品詞として感動詞と名付けている。さらに、松下文法では、感動詞を「実質感動詞」と「形式感動詞」に二分する。前者は「頭から使える感動詞」で、「ああ」「あな」「おや」「あら」などのように「事項に実質的意義を含んでいる感動詞」である。後者は他語の下に使う感動詞で、いわゆる間投助詞や終助詞の「さようございますねえ」の「ねえ」などを「実質的意義がなく唯形式的意義のみ有する感動詞」とする。

③橋本進吉（『国語法要説』1934）

橋本文法では、単独で分節を作りえるものを「詞」と名付け、「用言（活用するもの）」「体言（活用しないもので主語となるもの）」「副用語（活用しないもので主語にもならないが、修飾接続をするもの）」「感動詞（活用しないもので主語にもなれず、修飾接続もしないもの）」と四分類する。さらに、感動詞を「感動の情を表し自らいうもの（ああ、あや、まあなど）」と、「応答を表し人に対していうもの（はい、いやなども応答や、もし、おいなども呼掛け）」の二種三類に分けていく。

④時枝誠記（『日本文法 口語論』1950）

時枝文法では、語を「詞（事柄の表現）」と「辞（話し手の立場の直接表現）」の二つに分け、「感動詞」は、「助詞」「助動詞」「接続詞」とともに「辞」の方に入れられている。また、「詞」に入る「副詞」については、「一語で概念と同時に修飾的陳述を含む語」と規定し、「情態副詞」「程度副詞」のみを「副詞」とし、「陳述の副詞」は、他の副詞が全て「詞」に関係するのに対して、「辞」を修飾する異例のものであり、「辞」に属するものと考えられる。

以上のように、感動詞の認定は学者によって様々であるが、大きく、副詞に入れる立場（①山田「感動副詞」）と、ひとつの独立した品詞として認定する立場（②松下③橋本④時枝）に分けて考えることができる。渡辺実（『国語構文論』1971）も、いわゆる感動詞を「陳述副詞」とし、いわゆる陳述副詞は「誘導副詞」と認めている点で副詞の範囲をかなり広くとらえた①山田の立場に近いと考えられる。

以下、A～Cの詳細について述べていく。

第一に、「もう」を感動詞として取り上げている国語辞典は、①学研、③新明解、④大辞林である。それぞれ次のような記述が行われている。特に、③新明解では、「全くもう」といった「まったく」と「もう」が複合した形を例示している。

①学研

《感》語調を整えたり、表現を強調するために使われる語。

「お人の立てこんだ夜(ようさ)なぞ、——あの、狭(せまエ)い玄関の片隅で、夫婦だき合うて寝ることもたびたびで…<宇野千・おはん>」

「すれちがったとき急に——どうしても菜穂子さんだという気がした<堀・菜穂子>」

③新明解

(感) それ以上何と言おうと、そのひどさを表わしきれものではないと、痛切に感じたときに発する語。

「天気は——ひどいもんでしたよ／——おもしろいったらなかった／全く——〔＝あきればててものを言う気も起きない〕／あきれたな——」

④大辞林

(感) ①ある感情や感動が高まったときに用いられる語。

「——、最高だわ」「——、悲しくて悲しくて」「——、ほんとうにすごいんだ」

②やや非難・叱責の気持ちをこめていう語。

「——、何度言っても聞かないんだから」「ひどいんだから、——」

第二に、「まったく」については、感動詞として扱っている国語辞典はない。ただし、③新明解においては、次のように「感動詞的に」用いられることが述べられている。しかし、『新明解国語辞典第五版(1997)』には、まだこのような記述が行われていない。

③新明解

運用 曰(＝すべての面にわたってそうとしかいいようがない様子)は、感動詞的に怒り、いらだちの気持を表わすのに用いられることがある。例、「『彼には困ったものだね』『まったく』／こんなに散らかして、まったく」

第三に、「ちょっと」については、全ての国語辞典において感動詞としても扱われている。

①学研

《感》身近の人に気軽に呼びかける話。ちょいと。「——、君」

②岩波

呼び掛けの感動詞のようにも使う。「——、あなた」

③新明解

(感) 同等以下の相手に呼びかける語。「——君／——待ってくれ」

運用 相手の依頼・指示などに対する応答の発話で言いさしとなる時には、肯定的に答えることをためらったり婉曲(エンキョク)な否定となったりすることが多い。例、「この仕事を明日までに片付けてくれ」「それはちょっと…」。

語気を強めて「ちょっと！何するの？」などと言う場合は、相手の行動に対する批判や制止などを表わすことがある。

④大辞林

(感) 軽く相手に呼びかける語。もしもし。「——、君、待ちたまえ」

⑤日国

【感動】 (㊦㊦ (=時間、物事の量や程度がわずかであるさまを表わす語。大げさではなく行なうという気持ちをこめていう。ちょっと。すこし。)) の「ちょっと…」の陳述部分が省略された用法から) 軽く相手に呼びかけるときのことばとして用いられる。ちょいと。「ちょっと、君」

以上のように、「ちょっと」に関しては副詞とともに呼びかけの感動詞としての使用が述べられているのに対し、「もう」「まったく」については、国語辞典によって記述に違いが見られる。特に、「まったく」については、感動詞的な使用があることが指摘されているだけで、感動詞として品詞分類を行っている国語辞典は見当たらない。

1.2.3. 意味・機能に関する先行研究

本節では、「もう」「まったく」「ちょっと」を個別的に取り上げた先行研究について概観する。

1.2.3.1. 「もう」について

「もう」に関する先行研究には、時の副詞(時間副詞)の体系のなかで考察する川端(1964)、工藤(1985)、仁田(2002)、「もう」を「まだ」との対照で論じる石神(1978)、吉村(1989)、池田(1999・2000)、それぞれの意味用法を記述する森田(1989)、飛田・浅田(1994)、渡辺(2001)などがある。本節では、時間副詞の下位分類を行っている工藤(1985)を取り上げ、時間副詞としての「もう」とその類義語「既に」に関する記述をまとめる。そして、「もう」の多義的な意味とそれらの間の連続的な関係を指摘している渡辺(2001)をまとめることにする。

まず、工藤(1985)は、「時間の語彙的表現のうち、述語のテンスやアスペクトに関与的であるもの」を、「時の名詞」「時の形式名詞」「時の副詞」に分けている。「もう」と「既に」は、時の副詞のひとつのカテゴリーとして下位分類されている。工藤(1985)の分類は、次のようである

(整理・下線は筆者)。

1. 時の名詞

2. 時の形式名詞

3. 時の副詞

- a 発話時を基準とした時期・時点 いま、いましがた、いまに など
- b 概括的時間量 しばらく、しばし など
- c 頻度 たえず、しじゅう、しばしば、たまに など
- d 恒常 つねに、いつも
- e もう—すでに— (とくに)
まだ—いまだに
- f 基準時から動作や変化の起こるまでの時間量 すぐ / やがて / 同時に など
- g 動作・変化の進行 しだいに、徐々に、だんだん
類似の状態の累加 ぞくぞく、つぎつぎ
不変状態の持続 ずうっと、依然として、相変わらず

工藤(1985)は、上記の e のように、「もう」と「まだ」を対立させながら、次のように記述している(整理は筆者)。

・物語りの文

「もう」：文の表す事態が変化後の状態としてあると捉える。

「もう {食べた／食べている (結果存続) / 暗かった / 中学生だ}」

「まだ」：文の表す事態が変化前の状態としてあると捉える。

「まだ {食べていない／食べている (動作持続) / 明るい / 小学生だ}」

・感嘆・なじりの文、命令・禁止の文

「もう」：話し手の心理的基準時より後の状態としてあると捉える。

「もう食べちゃったの?！」

「もう行け」

「まだ」：話し手の心理的基準時より前の状態としてあると捉える。

「まだ食べてるの?！」

「まだ行くな」

工藤(1985)は、「もう」と「まだ」が「もう食べちゃったの?！」「まだ食べてるの?！」のような感嘆・なじりのムードで発話される時、「<早すぎる>とか<遅すぎる>とかの評価的ニュアンスがつく」と述べ、これは「話し手の予想との食い違いからくる<意外性>の意味特徴である」と指摘している。また、「もう行け」「まだ行くな」のような命令(禁止)文では、「<行くべきとき>という、話し手の思っている計画ないし当為の時より前(後)」という意味特徴を基本的なものとし

て考えることになる」と指摘している。このように、工藤（1985）は、「もう」と「まだ」が持つモーダル的な側面についても指摘している。また、工藤（1985）は、「もう」と「既に」、「まだ」と「いまだに」の間の差について、「どちらも主に文体的なちがいだと思われるが、そこから多少の用法上の差も生じている」と述べている⁸。

次に、渡辺（2001）は、「話手は対象的な事柄の中にはないもの（予測時点）を事態の流れの中に主体的に設定することができる」とし、「もう」が表すのは、「その予測時点を基準に出来事の成立が早すぎると判断する話手の時間把握」であると指摘する。そして、「もう」の意味用法を「(I)NはもうPだ」の時間表現の用法、「(II)もうQ」の数量表現の用法、「(III)もうAだ」の感情表現の用法に分け、「(II)(III)も時間がらみの表現であって、その基本線になるのは(I)である」とし、(I)から(III)への意味的な連続性について指摘している。渡辺（2001）の指摘を簡単にまとめると、次のようになる（整理は筆者。例は渡辺 2001 より引用）。

(I) NはもうPだ

「もう」は「事態Pの実現が予測以上に早い」ということを表す。

- ・ Pがすでに実現している現在と予測点との時間差が大である。

「宿題ならもう先週のうちにすませてしまったよ」(例②)

「この間来たばかりなのにもう課長か、キャリアは早いなあ」(例④)

「コップ一杯でもう真っ赤じゃないか、ほんとに弱いんだね」(例⑤)

- ・ 予測点がいまにも実現しそうな近くに置かれ、現在との時間差が極小である。

「もう春だね、風が今までのように冷たくないような気がする」(例⑧)

(II) もうQ

- ・ 「もう」は「現在の量から増減の変化が加わって予定量に達する」という意味を表す。

⁸ 「もう」と「既に」については、工藤（2010）にも次のように指摘されている（工藤2010：230-231より引用）。

（前略）時の副詞や無意図性の副詞に、命令・依頼文等に用いられないという性格をもつものがあるのは、過去や現在の「確定性」や「無意図性」が、命令・依頼文等の叙法となじまないためであり、「文の陳述的なタイプ」との照応ということ、これらの副詞にとっては二次的（結果的）なことがらに属すると見てよいと思われる。だが、「もう」と「すでに」、「まだ」と「いまだ（に）」、「たまに」と「まれに」などの義務的な副詞が、

も う 家に帰りなさい。

*すでに

ま だ 残っていないさい。

*いまだ（に）

たまには 遊びに連れて行ってやれよ。

*まれには

すぐに／ただちに 行って下さい。

*まもなく／じきに

のように、命令文や依頼文に使えるものと使えないものとに分かれることは、どう考えたらいいであろうか。共通しているのは、言えない方の多くが文体的に文章語的であることだが、文章語が命令の叙法になじみにくいと言っていいかどうか。少なくともそれだけではあるまい。評価副詞と程度副詞のところでは言ったような、確定事態に対する評価性とか、事態の動態性が静態性か、といったことも関係しているだろうか。あるいは、これらの副詞のもつ時間性—アスペクト性や相対的テンシ性や動作様態（局面）性、あるいは頻度性や間隔性など—自体に、なにか違いがあるのであろうか。このあたり、テンシ・アスペクト研究者に意見を聞きたいところである。

「もう三十万円たまったらスペインまで足がのばせるわよ」(例③)

(Ⅲ) もう A だ

- ・ 「もう」は「コントロールの限界を超える」という気持を表す。
「もう我慢できないわ、貴方が出て行かないならあたしが出て行きます」(例⑮)
- ・ 感情表現が行きついた、あきれ感情表出専用の用法もある。
「なんてことするのよ、あなたって人はもう」(例⑱)

以上のように、工藤(1985)では「もう」が用いられる文のタイプによって、モーダル的な側面が前面化されることが指摘されており、また「既に」との文体的違いや使用上の違いについても述べられている。そして、渡辺(2001)では、「もう」の多義的な意味・機能とそれらの間に見られる連続性を指摘しつつ、「なんてことするのよ、あなたって人はもう」のように感動詞的に用いられる場合があることが既に述べられている。

1.2.3.2. 「まったく」について

「まったく」の意味・機能に関する先行研究には、森田(1989)、鈴木(1996)などが挙げられる。まず、森田(1989)では、「まったく」を「さっぱり」と「とても」の関連語として取り上げ、次のように述べている。

○「さっぱり」の関連語として(森田 1989 : 494-495。整理は筆者)

関連語 まったく 全然

いずれも否定に呼応する副詞であるが、「さっぱり」と違って特に消滅や、出現しない状態のみに限定されない。広く否定表現に係り、打ち消す気持ちを強調する。否定を客観的に強め、その動作や状態がほんの僅かも成立しない、不十分、不完全ではなく、ゼロの状態を言う。

「ドアは全くしまらない／ドアは全然しまらない」

○「とても」の関連語として(森田 1989 : 805-806。整理は筆者)

関連語 全く

- ・ 程度のはなはだしさを表す点で「とても」と共通する。しかし「全く」は、肯定形に係ると、相手に共感し共鳴する場合に発せられる言葉ともなる。

「全くそうだ」「全くもってそのとおり」「全くねえ……」

- ・ 形容詞・形容動詞など状態性の語に係る場合も、“だれしもがそう思うとおり、確かに”と現状を常識的な見方で肯定する。たれでもがそう感じ思う状態は、完全にそうなりきった状態なので、「大変」「非常に」「きわめて」「すこぶる」などと同じように、程度の強調となる。
- ・ 現状を“確かにそのとおり”と肯定する気持ちである。この場合は、“本当に”“実際”の意味を持つ「実に」と言い換えのきく例が多い。

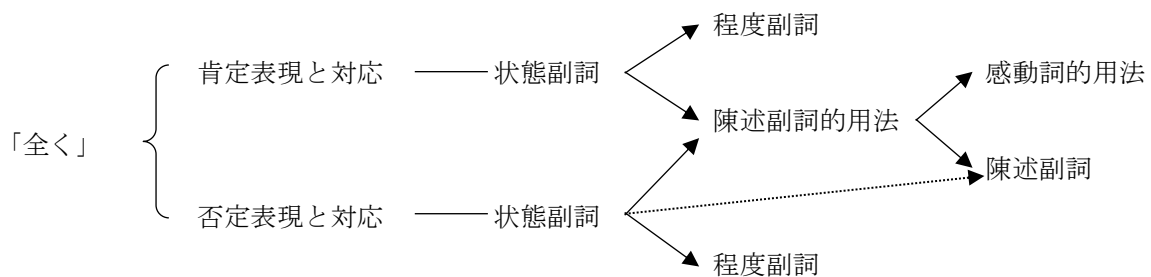
「全く馬鹿なことをしたもんだ」「全くすばらしい」「全く好調そのものだ」「全くひどい話だ」「全くずうずうしいよ」、さらに、「の」を伴った「全くの無一文」「全くのところ、

どうしていいの自分でも分からない」など。

鈴木（1996）では、「まったく」を「全然」と関連させながら、その用法の推移と副詞としての特性について述べている。鈴木（1996：482）は「まったく」が「状態副詞・程度副詞・陳述副詞の、いずれの用法を併せ持つ」とし、次の5点を指摘している。

- (1) 状態副詞としての、十全性を表す本来の用法も見られる。
- (2) 程度副詞としての用法は、普通の程度副詞とはかなり異なる。「十全性副詞」とでも呼んで、別に扱うべきであろう。
- (3) 陳述副詞としての用法は、肯定・否定いずれの場合にも見られる。
- (4) 肯定表現との結び付きが強い。感動詞的用法も、そこから生まれたと見ることができる。
- (5) 話し手の主観に支えられた、誘導副詞的用法は、肯定・否定のいずれにも見られる。

そして、「まったく」の用法の推移を次のように図式化し、示している。



※否定表現と対応する「全く」から陳述副詞への転化は、中世においてなされたとしても、現在の陳述副詞としての用法はそれとは別ではないかと考えて、点線で示した。

（鈴木 1996：482）

以上のように、鈴木（1996）において、「まったく」が副詞として多義的に用いられる点、さらに、感動詞的用法までの用法の推移が指摘されている。

1.2.3.3. 「ちょっと」について

工藤（1983）、渡辺（1990）などにおいて、「ちょっと」は、「すこし」「多少」「少々」「かなり」「大分」「随分」「もっと」などととも量副詞の用法に立つ程度副詞とされている。しかし、「ちょっと」には、形容詞や動詞の示す程度・量を限定する用法だけでは説明がつかない場合がある。このような「ちょっと」の諸用法については、中道（1991）において詳しく述べられている⁹。

中道（1991）は、いずれの用法も「くだけた話しことば的な文体」であることを強調しながら、「ちょっと」の意味用法を次のように分けている（中道 1991：149-151。整理は筆者）。

⁹ そのほか、「ちょっと」の多義的な意味・機能を考察した先行研究には、三宅（2003）、岡本・斎藤（2004）、彭（2004）、秋田（2005）、藤原（2005）などが挙げられる。

- ① 数量が少ないことを表す用法
 - i. 述語になる用法（もうビスケットの残りはちょっとだ。）
 - ii. 連体修飾の用法（ちょっとの差でバスに乗り遅れた。）
 - iii. 連用修飾の用法（ウイスキーがちょっと残っている。）
- ② 程度が低いことを表す用法
 - 連用修飾に用いる用法（今日は昨日よりちょっと涼しいようですね。）
- ③ 程度が高いことを表す用法
 - 単独の副詞的用法（これでも昔はちょっと知られたプレイボーイだったんだぞ。）
- ④ 呼び掛け等として用いる用法（「君、ちょっと」「はい、何でしょう」）
- ⑤ 伝達態度をあいまいにする用法
 - i. 連用修飾の用法（今日はちょっと寄るところがあるので、ここで失礼します。）
 - ii. 言いさしなどの形の用法
 - （「これ、もらってもいいですか」「あ、それは、ちょっと……」）
 - iii. 応答としての用法
 - （「顔色が悪いけど、どうかしましたか」「ええ、ちょっと」）
- ⑥ 間つなぎの用法（これはまあ、ちょっと、なんというか、むずかしい問題でして、お答えもしにくいわけなんですよ。）

中道（1991：151）は、「①は数量に関する用法、②は程度に関する用法で、いずれも命題内容に情報を付加する用法であるが、この①②の区別は連続的で、どちらとも分けがたい例もある。（中略）③～⑥は数量・程度に関する命題内的意味を含んではいても、それは次第に稀薄になり、逆に、なんらか判断態度、伝達態度を示すことが主な機能となってくる」とし、①②の「数量・程度に関する命題内的意味」が稀薄になってくることによって、③～⑥の用法が生じることを指摘している。

1.3. 本研究の立場と方法

以上、1.2 でまとめたように、「もう」「まったく」「ちょっと」に＜感動詞的用法＞が派生している点は国語辞典および先行研究において既に明らかになっている。本論文では、「もう」「まったく」「ちょっと」の多義的な意味・機能に関する先行研究の指摘をふまえ、実例に基づいて、3つの副詞の＜感動詞的用法＞の相互比較を試みる。

本研究では、以下の方法で文学作品から実例を収集し、分析の対象としている。

- ① 場面や文脈が重要になるため、基本的に小説から用例を収集した。会話文の用例を中心に分析を行うが、地の文と会話文のテキストタイプによる違いについても考察を試みる¹⁰。なお、必要

¹⁰ 本稿では、テキストタイプを「地の文」と「会話文」に分類する。出来事を提示している部分を典型的な地の文として見なし、地の文のなかで作中人物の内的独白を提示する部分は典型的な地の文と区別する。本文中の表では内的独白の用例数は（ ）内に示している。

に応じて、シナリオからも用例を収集している。資料の詳細については、稿末の用例出典を参照されたい¹¹。

② 明治期と現代を比較する場合は、両時期の資料を次のように限定した¹²。

- ・明治期：明治後期（1887年～1912年）に発表された言文一致体の小説 16 作品
- ・現代：1980 年以降に発表されたいわゆる標準語で書かれた小説 16 作品

〔明治期と現代の比較に用いた資料〕

時期	初出年	作家名	作品名	収録情報
明治期	1887	二葉亭四迷	浮雲	CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪
	1905	夏目漱石	我輩は猫である	
	1906	二葉亭四迷	其面影	
	1906	夏目漱石	坊っちゃん	
	1907	二葉亭四迷	平凡	
	1907	田山花袋	蒲団	
	1907	夏目漱石	虞美人草	
	1908	夏目漱石	坑夫	
	1908	夏目漱石	三四郎	
	1909	田山花袋	田舎教師	
	1909	夏目漱石	それから	
	1910	森鷗外	青年	
	1910	夏目漱石	門	
	1911	森鷗外	雁	
	1912	夏目漱石	彼岸過迄	
	1912	夏目漱石	行人	
現代	1980	沢木耕太郎	一瞬の夏	CD-ROM版 新潮文庫の100冊
	1982	赤川次郎	女社長に乾杯！	
	1985	村上春樹	世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド	
	1987	椎名誠	新橋烏森口青春篇	
	1994	角田光代	まどろむ夜のUFO	講談社文庫(2008)
	1995	柳美里	フルハウス	文春文庫(2007)
	2000	奥田英朗	イン・ザ・プール	文春文庫(2006)
	2000	山本文緒	プラナリア	文春文庫(2005)
	2001	浅田次郎	椿山課長の七日間	朝日文庫(2005)
	2002	石田衣良	アキハバラ@DEEP	文春文庫(2006)
	2002	吉田修一	パーク・ライフ	文春文庫(2004)
	2003	綿矢りさ	蹴りたい背中	河出文庫(2007)
	2003	村山由佳	星々の舟	文春文庫(2006)
	2003	奥田英朗	空中ブランコ	文春文庫(2008)
	2005	三浦しをん	まほろ駅前多田便利軒	文春文庫(2009)
	2005	重松清	その日のまえに	文春文庫(2010)

¹¹ 記述にあたっては、必要に応じて用例を用いることもある。なお、章によって用例を収集した資料が異なっている場合は、該当する箇所にも明記している。コーパス資料に関しては、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座設備のものを使っている。

¹² 本論文では、松村（1957）に従い、明治期と現代の資料を限定している。明治期と現代の比較にあたって、特に現代については、最新の用例を収集するため、便宜的に1980年以降に限定している（以下は、松村1957：87より引用）。

第一期 明治前期〔形成期〕（明治の初年から明治十年代の終りまで）

第二期 明治後期〔確立期〕（明治二十年代の初めから明治の末年まで）

第三期 大正期〔完成期〕（大正の初年から大正十二年九月の大震災まで）

第四期 昭和前期〔第一転成期〕（大正十二年の関東大震災後から昭和二十年八月の終戦まで）

第五期 昭和後期〔第二転成期〕（終戦後から今日まで）

③ 収集方法については、コーパス資料の場合、KWIC 検索を用い用例を収集したが、特に前後の文脈が重要となる＜感動詞的用法＞の分析においては、基本的に手拾いで用例を収集した。

必ずしも用例数が十分ではないが、本論では、以上から収集した実例をもとに分析する。本論で挙げる用例は、「もう」「まったく」「ちょっと」を**太字**にし、共起する語に下線を引いた。使用場面に特徴がある部分は、波線を施している。そのほか用例を提示する際、必要に応じて適宜点線や二重下線、記号〔 〕で示している。用例の言い換えにおいて、言い換えると非文法的になる場合は「＊」で表示し、不適切あるいは不自然になる場合は「？」で表示している。

第二部 本論

本論は、第 2 章から第 5 章までの四章からなっている。まず、本論文の記述対象である 3 つの副詞を、「もう」（第 2 章）、「まったく」（第 3 章）、「ちょっと」（第 4 章）の順に記述する。そして、第 5 章では、＜感動詞的用法＞において、「もう」「まったく」「ちょっと」の間にどのような共通点と相違点があるかについて相互比較を行う。

第 2 章 「もう」の意味・機能

本章では、現代日本語における「もう」の意味・機能について記述する。まず、2.1 では、現代語の「もう」の多義構造について記述する。そして、2.2 では、類義語「既に」との比較を行い、「もう」にだけ＜感動詞的用法＞が派生していることを確認する。続く 2.3 では、明治期と現代の用例を比較対照し、「もう」の＜感動詞的用法＞の使用が現代になって増加していることを述べる。最後に、2.4 では、現代語における＜感動詞的用法＞の特徴について述べる。

2.1. 現代語の「もう」の多義構造

本節では、まず、現代語の「もう」の多義構造を記述していく。現代日本語における「もう」は、次の 1)～3)のように多義的な意味・機能を持っている。

- 1) 彼は**もう**韓国に帰りました。
- 2) **もう**一度やってみなさい。
- 3) 私に黙って行くななんて。いやだ、**もう**。
- 3') 「あ、また、汚した」「**もう**……」と花子のため息混じりに口を開いた。

1)の「もう」は、事態が実現した後という時間的意味を表す。時間的意味の「もう」は、「彼の顔はもう赤かった」「彼はもう大学生だ」のように、共起する述語のタイプに制限がない。2)の「もう」は、数量表現の直前にきて数量面での追加を表す。しかし、3)では「もう」が文末にきて話し手の否定的評価感情を表出し、感動詞的に使用される。そして、3')のように、単独で否定的評価感情表出に用いられることもできる。「もう」と同様、事態が実現した後の状態であることを表す「既に」には、2)～3')のような用法は見られない。「もう」を「既に」に言い換えられるのは、時間的意味を表す 1)のみである。

以下では、本来の時間副詞として類義関係にある「既に」との言い換え関係を視野に入れ、1)、2)のような「もう」を＜副詞用法＞、3)、3')のような「もう」を＜感動詞的用法＞とし、本来の＜副詞用法＞から派生的なく＜感動詞的用法＞に至る「もう」の多義的な意味・機能を記述する¹³。

¹³ 「もう」と「既に」の用例収集に用いた現代日本語の資料は以下の通りである。用例出典の詳細については、稿末の【用例出典】を参照されたい。

2.1.1. 副詞用法の場合

＜副詞用法＞の「もう」は、大きく時間的意味を表す場合と、数量面での追加を表す場合に分けることができる。以下、時間的意味を表す場合から順に述べていく。

2.1.1.1. 時間的意味を表す場合

「もう」は、基本的に、動詞・形容詞・名詞述語と共起し、時間的意味を表す。現在・過去（非未来）を表す場合でも、未来を表す場合でも用いられるが、共起する語によって、「もう」の意味が変わってくる。そこで、本節では、「もう」の用例を、現在・過去（非未来）のことを表す場合と未来のことを表す場合に分けて分析する¹⁴。

1) 現在・過去（非未来）のことを表す場合

「もう」は、現在・過去（非未来）のことを表す述語と共起し、事態が実現した後の状態であることを表す¹⁵。(1)～(3)の「もう」は、同じく事態が実現した後の状態を表す「既に」に言い換えられる。ただし、2.2.2 で述べるように、(1)(2)のようなくだけた言い方¹⁶では、「既に」の使用は不適切である。

(1) 「ちょっと——電話つながってる？」

純子はあわてて言った。

麻里子はパネルを見て、

「もう切れてるわ」

と言った。

(女社長に乾杯！)

(2) 「ご飯はいいのね？」

と智子が重ねて訊いて来る。

〔小説〕『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』の1950年以降の小説／宮部みゆき(1989)『火車』／角田光代(1994)『まどろむ夜のUFO』／柳美里(1995)『フルハウス』／東野圭吾(1998)『探偵ガリレオ』／奥田英朗(2000)『イン・ザ・プール』／重松清(2000)『ビタミンF』／山本文緒(2000)『ブラナリア』／浅田次郎(2001)『椿山課長の七日間』／唯川恵(2001)『肩ごしの恋人』／石田衣良(2002)『アキハバラ@DEEP』／吉田修一(2002)『パーク・ライフ』／角田光代(2002)『空中庭園』／伊坂幸太郎(2003)『重力ピエロ』／小川洋子(2003)『博士が愛した数式』／奥田英朗(2003)『空中ブランコ』／重松清(2003)『疾走(上・下)』／綿矢りさ(2003)『蹴りたい背中』／村山由佳(2003)『星々の舟』／坂元裕二(脚本)・小泉すみれ(ノベライズ)(2004)『ラストクリスマス』／横山秀夫(2004)『臨場』／重松清(2005)『その日のまえに』／東野圭吾(2005)『容疑者Xの献身』／三浦しをん(2005)『まほろ駅前多田便利軒』

〔シナリオ〕『シナリオ作家協会編01'年鑑代表シナリオ集』(2002)／『シナリオ作家協会編02'年鑑代表シナリオ集』／木皿泉(2006)『野ブタ。をプロデュースシナリオBOOK』

¹⁴ 時間的意味を表す「もう」は、後述する「まったく」「ちょっと」とは違って、＜副詞用法＞における単独使用での用法は見られない。ただし、次のように、時間的意味を表す「もう」が単独で用いられる場合は考えられる。

・「先生、今日はこれで失礼します」「もう？ 来たばかりじゃない。お茶ぐらい飲んでいってよ。おーい、マユミちゃん」
呼ばれた看護婦が、部屋の隅で面倒くさそうに顔をあげる。(イン・ザ・プール)

¹⁵ 時間副詞としての「もう」の意味・機能については、工藤（1985）で既に明らかになっている。1.2.3.1でまとめたように、「もう」は基本的に「文の表す事態が変化後の状態としてであると捉える」が、「『もう食べちゃったの?!』のような感嘆・なじりのムードで発話される時、＜早すぎる＞とかの評価的ニュアンスがつく」と述べ、これは「話し手の予想との食い違いからくる＜意外性＞の意味特徴である」と指摘されている。

¹⁶ 鈴木（1972：295）に指摘されているように、丁寧な言い方（いわゆるデス・マス体）と普通の言い方の使い分けは、性、年齢、職業、場面などと絡んで一概に分けることはできない。本論文では、普通の言い方のなかでも、より平易で日常的なことばを用いた表現として、親しみのある態度、ぞんざいな態度での言い方を「くだけた」言い方として考える。また、そのような言い方で会話文のことを「くだけた」会話文とする。

- 「うん、もう食べた」
「お風呂へ入ったら？」
「いや、もう入った」 (女社長に乾杯！)
- (3) 「ここにいた女の人も、あなたが殺したんですか？」
「違う！ 俺は殺しちゃいない！」
「純子さんはあなたを見かけたと言っていますよ」
「ああ。確かにそれは俺だ。しかし、ここへ来たとき、もうあいつは殺されていた。本当だ」
(女社長に乾杯！)

次の(4)(5)は、「戻ってきた」「八時半になっている」のが予想より早いという話し手の驚きが前面化された文である。上述した(1)～(3)と同様、現在・過去（非未来）のことを表しているが、この場合の「もう」は「既に」に言い換えられなくなる。ここで「もう」は、事態が実現した後という述語の時間的意味を強調・補強しながら、その実現に対する話し手の評価感情（驚き）も表す。

- (4) 通路ではブレイカーズの矢崎と鉢合わせした。「あれ、もう戻ってきたの？」皮肉めかした口調だった。
(空中ブランコ)
- (5) 目がさめて、時計を見た伸子は、びっくりした。
「もう八時半！ 大変！ 遅刻だわ！」
と布団から飛び出す。目覚ましをかけておくのを忘れたんだわ、きっと。 (女社長に乾杯！)

2) 未来のことを表す場合

以上の(1)～(5)は、「もう」が現在・過去（非未来）のことを表す述語と共起する場合であったが、次の(6)～(9)は、「もう」が未来のことを表す述語と共起する場合である。事態が実現した後を表す「既に」との言い換えもできない。

まず、次の(6)～(8)の「もう」は、事態の実現が間近であることを表す。また、(9)のように、「もう」が話し手の否定的意志を表す文で用いられた場合は、同じことをこれ以上繰り返さない（「二度と帰らない」）という意味を表す。

- (6) 「——尾島さんはまだ？」
「ええ。もう来る頃です。さっき、向こうを出ると連絡がありましたから」 (女社長に乾杯！)
- (7) 急に、枝を鳴らして風が吹いてきた。冷たい凍るような山の風だった。女は立ちどまった。
「寒いわ。もう帰りましょう」 (青春の蹉跌)
- (8) 時計は九時を過ぎた。消灯の時間は九時だった。
「君たちもう帰って寝ろよ。僕はもう少し様子を見てからにする。」 (草の花)
- (9) 「あの、おじいちゃん。私、もう泣きません。おじいちゃんも少しは気持ちが晴れましたか」
「ありがとう。おかげでスッキリした。きょうはつつじヶ丘の便所に入らんですみそうです」
(椿山課長の七日間)

次の(10)(11)は、「もう」が「無理だ」「駄目だ」などのような不可能を表す述語、「いやだ」「たくさんだ」「ごめんだ」「こりごりだ」などの否定的評価感情を表す述語と共起している。これらの述語と「もう」が共起すると、「これ以上は出来ない」「これ以上はいやだ」という話し手の否定的評価感情が前面化される。

(10) もっともそのあと峻一は龍子にむかって、「はっきりいって親父はもう駄目です。生きていても廃人ですよ」と報告したが、龍子はその言葉にやはりそうかと重々しく頷くと共に、そういう医者らしい言葉を吐いた峻一に実のところほっとした。(楡家の人びと)

(11) 「どうした？」
「あのこと？」
「そうさ。行ってみたか」
「行っただわ。恥ずかしくて恥ずかしくて、もうあんな所、絶対いやだわ。死んだ方がいいくらい……」
(青春の蹉跌)

2.1.1.2. 数量面での追加を表す場合

数量面での追加を表す「もう」は、述語ではなく、数量表現が後続する。この場合は、4)、5)のように、「もう」の有無によって文の意味が違って来る。4)では、韓国への渡航は1回の場合と2回以上の場合があるが、5)では、必ず2回以上になる。また、4)の場合、渡航が1回の場合では、「もう」を文頭に置き、「もう韓国に1回行った」と言ってもよいが、5)は不可能である。

- 4) 韓国にはもう1回行った／行っている。
- 5) 韓国にはもう1回行きたい／行こう／行け。

収集した用例を見ると、この場合の「もう」は、さそいかけ文での使用が多く、否定述語との共起も見られない。(13)のように、発話の意図が明確な場面では、述語が省略され「もう」と数量表現だけでも用いられる。また、(14)(15)のように、「もう」が量・程度を表す「少し」「ちょっと」、時間的距離を表す「すぐ」「じき」を修飾することもある。

- (12) 「なかなかうまいじゃない」と彼女がほめてくれた。「拍手できなくて悪いけど、すごく良い唄ね」
「ありがとう」と私は言った。
「もう一曲唄って」と娘が催促した。
それで私は『ホワイト・クリスマス』を唄った。(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)
- (13) 伸子は、グッとグラスをあけると、「もう一杯。ストレート！」
と声を上げた。(女社長に乾杯！)
- (14) 「ねえ、ここでもう少しコーヒーを飲んでいかない？ そうすればもう少しお話もできるし」
「いや、コーヒーはもういいよ」と私は言った。「下で飲みすぎてもう一滴も入らない。それに家に帰って一刻も早く眠りたいんだ」
(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

(15) 「この雨じゃいくらなんでも練習できないね。せっかく着替えたのにもったいないな。」

「これ、夕立でしょう。**もう**すぐ止むと思いますよ。」

(蹴りたい背中)

2.1.2. 感動詞的用法の場合

＜感動詞的用法＞の「もう」は、文末にもくることができる点と、単独で文になる点で、＜副詞用法＞と異なっている。そこで、本節では、「もう」の＜感動詞的用法＞を非単独使用の場合と単独使用の場合に分け、＜副詞用法＞との違いを確認する。「もう」の＜感動詞的用法＞における構文的特徴と意味については、2.4 で詳述することにする。

2.1.2.1. 非単独使用の場合

＜感動詞的用法＞の非単独使用の場合、「もう」は、文頭か文末にきて、話し手の評価感情表出として用いられる。2.1.1.1 で述べた＜副詞用法＞との違いがはっきりするのは、(18)(19)のように、「もう」が文末に位置する場合である。(16)～(19)の「もう」は、(16')(17')のように構文的位置を文末に変えても、(18')(19')のように文頭に変えてもよい。

(16) そんな風に歩いていると危ないよ——そう声をかけようとした時、少女は何かに躓いたらしく、前に転んだ。途端に大声で泣きだした。

草薙はあわてて駆け寄り、少女を抱き起こした。膝から血が出ていた。

「あ、どうもすみません」母親と思われる女性が走ってきた。「**もう、だから一緒に歩きなさいっていったのに**。どうもすみません。ほんとうにもう、だから家で待ってればよかったのに」

娘を叱るより、こんな真夜中に火事場見物するのは控えたほうがいいといたかったが、草薙は黙って少女を母親に引き渡した。

(探偵ガリレオ)

(16') 「だから一緒に歩きなさいっていったのに、**もう**」

(17) 「ほら、ストリートミュージシャンっているじゃない、ギター弾いて歌ってる子。いたのよ、それが。(略) 顔もかわいしい、小柄でスリムだし、**もう、サイコーなのよ**」

(その日のまえに)

(17') 「サイコーなのよ、**もう**」

(18) 「それから、さっき純子さん、何か言いかけたわね」

「え？——ああ、馬鹿らしい話なのよ」

純子はちょっと今はまずいな、と思った。伸子が自信を失いかけている。こんなときに放火の疑いを持たれてるなんて言ったら……。

「刑事がどうとかって言ったでしょ」

「うん……。後で話すわ」

「今、話して。業務命令よ」

「ずるいんだから、**もう!**」

純子は渋々、昨日の刑事の言い分を話した。

(女社長に乾杯!)

(18) 「**もう**、ずるいんだから！」

(19) 「(略) 悪いけど、わたしあなたの小説、ほとんど読んでないから」

「でも斜め読みぐらいはしてるでしょ。ちゃんと本、贈ってるし」

「ばらばらめくる程度。別にあなたの本に限ったことじゃないのよ。わたし、今の小説にほとんど関心がないの」

「薄情だなあ、**もう**」愛子が頬をふくらませる。さくらは昔から現代小説を読まなかった。だから嫉妬というわけではなさそうだ。(空中ブランコ)

(19) 「**もう**、薄情だなあ」

また、「もう」は、(20)(21)のように、感情表現形式の重複形とともに用いられることがある。「腹が立ってたまらない」「楽しくてたまらない」のような評価感情の強さを表す。

(20) 「(略)『天皇や軍上層部に責任があるのは当然ただ、ひたすら流されて突き進んだ兵隊や国民の一人ひとりにも戦争責任はあるはずだ』。そうほざきやがった。俺は**もう**、腹が立って腹が立って腹が立って」有沢が、またふっと頬をゆがめた。(星々の舟)

(21) 「ほほう。もう一週間も続いていますか」

伊良部はその日も短い脚を強引に組んで和雄の話に聞きいつていた。

「ええ、**もう**楽しくて楽しくて。毎朝の日課になりました」

ここのところ和雄の話といえば水泳のことばかりだ。(イン・ザ・プール)

2.1.2.2. 単独使用の場合

＜感動詞的用法＞の「もう」は、(22)(23)のように、単独でも使用できる。

(22) 「実はね、ちょっと会ってもらいたい人がいるんだ」

「誰？」

「大学の先輩でね、T V局に勤めてるんだよ」

「その人がどうしたの？」

「お見合いしたいって」

「林君！」

「冗談、冗談」

「**もう**……。ラーメンおごってあげないわよ！」

「ごめん、ごめん。実はね、伸子さんにインタビューしたいんだってさ」(女社長に乾杯！)

(23) 「お昼、まだよね？」

「ああ、何も。起き抜けだから」

「じゃあ、すぐ作る。冷し中華でいい？」

「悪いね、いつも」「**もうッ**」

あや子は笑った目で永嶋を睨んだ。

(臨場)

2.1.3. 本節のまとめ

本節では、現代日本語における「もう」の多義的な意味・機能を＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞に分け、次のことを述べた。

- ① 本来的なく副詞用法＞の「もう」には、時間的意味を表す場合（A）と数量面での追加を表す場合（B）がある。
- ①-1 時間的意味を表す「もう」は、基本的に、現在・過去（非未来）を表す述語と共起すると、事態が実現した後であることを表し（A1）、未来のことを表す述語と共起すると、事態の実現が間近であることを表す（A2）。類義語「既に」との言い換え関係を見ると、現在・過去（非未来）のことを表していても、「既に」に言い換えられない場合がある（A3）。話し手の評価感情（事態の実現が予想より早いといった話し手の驚き）が前面化する場合は、現在・過去（非未来）のことであっても「既に」に言い換えられない。
- ①-2 数量面での追加を表す「もう」は、構文的位置が数量表現形式の直前に固定される（B）。「もう」の有無によって文の意味が変わってくる。
- ② ＜感動詞的用法＞の「もう」は、話し手の評価感情表出で用いられる（C～E）。＜副詞用法＞とは違って、文末にくるか（D）、単独で用いられる（E）点が特徴的である。「もう」が文末にくる場合は、構文的位置を文頭に変えることも可能である（C）。
- ①②の概略を典型例で示すと、次のようになる。

副詞用法	非単独使用	A1 「彼は もう 韓国に帰国しました」 A2 「彼は もう 韓国に帰国します」 A3 「 もう 帰ってきたの！」
		B 「韓国には もう 1回行きたいです」
感動詞的用法	非単独使用	C 「 もう 、ずるいんだから」 D 「ずるいんだから、 もう 」
	単独使用	E 「 もう ！」

次節では、本節で確認した「もう」と「既に」の言い換え関係をふまえ、両者の文体的な違いを確認しつつ、現代日本語における「もう」の＜副詞用法＞の特徴について述べる。

2.2. 類義語「既に」との比較

本節では、「もう」と類義関係にある「既に」を取り上げ、「もう」との比較を行う¹⁷。2.1 で述べたように、「もう」と「既に」は、相互に言い換えられる場合と言い換えられない場合がある。その概略をまとめると次のようになる。

用法と意味		「もう」	「既に」
副詞用法	時間的意味	○	△
	数量面での追加	○	×
感動詞的用法	話し手の評価感情表出	○	×

上記のように、「既に」には＜感動詞的用法＞が派生しておらず、「もう」との言い換えが可能になるのは時間的意味を表す場合のみである。また、時間的意味を表す場合でも、現在・過去（非未来）のことを表す 6)は、両者とも使用できるが、未来（あるいは以後）のことを表す 8)は「もう」しか使用できない。そして、現在・過去（非未来）のことを表す場合でも、話し手の評価感情が前面化する 7) のような場合も、「もう」の使用が適切である。

6) {**もう**／**すでに**} 結婚しています／結婚していました。

7) {**もう**／？**すでに**} 結婚したの！

8) {**もう**／***すでに**} 結婚しなさい／結婚しましょう／結婚するはずでした。

以下では、「もう」と「既に」の文体的な違いについて確認したあと、両者の＜副詞用法＞に見られる共通点と相違点について詳述することにする。

2.2.1. テキストタイプと「もう」「既に」

工藤（1985）、森田（1989）などの指摘のように、「もう」と「既に」には文体的な違いがある。次の表 1 に示したように、収集した用例においても、「もう」と「既に」の使用における量的違いが見られる。「既に」は地の文で使用され、「もう」は会話文での使用の方が多い。

表 1. テキストタイプ別用例の分布

副詞	もう		既に	
	会話文	地の文	会話文	地の文
用例数 (%)	853 (58.7%)	603 (41.3%)	26 (4.8%)	513 (95.2%)
合計	1456 (100%)		539 (100%)	

¹⁷ 本節は、全（2011）に基づいている。

さらに、「もう」と「既に」には、共起する語の接続関係による違いも見られる。両者の用例を共起する語の接続関係によって分類すると、次の表 2 ようになる。

表 2. 共起する語の接続関係による分類

	もう		既に	
	会話文	地の文	会話文	地の文
終止	778 (91.2%)	452 (75%)	23 (88.5%)	342 (66.7%)
中止	59 (7%)	117 (19.4%)	3 (11.5%)	112 (21.8%)
連体	16 (1.8%)	34 (5.6%)	-	59 (11.5%)
合計	853 (100%)	603 (100%)	26 (100%)	513 (100%)
	1456		539	

表 2 からは、次のようなことが確認できる。

- ①「もう」は、会話文でよく用いられ、終止における使用頻度が高い。
- ②「既に」は、「もう」より、非終止（中止・連体）における使用頻度が高い。特に、連体の場合は、「既に」の方が使用されやすい傾向がある。

以下では、上記の①②をふまえ、「もう」と「既に」が文のどの部分に現れるかに注目し、それぞれのテキストタイプにおける使用上の特徴について述べていく。

2.2.2. 会話文の場合

「もう」と「既に」の使用における量的違いは、特にくだけた会話文において顕著である。「既に」は、次の(24)(25)のようなくだけた言い方では使用されにくい。

- (24) 鮎太は物も言わずに、雪枝の前をすり抜けると、そこから駆け出そうとした。が、鮎太の鞆は雪枝の手に掴まれていた。

「なぜ逃げるの」

「だって——」

「駄目ねえ、羞しがることないじゃあない」

「だって——、**もう**、みんな帰っちゃった」

実際、鮎太は自分を殴りつけた上級生の何人かが校門を出て行ったのを見ていた。 (あすなろ物語)

- (25) 「ちょっと、タンマ」また声が裏返ってしまった。「話し合おう」

「だめだよーん。**もう**遅いんだもんね」 (空中ブランコ)

会話文の「既に」は、(26)(27)のようにデス・マス体の丁寧な言い方で用いられるか、丁寧体でない場合でも、(28)(29)のように、くだけた言い方で用いられているのではない。

- (26) 「(略) 近ごろのキャリアウーマンはおしなべて年齢不詳なものです。しかしよく見れば目尻には**すでに**多少のシワも出ておりますし、お肌は相応にくたびれておりますわ。(略)」 (椿山課長の七日間)
- (27) 「これまで勉強を続けてきたのもすべて女医者になるためです」
「しかし女が医者のような殺伐な仕事をしたいなど言えば、親兄弟から見放されるであろう」
「**すでに見放されました**」
「そうか……」 (花埋み)
- (28) 「悪いことをやってしまったかな」
「いや、そんなことはない。和解は**すでに出来ている**よ。こうして花をもって訪ねてきてくれたことで和解はうまれている。……ただ、二人とも、もとに戻れないだけのはなしだ」 (冬の旅)
- (29) 「(略) 君はこの街を作りだしたのが何ものなのか知りたくないのか？」
「知りたくないね」と影は言った。「俺は**既に**それを知っているからだ。そんなことは前から知っていたんだ。この街を作ったのは君自身だよ。(略)」 (世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

また、次の(30)は、改まった場面での使用である。このような場合は、「既に」を使用する方が適切であると思われる。

- (30) 「**すでにお亡くなりになった**みなさんは、ここ『SAC』において、極楽往生するための講習をお受けになっているわけです。(略)」 (椿山課長の七日間)

なお、(30)は非終止における「既に」の使用である。「既に」の非終止（連体）における使用については、2.2.3.2 で後述する。

2.2.3. 地の文の場合

上記の表 2 で確認したように、「もう」と「既に」が文のどの部分に現れたのかによって、両者の使用に違いが見られる。以下では、終止の場合と非終止の場合に分けて、「もう」と「既に」の使用上の違いを記述する。

2.2.3.1. 終止の場合

次の(31)(32)のように、「もう」と「既に」が終止に用いられた場合は、文体差を除けば、相互に言い換えることができると思われる¹⁸。

¹⁸ 地の文の例においても、次の「もう」は予想より早い実現を表し、「もう」を使用する方が適切な場合がある。次のような特性を表す文は地の文に限ったものではないが、収集した用例では、地の文の用例しか見当たらなかった。

〔一般主体の特性規定〕

・金のあるボクサー、たとえば世界チャンピオンなら、一日に片手に一本ずつの包帯を使ったらそれは**もう捨**ててしまう。
だが、ほとんどすべてのボクサーにとって、そのような贅沢は無縁のものである。(一瞬の夏)

〔個別主体の特性規定〕

・ある日、森川トオルがぼくの机に片手を突き、もう一方の手でじゃわじゃわと自分の顎のあたりを気ぜわしく撫でながら言った。髭の濃い森川は、朝きっちり髭を剃ってきて、夕方になると手のひらで撫でて**もう**音がでるほどに短い髭が伸びてきてしまうのだ。(新橋烏森口青春篇)

- (31) 女医になり、女性の患者の屈辱を救ってやる、という所期の目的そのものはすでに達成された。それだけではなく今や女権そのものの獲得運動を指導する立場にいた。(花埋み)
- (32) ジムの中はもう真夏の暑さだった。エディはランニングシャツとパンツだけの姿になった。剥き出しにされたその胸や足を見て、私は思わず眼をそらせてしまった。どこか病んでいるのではないかと心配になるほど衰えていたからだ。(一瞬の夏)

2.2.3.2 非終止の場合

前述したように、収集した用例を見ると、「既に」は、「もう」に比べ、非終止（中止・連体）における使用頻度が高い。特に、連体の場合は、「既に」の方が使用されやすい傾向があり、次の例(33)(34)のように、「もう」に言い換えられない（言い換えにくい）「既に」が見られる。連体修飾では出来事間の時間関係のみが問題になることから、事態の実現が予想より早いといった話し手の評価感情を伴う「もう」は使用されにくいのではないかと考えられる。一方、(35)(36)のように、連体における「もう」は全て「既に」に言い換えることができると思われる。「もう」が使用されたとしても、話し手の評価感情を伴っていないため、「既に」との言い換えが可能になる。

- (33) 総督府が、すでに発行した命令書を無視して払い下げを停止していたのも、この方針からすれば当然のことだった。これから罪人にしようという相手に払い下げをしては、あとでつじつまがあわなくなる。また、星の主要な利益源のひとつを断ちきっておいて、反抗の力を弱めておくに越したことはないからだ。(人民は弱し官吏は強し)
- (34) 彼にとって、手付かずの予想がそこにある事実を教えるのは、既に証明された定理を教えるのと同じくらい重要だった。(博士が愛した数式)
- (35) 「姉さん」
加恵は手を合わせて、もう十余年前に死んだ小姑に祈っていた。(華岡青洲の妻)
- (36) 周二はときどき防空壕の戸をあけて、さすがにもう謡の本を閉じている母親と、無言でうずくまっている姉に報告した。「これで五機やつつけた。だけど、まだまだいくらもくる」(楡家の人びと)

また、上掲した(33)(34)は共起する語が漢語動詞であり、(35)(36)は和語動詞であるという違いも見られる。連体修飾に現れた「もう」「既に」を、修飾する語が漢語動詞か和語動詞かで分類すると、次頁の表3のようになる。「既に」は和語動詞とも漢語動詞ともよく使用されるが、「もう」が漢語動詞と使用されたのは1例しか見当たらない。文体的に、「既に」は、漢語動詞となじみやすいと思われる。

表 3. 連体修飾節に用いられた和語動詞・漢語動詞の分布

	もう	計	既に	計
和語動詞	可能動詞(信じられるなど・5)、「一なる」(5)、存在動詞(ある／いる・4)、暮れる、死ぬ(4)、見える(3)、集まる、終わる、決まる、食う、過ぎる、など	49 (98%)	「一なる」(6)、存在動詞(ある／いる・3)、過ぎる(2)、終える(2)、買う、書く、切る、勤める、出る、馴染む、伸びる、走る、嘔く、見慣れる、など	51 (86%)
漢語動詞	出勤する ¹⁹	1 (2%)	引退する、開拓する、証明する、消滅する、達する、発行する、予想する、零落する	8 (14%)

2.2.4. 本節のまとめ

本節では、2.1 で確認した「もう」と「既に」の相互言い換えの関係をふまえ、共起する語の接続関係に注目しつつ、テキストタイプ別にどのような使用上の特徴があるのかを記述した。その内容をまとめると、次のようになる。

- ① 「既に」は「もう」に比べて小説の地の文のような書き言葉で使用され、会話文でもくだけた言い方では用いられない傾向がある。例えば、「だって——、もう、みんな帰っちゃった」(前掲例 24)のようなくだけた言い方では「既に」は使用されにくい。
- ② 「もう」と「既に」は、事態の実現後という時間的意味を表す点では共通している。しかし、「もう」とは違って、「既に」は事態の実現が予想より早いという話し手の驚きの感情評価は伴わない。収集した用例からは、特に地の文の連体修飾において、「既に発行した命令書を無視して払い下げを停止していた」(前掲例 33)、「既に証明された定理を教える」(前掲例 34)のように、「もう」に言い換えられない(言い換えにくい)「既に」の例が見られた。連体修飾では出来事間の時間関係のみが問題になることから、話し手の評価感情を伴う「もう」は使用されにくいのではないかと考えられる。

2.3. 明治期における「もう」の用法

以上、2.1～2.2 では、現代日本語における「もう」の多義構造を、類義語「既に」と比較しつつ確認した。本節では、明治期における「もう」の用例を取り上げ、現代との比較を行う²⁰。

まず、両時期における「もう」の用例分布は、次頁の表 4 の通りである²¹。

¹⁹ 「出勤する」の例は次の通りである。

・きょうは**もう**出勤した片岡先生はきょうに英雄にでもなったように、ひっぱりだこだった。(二十四の瞳)

²⁰ 本節は、全(2014a)に基づいている。

²¹ 明治期と現代に比較に用いた資料の詳細については、1.3を参照されたい。

表 4. 明治期と現代の「もう」の用例分布

		単独形式	重複形式	複合形式			合計	
		もう	もうもう	それはもう	まったくもう	その他		
明治期	地の文	1030 (55.3)	-	-	-	-	1030 (55.3)	1863 (100%)
	会話文	826 (44.3)	6 (0.3)	1 (0.1)	-	-	833 (44.7)	
現代	地の文	918 (48)	-	-	-	-	918 (48)	1912 (100%)
	会話文	982 (51.5)	-	2 (0.1)	5 (0.2)	5 (0.2)	994 (52)	

※「ほんとうにもう」「何ようもう」など、「それはもう」「まったくもう」以外の複合形式は「その他」として分類している。

表 4 からは、次のことが確認できる。

- ① 明治期では地の文で用いられやすいが、現代では会話文で多く用いられる傾向がある。これは、後述するように、明治期には「もう」が本来的な＜副詞用法＞で使用されており、＜感動詞的用法＞は萌芽的に見られるだけである点と関係すると思われる。
- ② 明治期には、現代には見られない「もうもう」といった「もう」の重複形式が見られる²²。

以下では、上記の①②をふまえて、明治期における「もう」と「もうもう」を対象に、その意味・機能を記述する。本来的な＜副詞用法＞を先に述べることにする。

2.3.1. 副詞用法の場合

本節では、明治期の「もう」の意味・機能について記述する。そして、わずかな用例数ではあるが、明治期にだけ見られる「もうもう」を取り上げる。

2.3.1.1. 「もう」について

収集した明治期の用例を見ると、＜副詞用法＞における違いは見られない²³。しかし、＜感動詞的用法＞においては、萌芽的なものが見られるのにとどまっている。

²² 収集した用例において、「もうもう」は、二葉亭四迷の作品から5例(「浮雲」：1例、「其面影」：2例、「平凡」：2例)、夏目漱石の作品(「行人」)から1例が見られる。

²³ 時間的意味を表す「もう」の用例は、＜会話文：628例(76%)＞＜地の文：840例(82%)＞で、時間的意味を表さない「もう」(＝数量面での追加を表す場合)は、＜会話文：197例(24%)＞＜地の文：190例(18%)＞である。後述するように、＜感動詞的用法＞として分類されるのは、「それはもう」の1例のみである。表4に示した明治期と現代の「もう」の用例分布も参照されたい。

まず、次の(37)～(46)は、「もう」が時間的意味を表す場合の用例である。現代と同様、現在・過去（非未来）のことを表す場合は、基本的に、類義語「既に」に言い換えられる²⁴。(37)(38)の「もう」は「既に」に言い換えることができる。

〔時間的意味を表す場合〕

α. 現在・過去（非未来）のことを表す場合

(37) こんな話をしているうちに、三味線や歌が聞え已んだので、純一は時計を見た。

「もう五時を大分過ぎています」

「道理で少し寒くなって来た」と云って、大村が立った。

(青年)

(38) 一風呂入って、汗を流して来る頃には、午飯の支度がもう出来ていた。赤い襷をかけた家の娘が茶湯台を運んで来た。

(田舎教師)

β. 未来のことを表す場合

(39) 「原さんから便がありますかえ」

「え、もう帰って来ます。先生も海城で病氣にかかって、病院に一月もいたそうで……来月の初めには帰って来る筈です」

(田舎教師)

(40) 「僕はもうこのまま家へも帰るまい、出て了おう。もうどう成っても構わん、これから先は暗黒の世の中だ。は、は、は」と妙な笑方をして、(略)

(其面影)

(41) 湯から上って、二人が板の間に据えてある器械の上に乗って、身長を測ってみた。広田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。

「まだ延びるかも知れない」と広田先生が三四郎に云った。

「もう駄目です。三年来この通です」と三四郎が答えた。

(三四郎)

(42) 「僕はこの恋に関係することが出来ません。いや、もう厭です。芳子を父親の監督に移したです」 (蒲団)

明治期においても、話し手の評価感情（驚き）が前面化された「もう」の使用が見られる。(43)は驚きを表す二次的なはたらきをするたずねる文²⁵である。(44)は「珍しい」といった話し手の意外性を表す文が後続している。それぞれ「仕度を終えたのが予想より早い」「外出がいつもより早い」という話し手の驚きが前面化されており、「既に」の使用は不適切であると思われる。

(43) 「まあもう一日二日は宜しいじゃ御座いませんか」とお兼さんは愛嬌に云って呉れた。自分が鞆の中へ浴衣や三尺帯を詰めに二階へ上り掛ける下から、「是非そうなさいましょ」と追掛るように留めた。それでも気が済まなかったと見えて、自分が鞆の始末をした頃、上り口へ顔を出して、「おやもう御荷物の仕度をなすったんですか。じゃ御茶でも入れますから、御緩くりどうぞ」と降りて行った。

(行人)

²⁴ 本論文では、「既に」についても、「もう」と同様の資料と方法を用いて明治期の用例を収集した。収集した用例では、「既に」に関しても、明治期と現代との間に意味・機能の違いは見られなかった。

²⁵ 本論文では、古座（1984）に従い、疑問文を次のように分類する。

- ・一次的なはたらきのたずねる文：相手に自分の知らない何かについてたずねたり、確認を求めたりしている文。
- ・二次的なはたらきのたずねる文：必ずしも答えをうけとることを求めてはいない、何かについての直接的な報道をしている文。

(44) 「そう、何か用があるの?」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、一寸上がったの」

「一寸でなくていいから、緩くり遊んでいらっしゃい。今に叔父さんが帰って来ますから」

「叔父さんは、**もう**、どこへか入らしたの。珍らしいのね」 (我輩は猫である)

また、(45)(46)は波線部から分かるように、話し手がかなり感情的になった場面である。このような場面においても、「もう」は、「絶望的な状態になった後」「駄目になった(死んだ)後」という時間的意味より、話し手の悲観的な評価感情(絶望・悲しみ)を強く表現する。そのため、(45)(46)でも「既に」は使用されにくいと考えられる。このように、明治期には、「もう」の<感動詞的用法>の萌芽として、時間的意味を表しながらも、話し手の評価感情が前面化された使用例が見られる。

(45) 「絶望だ! **もう**僕あ絶望だよ! 死ねといわれりゃ死ねもせぬ癖に、いつまでも……」と言い差して齒を喰緊って、目も鼻も一つに寄せると、熱涙がほろほろと頬を伝わる。 (其面影)

(46) 医師の注射はもう効がなかった。

母親の獻欵げる声が頻りに聞える。

其処に、戸口にけたたましい聲音がして、白地の紺を着た荻生さんの姿があわただしく入って来たが、ずかずかと医師と父親との間に割込んで坐って、

「林君!……林君! **もう**、とうとう駄目でしたか!」

こう言った荻生さんの頬を涙はホロホロと伝った。

母親はまた獻欵げた。 (田舎教師)

次に、(47)～(49)は、数量面での追加を表す「もう」の例である。収集した用例では、時間的意味を表す場合と同様、現代との違いは見られない。

(47) 「兄さん!」と小夜子が先ず声を掛けたが、振向かれて、急に俯目になり、「今仰有った事ねえ……」

「私が家を出る事かね?」

「ええ……**もう**一遍考え直して下さることは出来ませんか?」 (其面影)

(48) 「歩ければ、**もう**少しお歩きなさい。此処は汚ない。彼処まで行くと丁度休むに好い場所があるから」

「ええ」 (三四郎)

(49) 「まあ東京へ帰るまで待って下さい。東京へ帰るたって、あすの晩の急行だから、**もう**直です。その上で落付いて僕の考えも申し上げたいと思ってますから」

「それでも好い」

兄は落付いて答えた。 (行人)

2.3.1.2. 「もうもう」について

わずかに 6 例ではあるが、明治期には「もうもう」という形も見られる²⁶。収集された「もうもう」の用例は、全て会話文で用いられている。まず、次の(50)～(52)は事態の実現後という時間的意味とともに、話し手の評価感情が前面化された場合である²⁷。

- (50) 「貴方はまだ小夜の事が忘れられませんね。私が邪魔になって思う様にならなかったのも、それで私が憎くってならないのでしょうか？ ね、そうでしょう！ そんならそう蛇の生殺しになさらないで、寧ろ決然と離縁して行って下さい」哲也が黙っているの、で、「ね、貴方、私を離縁してあれを連れてらっしゃたら好いでしょう。(略) 私ももうもう覚悟しました。そんなに深く思込でらっしゃるものなら、もう仕方がない。
(略) (其面影)
- (51) 母は昨夕の暴風雨を非道く怖がった。殊にその聯想から出る、防波堤を砕きにかかる浪の音を嫌った。
「もうもう和歌の浦も御免。海も御免。慾も得も要らないから、早く東京へ帰りたいよ」
母はこう云って眉をひそめた。 (行人)
- (52) 「ですから、私は、貴方の前ですけど、もうもう男は懸々。そりゃあね、稀には旦那のような優しい親切なお方も有りますが、どうせ私のような者の相手になる者ですもの、皆そんな薄情な碌でなしばかりですわ」 (平凡)

一方、(53)は「もうもう」が感情表現形式の重複形と共起する場合で、「腹が立った状態になった後」という時間的意味ではなく、「腹が立ってたまらない」という話し手の評価感情を表しており、2.1.2.1 で述べた現代に見られる「俺はもう、腹が立って腹が立って腹が立って」(前掲例 20)のような使用と類似している。(53)のような「もうもう」の使用は、後述する(54)の「それはもう」とともに、明治期に見られる「もう」の＜感動詞的用法＞の萌芽的な存在として考えられる。

- (53) 「そのまた悪い文三の肩を持ってサ、私に喰って懸った者があると思召せ」
「アラ喰って懸りはしませんワ」
「喰って懸らなくてサ……私はもうもう腹が立て腹が立て堪らなかったけれども、何してもこの通り気が弱いシ、(略)」 (浮雲)

²⁶ 現代の用例でも、「もう」が連続して使われた例が1例見られた。

・未練のせいばかりではなかった。自惚れと笑われるかもしれないが、へたに別れようなどと切り出して逆上されるのが怖かったのだ。(略) あんな思いはもう、もう、沙恵の時だけでこりごりだ。(星々の舟)

²⁷ 「もうもう」の意味について、『日本国語大辞典 第二版』では、次のように述べている。

もうもう《副》「もう①(＝時間的に経過して、すでにその状態になるさまを表わす語)」を重ねて意味を強めた語。

*洒落本・通人三国師(1781)発「もうもう女郎買はさっぱりとじゅうずを切て仕舞やす」*滑稽本・浮世風呂(1809-13)三・上「山の恰好から何から今風で、最(モ)う最うふるひつく様だった」*人情本・春色梅児誉美(1832-33)初・一齣「モウモウどふも気が済ねへから其子によくよく私(わちき)の聞たことを口留して」*安愚楽鍋(1971-72)＜仮名垣魯文＞二・下「モウモウがいしゃもさきが見へてきちゃアあがったりだヨ」*十三夜(1895)＜樋口一葉＞「もうもう退(ひ)けてゐるには及びません」

2.3.2. 感動詞的用法の場合

最後に、1 例ではあるが、＜感動詞的用法＞と考えられる例を挙げる。「それゃアもう」という複合形式での使用である。話し手の評価感情を伴った相手への応答として用いられている。2.4 で後述するように、「もう」の複合形式は、現代になると多様な形で用いられるようになるが、明治期に既に「もう」の＜感動詞的使用＞の萌芽があったと考えられる。

(54) 「その事なら、ちらと聞きました」と叔母が受取ってくれた。「それはああした我儘者ですから、定めしお気に障るような事もいいましたろうから……」

「いや、決してお勢さんが……」

「それゃアもう」と一越調子高に云って、文三を云い消してしまい、また声を並に落して、「お叱んなさるも、あれの身の為めだから、いいけれども、只まだ婚嫁前の事ですから、あんな者でもね、余り身体に疵の……」

「いや、私は決して……そんな……」

(浮雲)

2.3.3. 本節のまとめ

本節では、明治期における「もう」の用例を取り上げ、現代の「もう」との比較を行った。両時期において違いが見られたのは、次の点である。

① 明治期の「もう」は本来の＜副詞用法＞で使用されている。

② ただし、明治期には「もう」の＜感動詞的用法＞が、萌芽的に存在していた。収集した用例では「私はもうもう腹が立て腹が立て堪らなかった」(前掲例 53)のように、「もうもう」が感情表現形式の重複形と用いられ、話し手の評価感情が前面化された使用例が見られる。また、「もう」の複合形式のうち、相手への受け答えで用いられる「それはもう」は、1 例ではあるが、明治期にも見られる。これらには時間的意味がなくなっており、もっぱら話し手の評価感情を表している。明治期に既に「もう」の＜感動詞的使用＞の萌芽があったことを示していると考えられる。

2.4. 感動詞的用法の特徴

以上、2.3 で述べたように、収集した用例を見ると、明治期では「もう」が本来的な＜副詞用法＞で使用されており、＜感動詞的用法＞は萌芽的な状態であった。本節では、現代語に特徴的な＜感動詞的用法＞の詳細を記述する²⁸。

「もう」の＜感動詞的用法＞の特徴は、次の①～⑤のような点である²⁹。

²⁸ 現代日本語における＜感動詞的用法＞の「もう」については、シナリオからも用例を補っている。

²⁹ 以下では、佐藤（2009）に従い、＜感動詞的用法＞の「もう」「まったく」「ちょっと」が単独でなす文のことを「一語文」と呼ぶ。鈴木（1972）では「独立語文」としている文のタイプである（鈴木1972の独立語文の定義については、注6を参照されたい）。佐藤（2009：212）では、奥田（1956）をふまえ、一語文を次のように規定している。

- ① 一語文：単独で文となる。
- ② 構文的位置：文頭でも文末でもよい。
- ③ 評価感情：否定的評価感情の表出でも肯定的評価感情の表出でも使用される。
- ④ 文体：くだけた言い方でしか用いられない。
- ⑤ 複合形式：「それはもう」「まったくもう」など、いくつかのタイプの複合形式がある。

以下、①～⑤の順に、「もう」の＜感動詞的用法＞の特徴を述べていく。

2.4.1. 一語文

2.1.2.2 で述べたように、＜感動詞的用法＞の「もう」は、単独で文となる点で、＜副詞用法＞と異なっている。次の(55)～(57)では「もう」が単独で使用されている。

- (55) 「実はね、ちょっと会ってもらいたい人がいるんだ」
「誰？」
「大学の先輩でね、TV局に勤めてるんだよ」
「その人がどうしたの？」
「お見合いしたいって」
「林君！」
「冗談、冗談」
「**もう**……。ラーメンおごってあげないわよ！」
「ごめん、ごめん。実はね、伸子さんにインタビューしたいんだってさ」 (女社長に乾杯！[前掲例 22])
- (56) おまえと神父は広間にいた。おまえは夏休みの宿題をして、神父はまた長い手紙を書いていた。教会に突っ込んでくるような車の音に、急ブレーキの音、ドアを乱暴に閉める音がつついた。
アカネはいつものように庭から入ってきて、縁側に腰かけるなり「ああーっ、**もうっ！**」と悔しそうに一声叫び、履いていた靴を両方とも庭に放り投げた。 (疾走)
- (57) 「お昼、まだよね？」
「ああ、何も。起き抜けだから」
「じゃあ、すぐ作る。冷し中華でいい？」
「悪いね、いつも」 「**もうッ**」
あや子は笑った目で永嶋を睨んだ。 (臨場[前掲例 23])

文は、主語と述語とのふたつの主要部分からなることを基本とする。このような文のくみだてをもつ文は、《二語文》と呼ばれている。二語文の主語と述語は、具体的なはなしあいのなかでは省略されることがあるが、省略されても、二語文であることにはかわりはない。二語文は、主語・述語の分化のない《一語文》と対立する（「雨だ！」）。(中略) 一語文は、文の構造的なタイプの体系のなかでは、かぎられた、特殊な文であって、二語文こそが「人間の言語の本質的な特徴」である。主語を、述語とともに文の一次的な成分とみることによって、文の構造はただしくとらえることができる。この見方は、言語学研究会の主語論、文の構造論を特徴づけるものであって、たとえば、奥田1956は、この原則を次のように説明している。(後略)

2.4.2. 構文的位置

2.4.1 のように「もう」が単独で使われるのではなく、文のなかにはいるときは、文頭にくることもあれば、文末にくることもできる。

まず、2.1.2.1 でも確認したが、文頭にくる「もう」には、次のような例が見られる。「だから一緒に歩きなさいっていったのに、もう」「来れないっていったじゃん、もう」「それ見てるだけで感動しちゃうんだから、もう」のように、「もう」の構文的位置を文末に変えてもよい。

- (58) そんな風に歩いていると危ないよ——そう声をかけようとした時、少女は何かに躓いたらしく、前に転んだ。途端に大声で泣きだした。

草薙はあわてて駆け寄り、少女を抱き起こした。膝から血が出ていた。

「あ、どうもすみません」母親と思われる女性が走ってきた。「**もう、だから一緒に歩きなさいっていったのに。**どうもすみません。ほんとうにもう、だから家で待ってればよかったのに」

娘を叱るより、こんな真夜中に火事場見物するのは控えたほうがいいといたかったが、草薙は黙って少女を母親に引き渡した。 (探偵ガリレオ[前掲例 16])

- (59) 「何でそこにいるのよ！」

由季は怒るようにいう。

「そっちこそ何で？」

健次がとぼけたようにいう。

「わたしはサンタが……。 **もうっ、来れないっていったじゃん！**」

「いったかな？」

「また無理したんでしょ」

由季がいうと、健次はふっと笑った。

(ラストクリスマス)

- (60) 「誰も立ち止まって聴いてなんかいないんだけどね、一所懸命歌ってるの。寒いじゃない、あそこ吹きさらしだから。ホッペなんて真っ赤になってて、でも必死で歌ってんのよ、**もう、それ見てるだけで感動しちゃうんだから**」 (その日のまえに)

次に、(61)～(64)は、「もう」が文末にくる場合である。「もう、ずるいんだから」「もう、薄情だなあ」「もう、うるさいなあ」「もう、水臭いなあ」のように、「もう」の構文的位置を文頭に変えることもできる。

- (61) 「それから、さっき純子さん、何か言いかけたわね」

「え？——ああ、馬鹿らしい話なのよ」

純子はちょっと今はまずいな、と思った。伸子が自信を失いかけている。こんなときに放火の疑いを持たれてるなんて言ったら……。

「刑事がどうとかって言ったでしょ」

「うん……。後で話すわ」

「今、話して。業務命令よ」

「ずるいだから、**もう**！」

純子は渋々、昨日の刑事の言い分を話した。

(女社長に乾杯！[前掲例 18])

- (62) 「(略) 悪いけど、わたしあなたの小説、ほとんど読んでないから」

「でも斜め読みぐらいはしてるでしょ。ちゃんと本、贈ってるし」

「ばらばらめくる程度。別にあなたの本に限ったことじゃないのよ。わたし、今の小説にほとんど関心がないの」

「薄情だなあ、**もう**」愛子が頬をふくらませる。さくらは昔から現代小説を読まなかった。だから嫉妬というわけではなさそうだ。

(空中ブランコ[前掲例 19])

- (63) 「目に焼き付けるな……」由季は取り上げた。

「……あ、それ、日垣が描いたのか？」

「うるさいな、**もう**……。ただの悪戯ですよ。一緒に飲んでた時、バーのカウンターでうっかり寝ちゃって。その時」

(ラストクリスマス)

- (64) 「そうだったんだ。てっきり、隠れて漫画描きたいからだとばかり思ってた」

「もちろん、おおかたそっちだけどね」可奈子はくすっと笑った。

「けど、水臭いなあ**もう**。もっと前に話してくれたら相談にだって乗れたのに」

(星々の舟)

2.4.3. 評価感情

「もう」は否定的評価感情でも肯定的評価感情でも用いられる。まず、用例数が多かった否定的評価感情表出の場合から見てみる。

1) 否定的評価感情の表出

次の(65)～(72)は、「もう」が否定的評価感情を表す場合である。前後の文脈や、口調を説明する文がつけくわえていることから、「もう」の否定的評価感情がはっきりしている³⁰。

[怒り・不満]

- (65) 椿は行き昏れた子供のように路上に佇み、黒い鞆の中から携帯電話機を取り出した。

☆のボタンを押す。長い発信音のあとで、マヤのあわただしい声のはね返ってきた。

「もしもし、なにによっ！ こっちはいま大変なんだから、急用じゃなかったら後にして」(略)「ど、どうしたんですか。もしや宗教戦争でも」

³⁰ 使用場面における感動詞の評価感情については、村上(1993)に従って記述している。村上(1993)は命令文の「しろ」「しなさい」を考察した研究であるが、「命令文の基本的な意味に根本的な変更をもたらすほどではないが、小詞や接辞、副詞、イントネーションは、その命令の程度の説明やつよさの表現のために一定の役割をはたしている」とし、命令文のふくみ・意味あい、場面的条件や語彙的な条件のなかで検討している。本論文でも、＜感動詞的用法＞における「もう」「まったく」「ちょっと」の具体的な評価感情を、村上(1993)に従い、使用場面とイントネーション、共起する文の語彙的な条件などに注目して記述している。村上(1993)に基づき、「もう」の＜感動詞的用法＞における特徴を示すと、次のようになる。

① 声の高さや強さ、音色がひとつの口調となって話し手から発せられ、聞き手はそこに「もう」の意味的なニュアンスを感じることができる。＜感動詞的用法＞では、「もう」の前後にポーズ（「、」「……」）を置くか、「モー」のようなひきのばしの音調や、「んもう」「モウッ」「もう！」のようなつよめの音調によって、話し手の感情が強く表現されていることが分かる。

② 小説のような文学作品では、口調や程度を説明することによって、あるいは「もう」が用いられた文（あるいは前後の文）の意味によって、「もう」の評価感情が伝わる。

「思い切ってつまらないことは言わないで。特別運送措置法の違反者が出たのよ。**もう、サイッテー！**
私の管理能力が問われる。きつと始末書じゃすまないわ。リストラよー！ 目の前まっくらよー！」

(椿山課長の七日間)

- (66) 「セツちゃん。**もう、サイッテー**、ちょーみじめ。ダンスの振り付けが変わったの、またあの子だけ教えてもらえなかったんだよ」

雄介はテレビを見たまま「ふうん」と喉を絞って返し、いやこれじゃだめだと思い直し、「へえ、なんだよ、それ、ひっでえなあ」とおおげさに笑ってみせた。

「ひどいよねえ」加奈子も笑う。「体育委員、なに考えてんだろ」

和美はまだ冷蔵庫のドアに隠れていた。

(ビタミン F)

- (67) 夜。かなり真剣に作っている信子と彰。

修二、大きな袋とさらにギターを抱えて戻ってくる。

修二 「あれ？ 二人だけ？ 後のヤツらは？」

彰 「みんな帰った」

修二 「(がっくり) なんだよ、もう。どーすんだよ。ほんととできるのかなあ」

彰 「焦るな。焦るな」

(野ブタ。をプロデュース)

[ののしり・叱責]

- (68) 「家裁の結果も聞いたのか」

「いや、そこまでは」

「審判不開始の決定だ。問題ねえだろう」

「それにしたって凶器準備集合ってのは物騒だ。一体やつは何をやらかしたんです？」

「知らねえ」

「**もう！** 惚けないでくださいよ。校長が知らないはずないでしょうが」

(臨場)

- (69) 「何」テレビ画面に顔を向けたままコウは返事をする。

「おこづかい、足りてる？」おそろおそろ訊く。

「へ？」コウは一瞬私をまじまじと見て、ふいとテレビに視線を戻す。「べつに足りてるけどくれるって言うならもらっときますよ」

「何それーずるーい、じゃああたしももらわなきゃわりにあわないー」

「あー**もう、マナっちうるさい**、耳元でがなるな」

(空中庭園)

- (70) 「カラオケだったらコウくんも呼ぼう、ね？ パパがいっしょならこないだみたいな騒ぎにならないから平気だよ、パパ、電話してコウくん呼んでよ」

「ばか言ってるじゃないよー、もう、ミーナいいかげんにしろよなあ」

(空中庭園)

また、「もう」は、次の(71)(72)のように、相手からの要求に対する受け入れ(承諾)の場合にも用いられる。しかし、(71)の「しょうがねえな」、(72)の「ビスチェを渋々脱ぐ」から分かるように、快諾ではなく、仕方なく受け入れる場面で使われている。

〔否定的評価感情を伴った受け入れ〕

- (71) 教室に戻ろうとしている修二。ヨシダ、大きな袋をかかえてやってくる。(略)

ヨシダ「ちょこっと手伝うだけでいいから！ 頼む！(頭下げ)この通り！」

修二 「もーしょうがねえな」

(野ブタ。をプロデュース)

- (72) 真理 「(母に)脱ぎなよ、それ」(略)

「それに、お母さんだけがビスチェ着たら、『お揃い』の感じがなくなるじゃん」

美奈子「生地は同じだから」

真理 「雰囲気は違っちゃう」

美奈子「でも……」

真理 「お願い」

美奈子「……もう」と、ビスチェを渋々脱ぐ。

(連弾)

2) 肯定的評価感情の表出

次の(73)～(75)は、「もう」が肯定的評価感情を表す場合である。下線部や波線部から分かるように、感動・感嘆や親しみの表明で用いられている。しかし、収集した用例に限って言えば、否定的評価感情を表す場合とは違って、さそいかけ文における使用(前掲例 68 のように、さそいかけ文が後続する場合)は見当たらない。また、話し手が女性であるという特徴も見られる³¹。

〔感動・感嘆〕

- (73) 「ほら、ストリートミュージシャンっているじゃない、ギター弾いて歌ってる子。いたのよ、それが。一人で歌ってるんだけど、かーわいいの、カッコいいの。外国の歌でね、曲もちょっと変わってるんだけど、いい声してるの、細くて、高くて、ボーイソプラノみたいな。顔もかわいいし、小柄でスリムだし、もう、サイコーなのよ」

(その日のまえに)

- (74) 「誰も立ち止まって聴いてなんかいないんだけどね、一所懸命歌ってるの。寒いじゃない、あそこ吹きさらしだから。ホッペなんて真っ赤になってて、でも必死で歌ってるのよ、もう、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」

(その日のまえに[前掲例 60])

〔親しみの表明〕

- (75) まずはホテル内の会席料理店から運ばれた御膳弁当を食べ、三人で世間話を交わす。「もう、田中君たらあ」麗奈が田中相手にしきりにシナを作った。

(空中ブランコ)

このように、「もう」は、肯定的評価感情の表出でも使用されるが、後述する「まったく」は、もっぱら否定的評価感情の表出でしか用いられない。＜感動詞的用法＞における「もう」と「まったく」の共通点と相違点については、5章で記述することにする。

³¹ 収集した用例には、次のように、否定的評価感情を表す「だめじゃない」が反語的に用いられ、相手への親しみを表明する場合も見られる。

・「ねえ」と、甘えた声で真奈美が言った。「何考えてるの?」「うん、べつに」「んもう、だめじゃない」笑みを含んだ目でにらみながら、「そういう時は、嘘でも、お前のこと考えてたって言わなきゃ。ほら言ってみて」(星々の舟)

2.4.4. 文体

<感動詞的用法>における「もう」の文体的な特徴を見ると、丁寧な言い方では使用されにくく、くだけた言い方での使用が特徴的である。2.4.2 で述べたように、「もう」は<副詞用法>でも、類義語「既に」に比べて、くだけた会話文で使用されやすいという特徴がある。

- (76) 心の中で毒づきながら切符を改札機に通すと、なにかの不具合か、ゲートが閉じて通せんぼをされてしまった。

「あーあ、**もう**、なにやってんの、カッコ悪ーう」

和美は、おかしように笑った。

(その日のまえに)

- (77) 「今日ってあの家庭教師の日なのか」

「そうよ、さっきから言ってるじゃないのー、**もう**いやんなるー、このパパの無関心ぶり」 (空中庭園)

次の(78)のように、たとえシテクダサイの文が後続しているとしても、かなり親しい間柄での使用で、改まった態度での丁寧な言い方ではない³²。

[部下から上司へ (刑事・親しい関係)]

- (78) 「家裁の結果も聞いたのか」

「いや、そこまでは」

「審判不開始の決定だ。問題ねえだろう」

「それにしたって凶器準備集合ってのは物騒だ。一体やつは何をやらかしたんです？」

「知らねえ」

「**もう**！ 惚けないでくださいよ。校長が知らないはずないでしょうが」

(臨場[前掲例 68])

2.4.5. 複合形式

2.3 の表 4 に示したように、現代日本語には、明治期より多様な形で、「もう」の複合形式が使用されている。また、「もう」の複合形式は、もっぱら<感動詞的用法>としてのみ使用される³³。

- (79) 「(略) 私が何か訊いても、ろくに返事もしません。お風呂に入り、上がって来て落ち着くと、私を前に座らせて、『俺は会社を辞める』と言い出したんです」

「びっくりなさったでしょう」

「はい、**それはもう**。何しろ今いる家だってローンは払い始めたばかりですし、転職、再就職のあてがあるわけでもないのです。(略)」

(女社長に乾杯！)

- (80) 「まさか俺にその監視役をやれとでも？」

湯川は頭を掻いた。

³² 佐藤 (1992) でも、シテクダサイの文は、目下から目上へ、目上から目下へ、同等の相手へと、制限なく使われていることが指摘されている。

³³ 「ああもう」は複合形式とは言い難いかもしれない。「ああもう」は、「も」「もうっ」「んもう」などのように、「もう」の音声的バリエーションとして考えることができる。

「その、まさか、だよ。監視といっても四六時中見張ってるわけじゃない。ただ、隣の部屋の様子に少し気をつけて、何か変わったことがあれば連絡してほしい、ということだ。要するにスパイをしろってことだ。全くもう 図々しい というか、失礼なことをいう連中だ」 (容疑者 X の献身)

(81) 「もう、だから一緒に歩きなさいっていったのに。どうもすみません。ほんとうにもう、だから家で待ってればよかったのに」 (探偵ガリレオ)

(82) 「俺に訊くなよ」「何よもう、使えないなあ」 (星々の舟)

(83) 「ああもう、アタマくる。あいつらったら、聞いてよ、聡美のことをねえ」
「いいよもう」と、聡美は慌てて袖を引っぱった。 (星々の舟)

収集した複合形式の用例には、「それはもう」「まったくもう」が多く見られる。両形式とも文のなかにはいることもあれば、単独で使用されることもある。以下、「それはもう」「まったくもう」の用例を示しながら、具体的に記述する。

1) 「それはもう」

「それはもう」は、相手の発話に対する話し手の肯定の受け答えとして用いられる。(84)は相手に聞かれた事柄に対する肯定の受け答えで、感動詞「はい」とともに用いられている。(85)(86)は相手の発言を承認する(相手に同意する)場合である。「そりゃもう」という形でも使用される。また、(85)「たいへん(大騒ぎになった)」、(86)「絶対に(しゃべらない)」のように、相手への同意を強調する副詞を伴うことも特徴的である。

(84) 「(略) 私が何か訊いても、ろくに返事もしません。お風呂に入り、上がって来て落ち着くと、私を前に座らせて、『俺は会社を辞める』と言い出したんです」

「びっくりなさったでしょう」

「はい、それはもう。何しろ今いる家だってローンは払い始めたばかりですし、転職、再就職のあてがあるわけでもないのです。(略)」 (女社長に乾杯！[前掲例 79])

(85) 「大騒ぎになったでしょうね」

「そりゃもう、たいへん。だけど、そういう階段でしょ。前から危ない危ないって言われたから、ああやっぱりねって」 (火車)

(86) 「す、すると何かね？ 五百万、貸してもらえるのかね？」

「はい。しかし、これは絶対に口外していただいては困るのです。社長の立場というものがありますので。その辺は、世慣れた方でいらっしゃいますから、よくお分かりと思いますが……」

「そ、そりゃもう、絶対にしゃべりやしませんや！」 (女社長に乾杯！)

(87)は、波線部から分かるように、後続する「ふるいつきたくなるようなというタイプだね」という肯定的な答えが予想され、「それはもう」はその予想通りという、話し手の態度も表していると思われる。

(87) 「ところがさ、ここからが問題よ。いねえんだ、容疑者が」

「え？」

「いねえんだよ。それこそレントゲンにかけるとして私生活を洗っても、女房には愛人のアの字もない。男の影が全然見えない。まるっきりだ。呆れるほど清廉潔白よ」

「女房の外見は？」

「**そりやもう**、ふるいつきたくなるようなというタイプだね。亭主もそれで惚れ込んだんだ」

本人に知られたら怒鳴られてしまうだろうが、本聞の頭に浮かんだのは、コーポ川口で会った紺野信子の顔だった。彼女も美人だった。そして、しっかり者だった。(火車)

2) 「まったくもう」

「まったくもう」は、話し手の否定的評価感情の表出で用いられる。肯定的評価感情も表すことができる「もう」とは違って、「まったくもう」はもっぱら否定的評価感情しか表せない。「ったくもう」という形でも使用できる。

(88) 「まさか俺にその監視役をやれとでも？」

湯川は頭を掻いた。

「その、まさか、だよ。監視といっても四六時中見張ってるわけじゃない。ただ、隣の部屋の様子に少し気をつけて、何か変わったことがあれば連絡してほしい、ということだ。要するにスパイをしろってことだ。**全くもう** 図々しいというか、失礼なことをいう連中だ」(容疑者 X の献身[前掲例 80])

(89) 「三十を過ぎてから自分にうぬぼれるようになったのよ。(略)でも、人間関係ってそういうものじゃないし、仕事って助け合ってするものだし——」

「うるさい」とがった声を発した。さすがに感情を害した。

夫婦の間にはしばらく沈黙が流れる。「**まったくもう**……」尚美がため息混じりに口を開いた。「三十八にもなって、許せないことが多いんだから」(イン・ザ・プール)

(90) 「(略) あなたの罪をそそぐためには、佐伯木知子さんの告白を録音するのが一番ですわ」

「そんなもの、どこにあるんですか」

「**ったくもう**。何だって鞆の中に入ってるって言ってるでしょうに。(略)」(椿山課長の七日間)

2.4.6. 本節のまとめ

本節では、現代語に特徴的な「もう」の＜感動詞的用法＞について、次の①～⑤のような点を述べた。

- ① 単独で文となる。
- ② 文頭にも文末にもくる。
- ③ 「もう」は、否定的評価感情（怒り・不満、ののしり・叱責）の表出でも、肯定的評価感情（感嘆・感動、親しみの表明）の表出でも用いられる。
- ④ 「もう」は くだけた会話文で用いられるという文体的特徴を持つ。

- ⑤ 「それはもう」「まったくもう」など、いくつかのタイプの複合形式が見られる。「それはもう」は聞き手への肯定的な受け答えで、「まったくもう」は否定的感情表出で用いられる。

2.5. 本章のまとめ

本章では、「もう」を取り上げ、本来の＜副詞用法＞から派生的なく感動詞的用法＞までの意味・機能について述べてきた。「もう」の＜感動詞的用法＞について、＜副詞用法＞との連続性をまとめると、次のようになる。

副詞用法	単独形式	非単独使用	述部の前	A「彼は もう 帰国しました」 B「 もう 帰ってきたのか！」
感動詞的用法			文頭	C「 もう 、ずるいんだから」
			文末	D「ずるいんだから、 もう 」
		単独使用		E「 もう ！」
		複合形式		F「 それはもう 」「 まったくもう 」

- ① A「彼はもう帰国しました」とB「もう帰ってきたのか！」では、「もう」は時間的意味を表す＜副詞用法＞として使用される。「もう」の構文的位置は述部の前である。
- ①-1 事態が実現した後という時間的意味を表すAは「既に」に言い換えることができる。ただし、Bは、時間的意味と話し手の予想より早いという評価感情が複合化されて、「既に」に言い換えられなくなる。「既に」にはB～Fのような使用は見られない。
- ①-2 「もう」と「既に」を比較してみると、「既に」はくだけた会話文では使用されにくく、小説の地の文のような書き言葉で使われる。くだけた会話文での使用が特徴的である「もう」の方から、＜感動詞的用法＞が派生している。
- ② C「もう、ずるいんだから」では、「もう」が文頭にきている。話し手の評価感情の表出であって、事態が実現した後という時間的意味は表さない。そして、Cは、D「ずるいんだから、もう」のように「もう」の構文的位置を文末に変えてもよくなる。文頭にあろうと文末にあろうと、「もう」は話し手の評価感情を表出する＜感動詞的用法＞で用いられる。話し手の評価感情が前面化された点で、BとCは連続しているように思われる。
- ③ ＜感動詞的用法＞の「もう」は、Eのような単独使用が可能になる。さらに、Fのように、複合形式でも使用される。明治期と現代の用例を比較してみると、明治期には、＜副詞用法＞が中心となっており、＜感動詞的用法＞は萌芽的に存在している（「もう僕あ絶望だよ！」（前掲例45））。収集した明治期の用例にはC～Eのような使用は見られなかったが、Fに関しては「それはもう」の用例が1例だけ見られた。

- ④ 現代語に特徴的な＜感動詞的用法＞の「もう」は、否定的評価感情（非難・叱責）の表出でも、肯定的評価感情（感動・親しみの表明）の表出でも用いられる。＜副詞用法＞と同様、くだけた言い方での使用が特徴的で、「それはもう」「まったくもう」以外にも、複数の複合形式を持つ。

以上、本章では、「もう」の＜感動詞的用法＞を中心に、「もう」の意味・機能を述べてきた。次章（3章）では、「もう」と同様、話し手の評価感情表出の＜感動詞的用法＞が派生している「まったく」を取り上げ、＜感動詞的用法＞の派生とその特徴について述べる。

第3章 「まったく」の意味・機能

本章では、「まったく」を取り上げる。第2章と同様、まず、現代語の「まったく」の多義構造を述べ(3.1)、類義関係にある「全然」との比較を行い(3.2)、「まったく」にだけ＜感動詞的用法＞が派生していることを確認する。そして、明治期では「まったく」の＜感動詞的用法＞がどうなっているのかを確認し(3.3)、現代語の「まったく」の＜感動詞的用法＞の特徴について記述する(3.4)。

3.1. 現代語の「まったく」の多義構造

本節では、現代日本語における「まったく」の多義構造について記述する。「まったく」は、多義的な意味・機能を持っており、主に次のような使用が見られる。

- 1) 彼は英語が**まったく**分からない。
- 2) **まったく**、しつこい人だな。
- 2') しつこい人だな、**まったく**。
- 2'') 「もう一度説明してよ」「**まったく!**」太郎が呆れたように首を振った。

1)の「まったく」は、否定述語と共起し、完全否定を表す副詞として働く。しかし、2)の「まったく」は、話し手の否定的評価感情を表出する＜感動詞的用法＞で使用され、2')のように構文的位置が文末でもよくなる。そして、2'')のように、単独でも使用される。完全否定を表す副詞には「全然」もあるが、「全然」には2)～2'')のような用法は見られない。1)の「まったく」のみ「全然」に言い換えることができる。

類義語「全然」との比較は、3.2 で詳述するが、本節では、「全然」との言い換え関係を視野に入れ、「まったく」しか使用できない場合を明確にしつつ、「まったく」の多義構造を記述する。以下、本来の＜副詞用法＞を記述した上で、派生的な＜感動詞的用法＞について述べる³⁴。

³⁴ 「まったく」と「全然」の用例収集に用いた、現代日本語の資料は以下の通りである。用例出典の詳細については、稿末の【用例出典】を参照されたい。

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』の1980年以降の小説／村上春樹(1982)『羊をめぐる冒険(上・下)』／宮部みゆき(1989)『火車』／角田光代(1994)『まどろむ夜のUFO』／柳美里(1995)『フルハウス』／東野圭吾(1998)『探偵ガリレオ』／奥田英朗(2000)『イン・ザ・プール』／重松清(2000)『ビタミンF』／山本文緒(2000)『ブラナリア』／浅田次郎(2001)『椿山課長の七日間』／唯川恵(2001)『肩ごしの恋人』／石田衣良(2002)『アキハバラ@DEEP』／吉田修一(2002)『パーク・ライフ』／角田光代(2002)『空中庭園』／伊坂幸太郎(2003)『重力ピエロ』／奥田英朗(2003)『空中ブランコ』／重松清(2003)『疾走(上・下)』／綿矢りさ(2003)『嘸りたい背中』／村山由佳(2003)『星々の舟』／坂元裕二(脚本)・小泉すみれ(ノベライズ)(2004)『ラストクリスマス』／横山秀夫(2004)『臨場』／重松清(2005)『その日のまえに』／東野圭吾(2005)『容疑者Xの献身』／三浦しをん(2005)『まほろ駅前多田便利軒』

3.1.1. 副詞用法の場合

本節では、「まったく」の本来的な＜副詞用法＞について記述する。2章で記述した「もう」とは異なって、「まったく」は単独で用いられる＜副詞用法＞がある。そこで、以下では、「まったく」の＜副詞用法＞を非単独使用の場合と単独使用の場合に分けて述べる。

3.1.1.1. 非単独使用の場合

非単独使用の「まったく」は否定形式とも肯定形式とも共起することができる³⁵。類義語「全然」との言い換え関係が考えられる否定形式と共起する場合から見ていく。

1) 否定形式と共起する場合

前述したように、「まったく」は否定形式と共起し³⁶、完全否定を表す。否定形式と共起する場合は、完全否定を表す点で類義関係にある「全然」に言い換えられる。

(91) 「美都は順番を間違えていないか。まず美都が結婚する決心が決まって、それから親だろう？(略)」

「そうじゃそうだけど……どんなご両親がまったく知らないで、いきなり籍入れられないよ」(プラナリア)

(92) 「そうじゃないんだ。うちのやつがね、肉を食べられないもんだから、いつも魚と野菜ばっかしなんだ」

「まったく食べられないの？」

「うん。魚も頭なんかついてると気持ちが悪いって言うんだ」 (一瞬の夏)

(93) 「(略) 酒でもおごってくれよ。今日ぼくはお金がまったくないんだ。だからね、そういうお願いをしているの」 (新橋烏森口青春篇)

しかし、次の(94)は、使用場面からも分かるように、話し手の否定的評価感情(呆れ)が前面化された場合である。(94')のように、「まったく」が文全体と関連しているとも解釈することができ、この場合は＜感動詞的用法＞に近づく。(94')は「全然」に言い換えてもよいが、(94')では「全然」の使用は不自然である。

(94) 廊下のつき当たりの部屋から、剣呑なやりとりが洩れていた。

扉の前で、椿山は耳をそばだてた。

「まったく話の通じん人たちだな。いいかね、そもそも役所というものは、住民を管理するための機関ではないのだよ。そんな仕事だったら何も役人の手をわずらわさなくとも、コンピューターでこと足りるだろう。(略)」

父の声である。あろうことか冥土の役人に説教をたれているらしい。 (椿山課長の七日間)

(94') 「まったく話の通じん」人たちだな」

(94'') 「まったく「話の通じん人」たちだ」な」

³⁵ 「まったく」と共起する語の特徴については、鈴木(1996)、原田(1981)などにおいて既に明らかになっている。鈴木(1996: 463)の指摘通り、「まったく」は「肯定表現とも否定表現とも結び付いて」用いられる。

³⁶ 「ない」は品詞としては形容詞であるが、本論文では、存在動詞「ある」の否定形式とみなす。

2) 肯定形式と共起する場合

「まったく」が肯定形式と共起する場合は、共起する語のタイプに特徴がある。「まったく」は主に「異なり」「同一」「欠如」を表す語との共起し、「完全に」の意味で用いられる（「完全に異なる」「完全に一致する」「（ある属性が）完全に欠けている」）。類義語「全然」と言い換えられるのは、「異なり」の場合である。以下に、それぞれの具体例を示す。

α. 「異なり」（「違う」「異なる」「別だ」など）を表す語と共起する場合

- (95) 「アリは、この間、ああいう負け方をしたけど、今度は**まったく違う**闘い方をすると思うんだ。そうじゃなければ、アリはグレイテストでも何でも無い、ただのボクサーということになる。きっと、違う戦法を考え出すと思うんだ、アリがアリなら、ね」
(一瞬の夏)
- (96) 「プログラムの構造がわかれば、細部を変えて**まったく別な** AI 型サーチエンジンとして発表できます。
(略)」
(アキハバラ@DEEP)

β. 「同一」（「同じだ」「同感だ」「——通りだ」など）を表す語と共起する場合

- (97) 中央に据えた本物の幌馬車の向こうから、電話に応える和夫の声が聞こえてくる。
「もともとが古い物なんですから、**まったく同じ**物というのは……。え？ ああ、はい、それだったら何とか可能だと思いますけど」
(星々の舟)
- (98) 「でもね、俺が見ていたかぎりでは、あんな大差の判定が下される試合ではなかったと思うんだ。確かにアリは優勢だった。勝ったと思う。しかし、十一対三というような差があったとは、どうしても考えられない」
すると、内藤は**まったく同感**というように頷いた。
「そう、あの試合には決定打がなかったからね。(略)」
(一瞬の夏)

γ. 「欠如」（「無縁だ」「無知だ」「無用だ」など）を表す語と共起する場合

- (99) 「悪い冗談としか思えませんでしたよ」
おそらく突然の訃報に接したときには、誰もが「悪い冗談」だと思ったことだろう。エネルギーな婦人服第一課長は、死や病のイメージと**まったく無縁**だったはずだ。
問わず語りにマスターは続ける。
(椿山課長の七日間)
- (100) 考えてみれば、ここまで実に危ない綱渡りの連続だった。ボクシングの業界に**まったく無知**といってよい若僧が、ボクサーのトレードを計画し、東洋戦までマッチメーカーしようとしたのだ。うまくいくとは誰も思っていなかったに違いない。
(一瞬の夏)

「異なり」「同一」「欠如」を表す語のほかには、次の(102)(103)のように、話し手の驚きの評価感情を中心とする「驚く」「初耳だ」などとの共起が見られる。この場合も「全然」に言い換えられない。

- (101) 「君はいくつだ？」

「十九です」

「十九か……。全く驚いたな」

(女社長に乾杯！)

(102) 「この会社でマンションを持ってるってことなんですね？」

「さようです。全く初耳ですよ」

「誰が使ってるのかしら？」

と伸子は首をかしげた。

(女社長に乾杯！)

また、次の(103)～(105)のように、「ひどい」「悪い」など、話し手の否定的評価感情が前面化される場合も「全然」とは言い換えられない。

(103) 「それで、仕方ないかって思ってたら、いきなり弁護士を雇って離婚するから慰謝料を払えって。それも三千万」

「それはひどい話ですよ」

「ひどいよね。メイドの服を着せたぐらいで」

「はい？」

「コスプレなんてどこのうちだってやってることじゃない」

「いや、それは……」

「ご飯にマヨネーズをかけるのはやめてくれとか、そんな些細なことまで言いだすし」

「あの、ご飯にマヨネーズっていうのも……」

「まったくひどい女に引かかったものだよ」伊良部が拗ねたように唇をすぼめた。(イン・ザ・プール)

(104) 突然、受付から、

「キャーッ！」

という悲鳴が耳を打った。

「どうしたの？」

一斉にみんなが駆け寄る。伸子も走り寄って、息を呑んだ。

チョコレートの中は、ネズミの死骸が入っていたのだ。

「全く性質の悪いいたずらだ！」

と三枝が腹立たしげに言って、紙袋の中へ、ネズミごと箱を放り込んだ。

(女社長に乾杯！)

(105) 「——で、どうだった？」

「思った通りですよ」

「やっぱり——」

「あのマンションを担保にして借りてたんですね。全くけしからん奴だ！」

「五百万円ね……」

伸子はため息をついた。

(女社長に乾杯！)

3.1.1.2. 単独使用の場合

前述したように、「まったく」には＜副詞用法＞の単独使用が見られる。単独で用いられた「まったく（だ）」は、相手の発言に対する話し手の同意を表し、当然「全然」との言い換えもできなくなる。(107)(108)のように、「ね」「なあ」などの終助詞を伴うこともできる。ここでは「まったく同感です」という言い方(3.1.1.1「同一」を表す語と共起する場合)との連続性から＜副詞用法＞と位置づけたが、このような単独使用の＜副詞用法＞は、＜感動詞的用法＞に近づいているように思われる。

(106) 水筒にもたつぷりと水を入れた。次にズボンのポケットに家に置いてあった現金のぜんぶをつつこんだ。

「ピクニックみたいね」と娘は言った。

「**まったく**」と私も言った。

(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

(107) ロープには三十センチおきに足をかけるための結びめがついていた。これが〈塔〉の先端まで本当につづいていたとしたら、我々はずいぶん時間を節約できることになる。

「祖父よ。間違いないわ。すごく細かいところに気のつく人なの」

「**まったく**ね」と私は言った。

(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

(108) 「こいつは凄いやつなんだ。俺がプロに入った時もう世界ランキングに入っていたんだけど、それから十年、まだランキングに入っている。これは世界チャンピオンにならなくとも、やっぱり凄いことだと思うんだ」

内藤は頁を繰った。そこには東洋のランキング表が載っていた。しばらくそれを眺めていた内藤が、

「**まったく**なあ……」と溜息をついた。

(一瞬の夏)

(109) 「それにしても私たち、何だか初対面じゃないみたい。大学教授とスタイリストなんて、ふつう接点がないじゃないですか。たまたまエレベーターの中でお会いして、こんなふうに話がはずむなんて嘘みたいね」

「**まったく**です。僕らはよほど相性がいいんでしょう。それとも、前世の因果、とか」(椿山課長の七日間)

さらに、収集した用例では、1 例ではあるが、「まったく」が否定的評価感情を伴う場合が見られる。次の(110)は、波線部からも分かるように、話し手の否定的評価感情を伴った同意表明である。

(110) 「おはようございます」彼のほうから挨拶した。

「おはようございます。今朝も冷えますね」

「**全く**」彼は顔をしかめてみせた。

(容疑者 X の献身)

以上、本節では、類義語「全然」との言い換えを確認しつつ、＜副詞用法＞における「まったく」の意味・機能を述べた。次節では「全然」には派生していない「まったく」の＜感動詞的用法＞について述べる。

3.1.2. 感動詞的用法の場合

＜感動詞的用法＞の「まったく」は、話し手の否定的評価感情表出で用いられる。2 章で記述した「もう」にも話し手の評価感情を表出する＜感動詞的用法＞が派生しているが、「まったく」は否定的評価感情しか表せない点で「もう」と異なる。「まったく」の＜感動詞的用法＞の特徴や「もう」との比較については、3.4 と 5 章で詳述することにして、以下では、＜副詞用法＞との違いを中心に、「まったく」の＜感動詞的用法＞の概略を述べる。

3.1.2.1. 非単独使用の場合

まず、＜副詞用法＞との構文的違いがはっきりする、非単独使用の場合から見てみる。3.1.1.1 で述べたように、＜副詞用法＞の「まったく」は、否定形式とも肯定形式とも共起するが、肯定形式の場合は、「異なり」「同一」「欠如」を表す語や、驚きや否定的評価感情を表す語と共起し、共起する語のタイプに特徴が見られた。しかし、＜感動詞的用法＞では、そのような特徴がなくなる。そもそも「まったく」が述語と直接関係しなくなる＜感動詞的用法＞では、どのような文でも用いられ、話し手の否定的評価感情（呆れ・嘆き）を表す。

また、＜感動詞的用法＞では「まったく」の構文的位置にも特徴がある。＜副詞用法＞の場合は、基本的に、「まったく」が共起する語の前に位置するが、＜感動詞的用法＞の場合は、(111)(112)のように文頭か、(113)(114)のように文末にくる。また、(111')～(114')のように、その逆になってもよい。(111'')のように「まったく」が述部の前にくると＜副詞用法＞で用いられるようになる。

(111) 「ここんとこ、上の連中が患者を回してくれはくてさあ。うちら、もう二週間も注射打ってないんだよね」
太っちょの医師が鼻の穴を広げている。「**まったく** 内科は融通が聞かないんだよなあ。風邪はすべて心身症にしろって言ってるのに」
(イン・ザ・プール)

(111') 「内科は融通が聞かないんだよなあ、**まったく**」

(111'') 「内科は**まったく**融通が聞かないんだよなあ」

(112) 「それより心配なのは、やっぱり君のことなんだ」工藤はいった。「僕が共犯でないことはいずれわかるだろう。でも刑事たちは、君に対する疑惑は捨てていない。これから何かとうるさくつきまってくるのかと思うと憂鬱になる」
「それは仕方ない。だって、富樫があたしのことを探してたのは事実みたいだから」
「**全く**、あの男も、何を思って今さら君にまわりつこうとしたのか……。死んでもまだ君を苦しめるなんてなあ」工藤は渋面を作った。
(容疑者 X の献身)

(112') 「あの男も、何を思って今さら君にまわりつこうとしたのか……、**全く**」

(113) 「だけど電車のなかで崎陽軒の箱を開けたらさあ。シウマイばかり三十個も入ってて、ご飯がないの！
お弁当じゃなかったのよ！ ちゃんと確認して買ってほしいっての、まったく」 (まほろ駅前多田便利軒)

(113') 「**まったく**、ちゃんと確認して買ってほしいっての」

(114) 電話が鳴ると、急いで取り上げる。

「ああ、お前か」

「何だ、あなたなの」

とがっかりした様子を隠しもしない。

「悪かったな」

尾島がムッとしたような声を出す。(略)

また電話が鳴った。あの人ったら、しつこいんだからね、全く！

「はい、今度は何です？」

と受話器を取るなり訊くと、

「もしもし」

と男の声ではあるが、夫よりぐっと若い声である。

(女社長に乾杯！)

(114') **全く**、あの人ったら、しつこいんだからね！

次の(115)の「呆れる」、(116)の「頭にくる」のように、「まったく」が否定的評価感情を直接的に表す文で用いられた場合は、(117)のように、述語が省略されることもある。(117)はその場面から、「まったくこの男は呆れたものだ」のように読み取ることができる。また、(118)「無神経な編集者」、(119)「大した嘘つき」などのように、否定的評価感情を表す名詞とも用いられる。

(115) 「すみません、実は僕、十五なんです」

「えっ？」

文ちゃんはぼかんとした。

「ほんとに？」

「どうしても金が欲しかったものだから、つい十八だって嘘ついちゃって」

文ちゃんが思わずため息をつく。

「**まったく**、最近のガキには呆れるわ。そんなの雇って、うちが営業停止にでもなったらどうしてくれるのよ。おお、こわ。で、学校には行ってないの？」

(肩ごしの恋人)

(116) 萌はカウンターに頬杖をつき、上目遣いでるり子を眺めた。

「ねえ、思い切ってヨリを戻したら。信之、まだ離婚に同意してないんでしょう」

るり子は憤慨した顔つきになった。

「**まったく**あいつときたら、今になってぐだぐだ言い出すんだから、頭にきちゃう。判子をなかなか捺さないのは、慰謝料を値切ろうって魂胆なのよ。あんな男とは思ってもみなかったわ」

「違うって、信之はるり子と別れたくないのよ」

「あんな頭の悪い女と浮気しといて？」

(肩ごしの恋人)

(117) 「先生お医者さんの無念って何ですか？」愛子が聞いた。(略)

「医局員時代、ぼくは内科にもいたね。小さな子供が治療の甲斐もなく亡くなると、担当したみんなが泣いたね」

そうだろうな。胸が張り裂けるとはこのことにちがいない。

「吊いのカラオケをやろうって誘っても、みんな乗ってこなかったもんね」

「だから供養の意味だって」

まったく、この男は。いつか絶対に小説にしてやる。わたしは、転んでもただでは起きないのだ。

(空中ブランコ)

- (118) 感情を押し殺し、電話を切った。なんだ、気に入らないなら突き返してみろ。原稿を欲しがる出版社ならいくらでもある。ろくな部数も刷らないくせに。

腹の中で毒づいたら胃のあたりが熱くなり、小さく吐き気を催した。愛子は顔をゆがめる。**まったく**、無神経な編集者め。

(空中ブランコ)

- (119) てのひらで涙を拭いながら、暁は頬をゆがめて笑った。あんまり単純な嘘だから、ついだまされてしまった。**まったく**、おふくろもたいした嘘つきだ。いや、あの家の連中はどいつもこいつもみんな嘘つきだ。

(星々の舟)

- (120) もちろん、このチェストの件も萌が担当したわけではなく、去年入社したばかりの二十三歳の松下美樹という女の子がやったミスだ。彼女がせめて申し訳なさそうな顔をしていればまだ可愛げがあるのだが、デスクで知らん顔を決め込んでいる。**まったく**、どいつもこいつもコノヤローだ。

(肩ごしの恋人)

さらに、＜感動詞的用法＞では、「ったく」という形でも使用される³⁷。

- (121) 「いいってばもう、行こうよ」と聡美が言った。「せっかく私の誕生日なんだがら、もうやめてよ。嫌なことはさっさと忘れるが勝ち。ね？」

「ばか、そんなふうだからつけ込まれんのよ」と可奈子が息巻く。

「**ったく**、お人好しなんだから。怒る時はちゃんと怒らなくちゃだめじゃん」

(星々の舟)

- (122) 「どこかで落としちゃったの、時計」

「うっわ、間抜けえ」

言いかけた健介は、聡美が左手首を握りしめているのを見て口をつぐんだ。

「お前、まだ気にしているのかよ、それ」(略)

「しょうがねえな、**ったく**」

その場で駆け足をしながらぶちきりっぽいに言い、

「ほらよ」(略)

聡美は、手の中を物に目を落とした。

健介自慢のダイバーズウォッチだった。

(星々の舟)

3.1.2.2. 単独使用の場合

＜感動詞的用法＞の「まったく」は、(123)(124)のように、単独でも使用される。

³⁷ 「まったく」の＜感動詞的用法＞については、鈴木（1996）において詳しく述べられている。鈴木（1996：466-467）では、「まったく」が次第に主観的に自分の判断や主張を強調したり、相手の判断に強く同意したりする用法を発展させていって、「まったく！」という単独使用が生じるようになり、さらには「ったく！」という形で感動詞的に使用されるようになることが指摘されている。

- (123) 「(略) 今がいちばん大事な時だろうって言うのさ。浮かび上がれるかどうかは今度のチャンスを生かすかどうかにかかってる、ってね」
「それは俺もそう思うけど、でもそのことと……」
「つまり、ママはね、あんたたちはまだ若いんだから、子供はまた作れるって言うわけさ。**まったく!**」
内藤の語調はいつになく激しいものだった。
「ということは……」
私がそこまで言いかけてやめると、内藤は頷きながらあとを引き取った。
「……そういうことさ。子供が生まれたら、頑張りきれなくなるからって」 (一瞬の夏)
- (124) 「お前……」 くわえて火をつけながら、貢は言った。
「すぐ向こうへ帰るのか」
「ああ。そのつもりだけど」
「すぐって、すぐか」
「俺だってそんなに暇じゃない」
「で? またそれっきりになっちゃうつもりか」
黙っていると、「**まったく**……」 貢はあきれたように首を振った。
「お前もうガキじゃあるまいし。いつまで拗ねてるつもりだ」
「拗ねる?」 暁は眉を寄せた。 (星々の舟)

3.1.3. 本節のまとめ

本節では、現代日本語における「まったく」の意味・機能を＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞に分け、次の点を述べた。

- ① 本来的なく副詞用法＞は、非単独使用の場合と単独使用の場合に分けることができる。
 - ①-1 非単独使用の場合、「まったく」は否定形式と共起し完全否定を表す(A)。肯定形式とは「異なり」(B1)、「同一」(B2)を表す語との共起が特徴的で、「完全に」そのようであることを表す。そのほか、「驚く」「ひどい」のような話し手の驚きや否定的評価感情を表す語を伴った文とも共起する(B3)。類義語「全然」とは、基本的に、完全否定を表す場合(A)に言い換えられる。肯定形式と共起する場合は、「異なり」を表す場合(B1)にだけ言い換えが可能と考えられる。
 - ①-2 単独使用の場合(C)は、相手への同意を表明する。ただし、これは＜感動詞的用法＞と位置づけた方がいいかもしれない。
 - ② ＜感動詞的用法＞の「まったく」は、非単独でも(D、E)単独でも(F)使用される。非単独使用の場合、「まったく」は文頭にも文末にもくる。話し手の否定的評価感情表出で用いられる。
- ①②の概略を典型例で示すと、次のようになる。

副詞用法	非単独使用	A 彼は まったく 話が通じない。 B1 彼の性格は父親と まったく 違う。 B2 彼の性格は父親と まったく 同じだ。 B3 彼の言動には まったく 驚いた。
	単独使用	C「今日も寒いな」「 まったく（だ） 」
感動詞的用法	非単独使用	D「 まったく 、しつこい人だな」 E「しつこい人だな、 まったく 」
	単独使用	F「 まったく！ 」

次節では、本節で述べた「まったく」と「全然」の言い換え関係をふまえ、両者の文体的な違いを確認しつつ、現代日本語における「まったく」の＜副詞用法＞の特徴を述べる。

3.2. 類義語「全然」との比較

本節では、「まったく」と類義関係にある「全然」を取り上げ、両者の比較を行う。3.1.1 で述べたように、「まったく」と「全然」は、相互に言い換えられる場合と言い換えられない場合がある。その概略を示すと、次のようになる。

用法と意味				「まったく」	「全然」
副詞用法	非単独使用	否定形式と共起	完全否定	○	○
		肯定形式と共起	「完全に」の意味	○	△
	単独使用	相手への同意表明		○	×
感動詞的用法		話し手の否定的評価感情表出		○	×

上記のように、「まったく」と「全然」は、＜副詞用法＞の非単独使用において共通点が見られる。「全然」は、完全否定を表す副詞として働く点で「まったく」と共通しているが、肯定形式との共起においては、共起する語のタイプがより制限的である。例えば、「違う」のような「異なり」を表す語とは両者とも共起できるが、「同感だ」のような「同一」を表す語とは「まったく」しか共起しない。

- 3) 彼は英語が {**まったく／全然**} 分らない。
- 4) 会場の雰囲気は前とは {**まったく／全然**} 違う。
- 5) 彼の話には {**まったく／*全然**} 同感だ。

本節では、以上のことをふまえ、共起する語に注目しつつ、テキストタイプ別に両者の使用上の違いを見ていくことにより、「まったく」と「全然」の共通点と相違点を明らかにしていく。

3.2.1. テキストタイプと「まったく」「全然」

まず、テキストタイプによる「まったく」と「全然」の用例分布を示すと、次の表 5 の通りである。

表 5. テキストタイプ別用例の分布

副詞	まったく		全然	
テキストタイプ	会話文	地の文	会話文	地の文
用例数 (%)	164 (31.6%)	321 (62%) 34 (6.4%)	262 (68.2%)	122 (31.8%)
合計	519 (100%)		384 (100%)	

※ 地の文の「まったく」のうち、34 例は内的独白の用例数である。

表 5 からは、「まったく」と「全然」に文体差があることが確認できる。収集した用例を見ると、「まったく」は地の文でよく用いられるのに対し、「全然」は会話文での使用が多い傾向が見られる。また、「まったく」には内的独白での使用も見られる。

さらに、表 5 を用法と共起する語によって細分化して示すと、次の表 6 のようになる。

表 6. 用法と共起する語による分類

	地の文		会話文					分類 に迷 う例	合計
	副詞用法		副詞用法			感動詞的用法			
	非単独使用		非単独使用		単独 使用	非単独 使用	単独 使用		
	否定	肯定	否定	肯定					
まったく	218 (42)	103 (19.8)	46(1) (8.7)	41 (7.9)	5 (0.96)	54(33) (10.4)	2 (3.9)	16(1)	519 (100%)
全然	109 (28.4)	13 (3.9)	223 (58.1)	39 (9.6)	-	-	-	-	384 (100%)

※ 内的独白の用例数は、記述の便宜上、会話文の()内に提示し、百分率の表示も割愛する。また、「まったく」話の通じ人たちだ(前掲例 94)のように、＜副詞用法＞とも＜感動詞的用法＞とも考えられる用例については、分類に迷う例として示している。

表 6 からは、次のような傾向が見出される。

- ①「まったく」は会話文では否定形式とも肯定形式とも共起するが、地の文では否定形式との共起が多い。
- ②「全然」は、テキストタイプを問わず、否定形式との共起が多い。

上記の①②から、「まったく」と「全然」の文体差は、否定形式との共起において顕著であることと言える。すなわち、「まったく」と「全然」は否定形式と共起する点で共通しているが、会話文で

は「全然」が用いられやすく、地の文では「まったく」が用いられやすい傾向がある。しかし、肯定形式との共起においては、会話文でも地の文でも「まったく」の方が用いられやすいと言える。

以下、本節では、以上のことをふまえ、会話文と地の文における「まったく」と「全然」の共通点と相違点を述べる（「まったく」の内的独白での使用については、3.4.4で述べることにする）。

3.2.2. 会話文の場合

前述したように、会話文では「全然」の方がよく用いられ、そのほとんど（約 85%）³⁸が否定形式と共起する場合である。「全然」に比べその使用頻度は低いが、次の(125)(126)のような場合は、「まったく」を用いることもできる（「まったく」の用例は、3.1.1.1 の例(91)～(93)を参照されたい）。

(125) 「高校時代に読んだわ。でも今の高校生って『異邦人』なんてぜんぜん読まないのよ。この前図書館で調査したの。あなたはどんな作家が好きなの？」

「ツルゲーネフ」

「ツルゲーネフはそんなたいした作家じゃないわ。時代遅れだし」

「そうかもしれない」と私は言った。 (世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

(126) 「いいのかい、コーヒーなんか」

「うん、エディさんも認めてくれているんだ、コーヒーは。一日に一杯か二杯くらいなら構わないって。

……それに、今度は減量の心配は全然ないしね。むしろ、もっと欲しいくらいだから、いいんだよ」

(一瞬の夏)

会話文での使用が特徴的な「全然」は、次の(127)(128)のように、単独で使用されることが多い。相手の質問に対する応答の場合で、「全然痛めてない」「全然聞こえなかった」の述語が省略された場合である³⁹。

(127) 「コウちゃん、腰とかは痛めてない？」

「ううん。全然」首を横に振る。

「じゃあ、疲れてるんだよ」

(空中ブランコ)

(128) 「どこかおかしい様子はなかった？」

「そうねえ……。急いでたわね。何か電話帳ひっくり返してさ。番号を搜してたんじゃない？」

「そして電話してたのね。話は聞こえなかった？」

「全然。ちょうど他のお客が来てオーダー取ってたからね」

(女社長に乾杯！)

³⁸ 表6で示したように、収集した「全然」の＜会話文：262例＞のうち、223例が否定述語と共起する場合である。

³⁹ 収集した用例のなかで、完全否定を表す「まったく」の単独使用は、次の1例が見られた。「全然」とともに使用されている。

・「覚えてないんです……」「まったく？ 全然？」わかっているのに思い出せないふりをしてやがるのか？やがて、片瀬が小さく一言った。「最初は、五月でした」最初？(火車)

肯定形式と共起する場合、「全然」は、「違う」「いい」「平気だ」などとの共起が特徴的である。(129)の「違う」は「似ていない」、(130)「いい」(131)「平気だ」は「気にしない」という意味で用いられ、肯定形式でありながらも、語彙的に否定的意味を含んでいる。「全然」も完全否定に近い意味で用いられている⁴⁰。それに対し、3.1.1.1 で述べたように、「まったく」は、語彙的に否定的意味を含んでいない「同感だ」「驚く」などとも共起するなど、共起する語のタイプがより豊富である。

(129)「兄弟なのに、**ぜんぜん**違うな、ものの考え方が。お兄ちゃんに訊いてみる。校則を守るのは生徒の義務なんだ。それを守れないんだったら、学校に来る資格がないんだ。お兄ちゃんはそういうところ、ちゃんとよくわかってたぞ。(略)」
(疾走)

(130)「で、一日入院しましたがけれど、もう平気です。ご心配おかけしました」
電話のハラダミズエの声は、この前酒場で会ったときよりも落着いて聞こえた。
「ああ、それじゃあよかった……」
「本当にせっかくのいい気分のときに、すみませんでした……」
「いや、そんなのは**ぜんぜん**いいんです」
と、ぼくは言った。
(新橋烏森口青春篇)

(131)「家出してきたの？」
「……うん」
「一人で？」
「あたりまえだろ」
「家出して、どうするの、これから」
わからない、とは答えたくないから、「だいじょうぶだよ」と言った。「**ぜんぜん**、平気だから」
エリは「べつに心配して訊いたわけじゃないけど」と返す。そっけない口調に、やっと昔のエリの面影が覗いた。
(疾走)

⁴⁰ 工藤（2000：116）では、「語彙的になんらかのかたちで否定的意味をもっている一方、文法的には＜肯定的＞である（ネクサスの否定ではない）とすれば、共時的にも歴史的にも副詞の共起に揺れが起こるのも不思議ではないように思われる」と指摘し、「全然」には、次のような連続性があることを述べている（①～③の番号は筆者による追記）。

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| ①＜文法的否定形式＞ | ぜんぜん知らない |
| ↓ | |
| ②＜語彙的否定形式・
文法的肯定形式＞ | ぜんぜん無学だ
ぜんぜん平気だ（かまわない） |
| ↓ | |
| ③＜文法的肯定形式＞ | ぜんぜんいい |

収集した用例では、③語彙的にも否定的意味をもっていない肯定形式との共起として、「かつこいい」「普通だ」などのような例が見られた。野田（2000）、服部（2007）など近年の研究において注目される「程度が非常にはなはだしい」ことを表す用法である。

- ・アキラはＩＣカードのゲートの両側に腕をかけるとステンレスのバーを飛び越えた。電子の警告音が鳴り響いたが、無視してボックスもゲートを突破した。最後に続いたイズムがいう。「やっぱりアキラさんは実戦派だね。クルークのソフトを書いているときより、**ぜんぜん**かつこいいよ」 エレベーターのなかから戦いの女神が叫んでいた。「イズムくん、早く」（アキハバラ@DEEP）
- ・「(略) なんの音？」 「なんでもない。受話器を持つ手を替えただけ」 「まじめに聞きなさいよ。あんたの問題なんだから。それでね、ご主人とその女のあいだにも子どもがいるの、ふたり。でもその子たちは**ぜんぜん**普通なんですって。水原さんはね、自分が生きているうちはいいけど死んだらご主人に家土地を乗っ取られて、自分の子どもは施設に入れられちゃうんじゃないかって心配してるのよ。(略)」(フルハウス)

表 5 と表 6 で示したように、肯定形式と共起する場合は、会話文でも地の文でも「まったく」の方が用いられやすい。「まったく」と「全然」が共起する語のタイプについては、次節の地の文の場合でまとめて述べることにする。

3.2.3. 地の文の場合

前述したように、地の文の場合は、否定形式と共起する場合でも肯定形式と共起する場合でも、「まったく」が用いられやすい。収集した用例から「まったく」と「全然」が共起する語のタイプを整理すると、次の表 7 のようになる。A、B、D は会話文でも見られるが、C の「無知だ」「無関係だ」などの漢語との共起は、地の文でよく見られる⁴¹。

表 7. 共起する語のタイプ

	文法的 否定形式	文法的肯定形式			
		A「異なり」	B「同一」	C「欠如」	D その他
まったく	動詞 形容詞	違う 異なる 別だ 逆だ など	同じだ 同感だ 一通りだ など	無縁だ 無知だ 無用だ 無意味だ 無関係だ など	驚く 初耳だ ひどい 悪い ややこしい など
全然		違う 別だ	-	-	いい 平気だ

表 7 で示したように、「全然」に比べると、共起する語のタイプにおいて、「まったく」の使用範囲は広い。収集した用例を見る限り、両者に共通する A「異なり」を表す語との共起においても、「全然」は「違う」との共起が多く、「まったく」に比べて共起する語のバリエーションは少ないように思われる（「まったく」用例は、3.1.1.1 の例(95)～(105)、「全然」の用例は 3.2.2 の例(129)～(131)を参照されたい）。

3.2.4. 本節のまとめ

本節では、3.1 で確認した「まったく」と「全然」の言い換え関係をふまえ、共起する語に注目しつつ、テキストタイプ別にどのような使用上の特徴があるのかを述べた。その内容をまとめると、次のようになる。

⁴¹ 工藤（2000：115-116）では「全然」にも「無意味だ」「無学だ」などの＜欠如＞の意味を表す語と共起することが指摘されている。しかし、収集した用例では「欠如」と共起する例が見当たらなかったため、暫定的に、共起しないタイプとしている。

① 3.1 では、＜副詞用法＞の非単独使用において、両者に次のような共通点（A）と相違点（B）があることを確認した。

A 「まったく」と「全然」は、否定形式と共起し完全否定を表す点で共通している。

B 肯定形式との共起においては、「全然」の方が共起する語のタイプがより制限的である。

② 収集した用例を見る限り、A と B は、テキストタイプ別に次のような使用上の違いを見せる。

②-1 「まったく」と「全然」の文体差は、否定形式との共起において顕著である。「まったく」と「全然」は否定形式との共起する点で共通しているが、会話文では「全然」が用いられやすく、地の文では「まったく」が用いられやすい。

②-2 肯定形式との共起においては、テキストタイプを問わず、「まったく」が用いられやすい。「まったく」と「全然」が共起する語のタイプを示すと、次の通りである。

共起する語のタイプ（肯定形式の場合）		副詞の使用	
		まったく	全然
「異なり」	「まったく違う／異なる／別だ…」 「全然違う」	○	○
「同一」	「まったく同じだ／同感だ…」	○	×
「欠如」	「まったく無縁だ／無知だ…」	○	×
その他	「全然いい／平気だ（＝気にしない）」	△	○
	「まったく驚く／初耳だ…」	○	×
	「まったくひどい／悪い…」	○	×

以上のように、収集した用例では、「まったく」は地の文でよく用いられるが、会話文に用いられると、否定形式とも肯定形式とも共起する点で、「全然」より使用範囲が広いことが確認できる。

3.3. 明治期における「まったく」の用法

以上、3.1～3.2 では現代日本語における「まったく」の多義構造を、類義語「全然」と比較しつつ記述した。本節では、明治期における「まったく」の用例を取り上げ、現代との比較を行う。

まず、明治期と現代における用例の分布を形式別に示すと、次頁の表 8 のようになる。

表 8. 明治期と現代の「まったく」の用例分布（形式別）

		単独形式			複合形式		その他	合計	
		まったく	まったくだ	ったく	まったくもう	ったくもう			
明治期	地の文	229 (79.8)	-	-	-	-	7 (2.1)	236 (82.2)	291 (100%)
	会話文	43(3) (15)	6 (2.1)	-	-	-	2(1) (1.9)	51(4) (17.8)	
現代	地の文	211 (60.5)	-	-	-	-	2 (0.8)	213 (61)	367 (100%)
	会話文	111(16) (31.8)	3(1) (0.9)	15 (4.3)	2(1)	3 (0.9)	2 (0.8)	136(18) (39)	

※ 内的独白の用例数は、記述の便宜上、会話文の（ ）内に提示し、百分率の表示も割愛する。また、「まったくの」「まったくは」「まったくもって」を「その他」として分類している。

表 8 からは、次のことが言える。

- ① 両時期とも「まったく」は基本的に地の文で多く使用される。ただし、現代の方が明治期に比べて会話文での使用が多い傾向が見られる。表 8 から両時期のテキストタイプ別用例分布を取り出して表にすると、次のようになる。

時期	テキストタイプ	用例数(%)	合計
明治期	地の文	229 (83.3%)	275 (100%)
	(内的独白)	3 (1.1%)	
	会話文	43 (15.6%)	
現代	地の文	211 (62.4%)	338 (100%)
	(内的独白)	16 (4.8%)	
	会話文	111 (32.8%)	

- ② 明治期には、＜感動詞的用法＞に限定される「ったく」「まったくもう」「ったくもう」の使用が見られない。

以下では、上記の①②をふまえ、明治期における「まったく」「まったくだ」を対象に、その意味・機能を記述する。

3.3.1. 「まったく」について

前述したように、収集した用例の量的分布を見ると、明治期の「まったく」は地の文での使用が非常に多く、本来的なく副詞用法＞で使用されることが考えられる。両時期の「まったく」の用例を用法と共起する語によって細分化して示すと、次の表 9 のようになる。

表 9. 明治期と現代の「まったく」の用例分布（用法別）

	地の文		会話文						合計
	副詞用法		副詞用法			感動詞的用法		分類 に迷 う例	
	非単独使用		非単独使用		単独 使用	非単独 使用	単独 使用		
	否定	肯定	否定	肯定					
明	51 (18.6)	178 (65.4)	11 (4)	32(3) (12)	-	-	-	-	272(3) (100%)
現	158 (49)	53 (16.5)	31 (9.6)	18 (5.6)	5 (1.6)	41(16) (12.7)	2 (0.6)	14 (5)	322(16) (100%)

※ 内的独白の用例数は、記述の便宜上、会話文の（ ）内に提示し、百分率の表示も割愛する。また、「まったく話の通じん人たちだ(前掲例 94)」のように、＜副詞用法＞とも＜感動詞的用法＞とも考えられる用例については、「分類に迷う例」として示している。

表 9 からは、次の点が確認できる。

- ① 明治期には＜感動詞的用法＞の使用は見られない。
- ② ＜副詞用法＞の非単独使用においては、共起する語のタイプに違いが見られる。明治期には、現代とは違って、肯定形式との共起の方がより多い。

上記の①②のように、収集した用例に限って言えば、明治期には＜感動詞的用法＞での使用が見られず、＜副詞用法＞における肯定形式との共起において現代との違いがあるように考えられる。

3.3.1.2 で述べるように、肯定形式と共起する場合にのみ、現代には見られない「まったく」の使用が見られる。そこで、以下では、明治期における「まったく」の＜副詞用法＞を否定形式と共起する場合と肯定形式に共起する場合に分け、現代との違いを中心に記述する。

3.3.1.1. 否定形式と共起する場合

収集した明治期の用例では、「まったく」が否定形式と共起する場合は、現代との違いが見られない。以下に、明治期の用例を挙げておく。

(132) それから二日程代助は全く外出しなかった。三日目の午後、電車に乗って、平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢って、三千代の為に充分話をする決心であった。 (それから)

(133) (略)「あなたわたしをどうしてくれる気なの」とか、「こうしていて、わたしの行末はどうなるでしょ

う」とか、なかなか一朝一夕に解決の出来ぬ難問題を提出する。要するに末造が女房の病気に試みた早出遅帰の対症療法は全く功を奏せなかったのである。(雁)

- (134) 舟は島を右に見てぐると廻った。波は全くない。これで海だとは受け取りにくい程平だ。赤シャツの御蔭で甚だ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思ったから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。(坊っちゃん)

3.3.1.2. 肯定形式と共起する場合

上述したように、「まったく」が肯定形式と共起する場合において、明治期と現代の間に違いが見られる。以下、明治期の用例を提示しつつ、述べていく。

まず、次の(135)(136)のような「まったく」は、明治期にも現代にも見られる。肯定形式ではあるが、語彙的に否定的意味を含んでいる「異なり」「欠如」を表す語と共起する場合である。

α. 「異なり」（「違う」「異なる」「別だ」など）を表す語と共起する場合

- (135) 加須街道方面とは全く違った感じをかれに与えた。彼方はしんとしている。人気に乏しい。娘なども余り通らない。概して活気に乏しいが、此方はどの家にもこの家にも糸を繰る音と機を織る音とが間断なしに聞える。(田舎教師)

β. 「欠如」（「無縁だ」「無知だ」「無用だ」など）を表す語と共起する場合

- (136) 主人が新聞を手から置くことを予期しないと見える。そしてあらゆる新聞雑誌に肖像の載せてある大石が、自分で名を名告ったのは、全く無用な事であって、その無用な事をしたのは、特に恩恵を施してくれたのだ位に思っているのかも知れない。(青年)

しかし、次の①～③においては、現代との違いが見られる⁴²。

⁴² 収集した用例では、「同一」を表す語との共起においても、現代に比べ共起する語のバリエーションが豊富であるように思われる。①は現代でも見られるが、②のような使用は、明治期に特徴的である。

①「まったく同じだ／——の通りだ」のタイプ

- ・「じゃ、歩く事にしよう」と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。(略) 町並が次第に立派になる。仕舞には牛込の神楽坂位な繁昌する所へ出た。ここいらの店付や人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であった。長蔵さんの様なのは殆ど見当らない。(坑夫)
- ・外部から見ると、其所が大変能く兄の誠吾に似ていた。だから、よく知らない人は、この兄弟の性質を、全く同一型に属するものと信じていた。(それから)
- ・内ン中の鮑ッ貝、外へ出りゃ蜆ッ貝、と友達に囃されて、私は悔しがって能く泣いたッけが、しかし全くその通りであった。どういふものだか、内でお祖母さんが舐るようにして可愛がってくれるが、一向嬉しくない。反て蒼蠅くなくて、出るなと制める袖の下を潜って外へ駆出す。(平凡)

②「まったくNだ／Nの結果だ／Nのお蔭だ」のタイプ

- ・これは寧ろ平岡の悪いのではない。全く自分の過である。「私、本当に済まない事をしたと思って、後悔しているのよ。けれども拝借するときは、決して貴方を瞞して嘘を吐く積りじゃなかったんだから、堪忍して頂戴」と三千代は甚だ苦しうに言訳をした。(それから)
- ・家が貧しく、到底東京に遊学などの出来ぬことが清三にも段々意識されて来たので、遊んでいても仕方がないから、当分小学校にでも出た方が好いという話になった。今度月給十一円でいよいよ羽生在の弥勒の小学校に出ることになったのは、全く郁治の父親の尽力の結果である。(田舎教師)
- ・ところが杉原の方では、妙な引掛りから、宗助の此所に燻ぶっている事を聞き出して、強いて面会を希望するので、宗助も已を得ず我を折った。宗助が福岡から東京へ移れる様になったのは、全くこの杉原の御蔭である。杉原から手紙が来て、愈事が極ったとき、宗助は箸を置いて、「御米、とうとう東京へ行けるよ」と云った。「まあ結構ね」と御米が夫の顔を見た。(門)

- ①「すべて」「ことごとく」の意味で使用される場合
- ②「まるで」の意味で使用される場合
- ③「暖かい」「大きい」など状態性の語と共起する場合

以下、①～③の順で述べていく。

第一に、明治期には「まったく」が「すべて」「ことごとく」の意味で用いられる例が見られる。(137)～(139)のように、「葉が落ちる」「出す」「隠れる」などのような出現（または出現しない状態）を表す動詞と共起し、「葉がことごとく落ち尽している状態」「顔をすべて出している様子」「口と口髭と鼻の大部分がすべて隠れている様子」を表す。

(137) 夜半の曇で竹の葉が真白になっていることもあった。ラケットを捌いて校庭に立っているかれの瘦削な姿を人々は常に見た。解けやらぬ小川の氷の上にはあおじが飛び、空しい枝の桑畠にはつぐみが鳴き、榛の根の枯草からは水鶏が羽音高く驚き立った。櫛や栗の葉は全く落ち尽して、草の枯れた利根川の土手は唯一帯に代赭色に塗られて見えた。田には大根の葉がひたと捨てられてあった。(田舎教師)

(138) 宗助は一層のこと、万事を御米に打ち明けて、共に苦しみを分って貰おうかと思った。

「御米、御米」と二声呼んだ。

御米はすぐ枕元へ来て、上から覗き込むように宗助を見た。宗助は夜具の襟から顔を全く出した。次の間の灯が御米の頬を半分照らしていた。

「熱い湯を一杯貰おう」

宗助はとうとう言おうとした事を言い切る勇気を失って、嘘を吐いて胡魔化した。(門)

(139) 代助は、しばらく、それを読んでいたが、やがて、倦怠そうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。それから烟草を一本吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の椿を取って、引っ繰り返して、鼻の先へ持って来た。口と口髭と鼻の大部分が全く隠れた。煙りは椿の弁と蕊に絡まって漂う程濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がって風呂場へ行った。(それから)

第二に、明治期には「まるで」の意味で用いられる「まったく」の例が見られる。

(140) 自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へ附けた。そうして光沢のない飯を一口掻き込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿ったと思う位に変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液に和けて、ロ一杯に広がった時の心持は云うに云われなかった。(坑夫)

(141) (略) 私に取っては、ボチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸まあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言ったものか？…… そうだ、命だ、第二の命だ。恥を言わねば理が聞こえぬというから、私は理を聞かせる為に敢て恥を言うが、ボチは全く私の第二の命であった。その癖初めを言えば、欲しくて貰った犬ではない、止むことを得ず……いや、やっぱりあれが天から授かったと云うのかも知れぬ。(平凡)

第三に、明治期の「まったく」は、状態性の語との共起も特徴的である。「驚く」「初耳だ」などとの共起は現代でも見られるが(3.1.1.1の例(101)(102)を参照)、明治期にはさらに「暖かい」「大きい」など形容詞述語との共起も見られ((144)~(147))、共起する語のバリエーションが豊富である。

(142) 三四郎が東京で驚いたものは沢山ある。(略)

三四郎は**全く驚いた**。要するに普通の田舎者が始めて都の真中に立って驚くと同じ程度に、又同じ性質に於て大いに驚いてしまった。今までの学問はこの驚きを予防する上に於て、売薬程の効能もなかった。

三四郎の自信はこの驚きと共に四割方減却した。不愉快でたまらない。(三四郎)

(143) 「この間まで侍者をしていましたが、この頃では塔頭にある古い庵室に手を入れて、其所に住んでいると聞きました。どうですか、まあ着いたら尋ねて御覧なさい。庵の名はたしか一窓庵でした」と書いてくれる時、わざわざ注意があったので、宗助は札を云って手紙を受取りながら、侍者だの塔頭だのという自分には**全く耳新らしい言葉**の説明を聞いて帰ったのである。(門)

(144) 「実は昨夜ある所へ行って、冗談半分に賞めたら、御土産に持っていらっしゃいと云うから貰って来たんです。その時は**全く暖たかだった**んですがね。これは今上げようと思って蒸し返さしたのです」(門)

(145) 原口さんの画は出来上がった。丹青会はこれを一室の正面に懸けた。そうしてその前に長い腰掛を置いた。休む為でもある。画を見る為でもある。休みかつ味う為でもある。或は人の目を惹く題だからとも云う。少数のものは、あの女を描いたからだと言った。会員の一二は**全く大きい**からだと言った。大きいには違いない。幅五寸に余る金の縁を付けて見ると、見違える様に大きくなった。(三四郎)

(146) 「大丈夫よ。お父っさんがいつも、たあ坊は正直だからとそう云ったでしょう。わたくし**全く正直な**のですけれど、この頃つくづくそう思ってよ。もう人に騙されることだけは、御免を蒙りたいわ。わたくし嘘を衝いたり、人を騙したりなんかしない代には、人に騙されもしない積なの」「そこで檀那の言うことも、うかとは信用しないと云うのかい」(雁)

(147) 何かコウ非常な手段を用いて、非常な豪胆を示して、「文三は男兒だ、虫も胆気もこの通り有る、今まで何と言われても笑って済ましていたのはな、**全く恆量大度**だからだぞ、無気力だからでは無いぞ」ト口で言わんでも行為で見付けて、(略)(浮雲)

最後に、次の(148)は、話し手の呆れた気持ちを伴った「まったく」の使用である。上述したように、収集した明治期の用例には、＜感動詞的用法＞の例が見られない。ただし、わずか1例ではあるが、＜感動詞的用法＞の萌芽とも考えられる、話し手の呆れた気持ちが前面化された使用例が見られる。

(148) 三人は約三十分ばかり根気に働いた。仕舞にはさすがの与次郎もあまり焦っ付かなくなった。見ると書棚の方を向いて胡坐をかいて黙っている。美禰子は三四郎の肩を一寸突っ付いた。三四郎は笑いながら、「おいどうした」と聞く。

「うん。先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ。**全く**人泣かせだ。今これを売って株でも買って置くと儲かるんだが、仕方がない」と嘆息したまま、やはり壁を向いて胡坐をかいてる。(三四郎)

3.3.2. 「まったく」について

次の(149)～(151)のように、相手への同意を表明する単独使用の「まったく」は、明治期にもその使用が見られる。

- (149) 自分は返事をする必要がないから、黙っていると、茶店のかみさんが、菓子台の後から、
「働くからにや、儲けなくっちゃあね」
と云いながら、立ち上がった。どてらが、
「**全く**だ。儲けようたって、今時そう儲け口が転がってるもんじゃない」と幾分か自分に対して恩に被せる様に答えるのを、
「そうさ」
と幾分かさげすむ様に聞き流して、裏へ出て行った。(坑夫)
- (150) これまでになく打ち明けて、盛んな議論をしているが、話の調子には激昂の迹は見えない。太村はやはりいつもの落ち着いた語気で話している。それを純一は唯「そうですね」「**全く**ですね」と云って、聞いているばかりである。(青年)
- (151) 「でも新聞で見ると、来年から一般に官吏の増俸があると云う話じゃありませんか」
御米はそんな消息を全く知らなかった。小六から詳しい説明を聞いて、始めて成程と首肯いた。
「**全く**ね。これじゃ誰だって、遣って行けないわ。御肴の切身なんか、私が東京へ来てからでも、もう倍になってるんですもの」と云った。肴の切身の値段になると小六の方が全く無識であった。御米に注意されて始めてそれ程無暗に高くなるものかと思った。(門)

3.3.3. 本節のまとめ

本節では、明治期の「まったく」を取り上げ、現代との比較を行い、次のようなことを述べた。

- ① 収集した用例を見る限り、明治期の「まったく」は本来の＜副詞用法＞でしか使用されず、＜感動詞的用法＞での使用は見られない。まず、両時期に違いが見られないのは次の3点である。
- ①-1 否定形式と共起し、完全否定を表す。類義語「全然」と言い換えられる。
 - ・それから二日程代助は**全く**外出しなかった。(前掲例 132)
 - ・舟は島を右に見てぐると廻った。波は**全く**ない。(前掲例 134)
 - ①-2 肯定形式と共起する場合のうち、「異なり」「欠如」を表す語と共起する場合。
 - ・加須街道方面とは**全く**違った感じをかれに与えた。(前掲例 135)
 - ・(略) 自分で名を名告ったのは、**全く**無用な事であって、(略) (前掲例 136)
 - ①-3 単独で相手への同意を表明する場合。

- ・「働くからにや、儲けなくっちゃあね」(略)「**全くだ**。儲けようたって、今時そう儲け口が転がってるもんじゃない」(略)(前掲例 149)
- ② <副詞用法>において、両時期に違いが見られるのは次の 3 点である。すべて肯定形式と共起する場合である。
- ②-1「すべて」「ことごとく」の意味で使用される場合。
 - ・宗助は夜具の襟から顔を**全く**出した。(前掲例 138)
 - ②-2「まるで」の意味で使用される場合。
 - ・飯とは無論受取れない。**全く**壁土である。(前掲例 140)
 - ②-3「暖かい」「大きい」など状態性の語と共起する場合。共起する語のバリエーションが豊富である。
 - ・「その時は**全く**暖たかだったんですがね。(略)」(前掲例 144)
- ③ わずか 1 例であるが、明治期にも「まったく」の<感動詞的用法>の萌芽は存在している。次の例の「まったく」は、話し手の呆れた気持ちが前面化された文で使用されている。
- ・「うん。先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ。**全く**人泣かせだ。今これを売って株でも買って置くと儲かるんだが、仕方がない」と嘆息したまま、やはり壁を向いて胡坐をかいている。(前掲例 148)

3.4. 感動詞的用法の特徴

3.3 で述べたように、収集した明治期の用例からは、萌芽的な例が見られるものの、<感動詞的用法>の使用は見られない。本節では、現代日本語に特徴的な「まったく」の<感動詞的用法>の詳細を記述する。

「まったく」の<感動詞的用法>の特徴は、次の①～⑤のような点である。

- ① 一語文：単独で文となる。
- ② 構文的位罫：文頭にも文末にもくる。
- ③ 評価感情：否定的評価感情表出しか表せない。
- ④ 文体：くだけた会話文に限定されず、丁寧体な言い方でも用いられる。
内的独白でも使用される。
- ⑤ 複合形式：「まったくもう」でしか使用されない。

以下、①～⑤の具体例を提示し、「まったく」の<感動詞的用法>の特徴を述べていく。

3.4.1. 一語文

＜感動詞的用法＞の「まったく」は、単独で文となる。3.3 で述べたように、収集した用例からは、次のような「まったく」の単独使用は、現代にしか見られない。

(152) 「一度うちに来れば？」

「誰かおまえの病院なんか」

「看護婦は F カップ」伊良部が恵比寿様のように目を細めている。

まったく——。返事をしないでいると、「じゃあ明日ね」と背中を叩かれた。 (空中ブランコ)

(153) 「お前……」くわえて火をつけながら、貢は言った。

「すぐ向こうへ帰るのか」

「ああ。そのつもりだけど」

「すぐって、すぐか」

「俺だってそんなに暇じゃない」

「で？ またそれっきりになっちまうつもりか」

黙っていると、「**ったく**……」貢はあきれたように首を振った。

「お前ももうガキじゃあるまいし。いつまで拗ねてるつもりだ」

「拗ねる？」暁は眉を寄せた。

(星々の舟[前掲例 124])

3.4.2. 構文的位置

3.1.2.1 で述べたように、＜感動詞的用法＞における「まったく」の構文的位置は、文頭でも文末でもよい。まず、文頭にくる「まったく」には、次の(154)～(156)のような例が見られる。(156)のような「ったく」は＜感動詞的用法＞でしか用いられない。

(154) 「君は世界が良くなっていくと信じてるかい？」

「何が良くて何が悪いなんて、誰にわかるんだ？」

鼠は笑った。「**まったく**、もし一般論の国というのがあったら、君はそこで王様になれるよ」

「羊抜きでね」

(羊をめぐる冒険)

(155) 「ま、それだったら仕方ないけど。そうだ、今度、萌のプータロー記念会をやりましょうよ。青山にいい店見つけたの」

まったく、るり子は何かイベントがないと生きてゆけない女だ。

電話を切って、萌はビールを飲みながらしばらくぼんやりした。

(肩ごしの恋人)

(156) 貢献は苦笑いして、煙草の封を破った。

「そういうやあ、聞いたよさっき、親父から。暁の馬鹿たれ、女房と別れたって？ **ったく**あの野郎、幾つになってもなんでああ無責任……」

そこでようやく美希がにらんでいることに気づく。

「何だよ」貢はげんなり顔をした。「あ、この部屋、禁煙か？」

(星々の舟)

次に、(157)(158)は、「まったく」が文末に位置する場合である⁴³。「全く、どこへ行っちまったんだろうな」「まったく、自分で自分が厭になるね」のように、構文的位置を文頭に変えてもよい。

(157) 二人が病室の前に立っていると、その刑事が戻って来た。

「自宅へは戻っていないようです」

「そうか。どこへ行っちまったんだろうな、全く」

「申し訳ありません。ほんのちょっとウトウトした隙に……」

「とにかく、この近辺を捜すんだ。まだ近くにいないかもしれない」

「はい」

と刑事が走って行く。

(女社長に乾杯！)

(158) 「どうにかしたくて、やっぱり続けたんだ」

四戦目に長岡を破って雪辱した。それでどうにかなったのか、と私は大戸に訊ねた。

「いやあ、どうにもなりやあしねえさ。しょっちゅう負けて、しょっちゅう引っ繰り返されて……自分で自分が厭になるね、まったく」

私は、眼の前に坐っているこの大きく朴訥な男がボクシングを選んだということが誤りだったのではな
いか、と思うようになった。

(一瞬の夏)

3.4.3. 評価感情

前述したように、「まったく」は話し手の否定的評価感情の表出でしか用いられない。怒り・不満やののしり・叱責などの評価感情を表出する「もう」とは違って、呆れ・嘆きでの使用が特徴的である。

[呆れ・嘆き]

(159) 時間は十一時近い。

「私はお付き合いします」

と三枝は言った。「しかし、社長はもう帰りませんと……」

「いいじゃないか。今は若い女が一番よく酒を飲むんだ。心配ない」

真鍋のアルコールの強さには、全く、三枝も呆れるばかりだった。ぐいぐい飲んでも顔色一つ変わらない。それと同じテンポで飲んでいては身がもたない。

(女社長に乾杯！)

(160) 「何しろ親戚までがついて来てましてね、出て来るとき、小耳に挟んだんですが、少し金を貸してくれなんて頼んでるんです。ちょっと呆れましたね」

全く人の世は金次第か……。純子は谷口に札を言って電話を切ると、ため息をついて会議室へ戻ろうとした。

(女社長に乾杯！)

(161) 白金台の中華料理店は、十ほどのゆったりとしたテーブルがあり、その三分の二が埋まっていた。その

⁴³ ただし、次の2例は、「まったく」が文末にきているが、話し手の否定的評価感情表出で使用されているとは考えられない。

・大戸が低く呻くように言った。「トコトンやってみてえよ、今度は俺も!」「勝てそう?」「わかんねえ。やってみなければわかんねえな、まったく」森田さんは、先に一発当てれば勝てると言ってたぜ　私が言うと、大戸は笑った。
(一瞬の夏)

・「疲れた?」「疲れたね、まったく」「しっかりしてくれよ、試合は明後日なんだぜ」私は笑いながら言った。(一瞬の夏)

ほとんどがどう見ても愛人関係と思われるカップルばかりだった。**まったくこの世の中ときたら、と舌打ちしたくなってから、**考えてみれば自分たちも似たようなものだ気づいた。(肩ごしの恋人)

- (162) 無職になってそろそろ二年になる。最初は「三十四歳、無職」という響きが犯罪者のように思えて恐ろしかったが、それもすぐに慣れた。**まったく自分の適応能力に私ながら呆れる。**今ではすっかり「三十八歳、無職」に身も心もなじんだ。(ブラナリア)

3.4.4. 文体

「まったく」は(163)のようにくだけた言い方でも、(164)のようにデス・マス体の丁寧な言い方でも使用される。(165)は聞き手に対する否定的評価感情の表出であるが、(164)は、聞き手の気持ちを損しない嘆きのような評価感情を表す場面である。(163)には話し手の否定的評価感情がより強く表現されている。

- (163) もしかして受信機能だけが故障しているのではないか。そんなことまで疑ってみる。

洋介に電話をして、折りかえしかけ直してもらった。着信音がなり、ちゃんとつながった。

「**まったくこの電話魔が**」露骨に面倒臭がられたが、雄太は大きく安堵した。(イン・ザ・プール)

- (164) 「婦人服課の椿山課長のこと、ご存じですよ」

そう訊ねたとたんに、マスターの顔色は暗く沈んだ。

「ええ、毎朝その席でね、コーヒーを一杯。タバコを一服。**まったく人間の命なんて、わからないもので**すね。お引取り先ですか？」(略)

「椿山さんとは新入社員のところからのおなじみだから、お通夜ぐらいは何おうと思ったんですけど、デパートの人たちにまじってお焼香をするのも何だかさしでがましいようで、失礼しちゃったんです。あなたは、いらっしゃいましたか」(椿山課長の七日間)

また、「まったく」は、次の(165)のように、内的独白部分でも使用される。

- (165) 私が帰る際、店主はエレベーターまで見送りに来てくれ、私はますます心苦しくなった。

「このビルは何という名前でしたっけ？」

「大嶺ビルだね」

最後にそんな会話を交わし、札を言って、私はエレベーターに乗った。

焼け跡は確かに一階にあった。ごみ収集日のパネルが貼られたあたりに、燃えたと思われる木製の置き場があった。写真を撮る。ついでに五階を見上げて、不動産屋の看板も撮った。**まったく、**と思った。

「朝日不動産が燃やされた」などと紛らわしい言い方をしないでほしいものだ、と春に文句を言いたくなる。正しくは、大嶺ビルが燃やされた、と言うべきだろうに、と。(重力ピエロ)

3.4.5. 複合形式

収集した用例のなかで「まったく」の複合形式には、「まったくもう」しか見当たらない。2.4.5で述べたように、否定的評価感情の表出で使用される。以下に、2.4.5に挙げた「まったくもう」の例を再度示しておく。

(166) 「まさか俺にその監視役をやれとでも？」

湯川は頭を掻いた。

「その、まさか、だよ。監視といっても四六時中見張ってるわけじゃない。ただ、隣の部屋の様子に少し気をつけて、何か変わったことがあれば連絡してほしい、ということだ。要するにスパイをしろってことだ。**全くもう** 図々しいというか、失礼なことをいう連中だ」 (容疑者 X の献身[前掲例 80])

(167) 「三十を過ぎてから自分にうぬぼれるようになったのよ。(略) でも、人間関係ってそういうものじゃないし、仕事って助け合ってするものだし——」

「うるさい」とがった声を発した。さすがに感情を害した。

夫婦の間にはしばらく沈黙が流れる。「**まったくもう**……」 尚美がため息混じりに口を開いた。「三十八にもなって、許せないことが多いんだから」 (イン・ザ・プール[前掲例 89])

(168) 「(略) あなたの罪をそそぐためには、佐伯木知子さんの告白を録音するのが一番ですわ」

「そんなもの、どこにあるんですか」

「**まったくもう**。何だって鞆の中に入ってるって言ってるでしょうに。(略)」

(椿山課長の七日間[前掲例 90])

3.4.6. 本節のまとめ

本節では、現代日本語に特徴的な「まったく」の＜感動詞的用法＞について、次の①～⑤を述べた。

- ① 単独で文となる。
- ② 文頭にも文末にもくる。
- ③ 話し手の否定的評価感情（呆れ・嘆き）しか表せない。
- ④ くだけた会話文に限定されず、丁寧な言い方でも用いられる。内的独白でも使用される。
- ⑤ 複合形式としては「まったくもう」でしか使用されない。

①②の点においては、2.4で述べた「もう」と共通しているが、③～⑤においては共通する部分もあれば相違する部分も見られる。＜感動詞的用法＞における「もう」と「まったく」の共通点と相違点については、5章で詳述する。

3.5. 本章のまとめ

本章では、「まったく」を取り上げ、本来の＜副詞用法＞から派生的な＜感動詞的用法＞までの意味・機能を記述した。＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞の連続性について、典型例を提示してまとめると、次のようになる。

副詞用法	単独形式	非単独使用	述部の前	A「彼は英語が まったく 分からないんだよ」 B「彼の話には まったく 同感です／驚きました」
		単独使用		C「今日も寒いな」「 まったく だ」
		非単独使用	文頭	D「 まったく 、しつこい人だなあ」
文末	E「しつこい人だなあ、 まったく 」			
感動詞的 用法		単独使用		F「 まったく ！」
	複合形式			G「 まったく もう」

① Aの「まったく」は完全否定を表す副詞として働き、述部の前に位置する。

①-1 Aは類義語「全然」に言い換えられる。しかし、「まったく彼は英語が分からないんだよ」のように構文的位置を文頭に変えると、話し手の否定的評価感情が前面化され、「全然」に言い換えにくくなる。

①-2 「まったく」と「全然」を比較してみると、会話文での使用頻度は「全然」の方が高いが、共起する語のタイプが制限的である。Bのような「同感だ」「驚く」などとの共起は「まったく」しかできない。会話文において共起する語の範囲が広い「まったく」の方から、＜感動詞的用法＞が派生している。

② Cのように「まったく」が単独で使用され、相手への同意を表明する場合がある。Bの「まったく同感です」との連続性が窺えることから＜副詞用法＞としているが、＜感動詞的用法＞に位置づけた方がよいかもしれない。

③ ＜感動詞的用法＞の「まったく」は、D、Eのように、文頭にも文末にもきて、また、Fのように単独でも使用される。明治期と現代の用例を比較してみると、D～Fのような＜感動詞的用法＞は、明治期には見られない。Gの「まったくもう」の使用も、現代の用例でしかその使用が見当たらない。ただし、収集された明治期の用例には、わずか1例ではあるが、「全く人泣かせだ」(前掲例148)のような用例も見られる。収集した用例を見る限り、明治期には＜感動詞的用法＞が萌芽的に存在しており、本来の＜副詞用法＞での使用が中心であると考えられる。

④ 現代に特徴的な＜感動詞的用法＞の「まったく」は、否定的評価感情(呆れ・嘆き)の表出で用いられる。文体的にはくだけた会話文に限定されず、「まったく人間の命なんて、わからないものですね」(前掲例164)のように、丁寧な言い方でも使用される。また、内的独白で使用され

るのも特徴的である。

以上、本章で記述した「まったく」の＜感動詞的用法＞は、2章で取りあげた「もう」と共通している部分がある。＜感動詞的用法＞における「もう」と「まったく」の比較は、5章で行う。続く4章では、「ちょっと」を取り上げ、「ちょっと」にはどのような＜感動詞的用法＞が派生しているのかを記述する。

第4章 「ちょっと」の意味・機能

本章では、「ちょっと」を取り上げる。第2章と第3章と同様、まず、現代日本語における「ちょっと」の多義構造を述べ(4.1)、類義関係にある「少し」との比較を行い(4.2)、「ちょっと」にだけ＜感動詞的用法＞が派生していることを確認する。そして、明治期と現代の比較を行い(4.3)、「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴について記述する(4.4)。

4.1. 現代語の「ちょっと」の多義構造

本節では、現代語の「ちょっと」の意味・機能について記述する⁴⁴。次の1)～4)のように、「ちょっと」は、多義的な意味・機能を持っている。

- 1) 今日は昨日より**ちょっと**涼しい。
- 2) ワインを**ちょっと**飲んだら、気分がよくなった。
- 3) **ちょっと**何やってんのよ。遅れちゃうじゃないの。
- 4) **ちょっと**！ 忘れ物ですよ。

1)、2)の「ちょっと」は、程度・量を限定する副詞として働く。1)では今日は昨日より涼しいが、その程度が低いことを、2)では飲んだワインの量が少ないことを表す。しかし、3)のように、「ちょっと」が程度・量を限定するとは言い難い場合がある。3)の「ちょっと」は、1)、2)とは違って、「少し」には言い換えられない。さらに、4)の「ちょっと」は、相手への軽い呼びかけの感動詞として使用されている。

本節では、1)、2)のような「ちょっと」の使用を＜副詞用法＞、4)のような「ちょっと」の使用を＜感動詞的用法＞とし、「ちょっと」の多義構造を述べていく。3)の場合については、＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞の中間的な使用として位置づけるのがよいようにも思われるが、以下では、本来の＜副詞用法＞との連続性という観点から、＜副詞用法＞に入れて記述する(4.1.1.1)⁴⁵。

4.1.1. 副詞用法の場合

「ちょっと」は、程度が低いこと、量が少ないことを表す＜副詞用法＞が基本となる。しかし、使用場面や一定の構文的条件によっては、必ずしも程度が低いこと、量が少ないことを表すとは言い難い場合がある。このことは、上述したように、「少し」との言い換えができなくなることから確認で

⁴⁴ 本節は、全(2014b)に基づいている。

⁴⁵ 「ちょっと」「少し」の用例収集に用いた現代日本語の資料は以下の通りである。用例出典の詳細については、稿末の【用例出典】を参照されたい。

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』の1980年以降の小説／宮部みゆき(1989)『火車』／角田光代(1994)『まどろむ夜のUFO』／柳美里(1995)『フルハウス』／東野圭吾(1998)『探偵ガリレオ』／奥田英朗(2000)『イン・ザ・プール』／重松清(2000)『ビタミンF』／山本文緒(2000)『プラナリア』／浅田次郎(2001)『椿山課長の七日間』／唯川恵(2001)『肩ごしの恋人』／石田衣良(2002)『アキハバラ@DEEP』／吉田修一(2002)『パーク・ライフ』／角田光代(2002)『空中庭園』／伊坂幸太郎(2003)『重力ピエロ』／奥田英朗(2003)『空中ブランコ』／重松清(2003)『疾走(上・下)』／綿矢りさ(2003)『蹴りたい背中』／村山由佳(2003)『星々の舟』／坂元裕二(脚本)・小泉すみれ(ノベライズ)(2004)『ラストクリスマス』／横山秀夫(2004)『臨場』／重松清(2005)『その日のまえに』／東野圭吾(2005)『容疑者Xの献身』／三浦しをん(2005)『まほろ駅前多田便利軒』

きる。本節では、「少し」との言い換え関係を視野に入れ、使用場面、共起する語、文のタイプに注目しながら、「ちょっと」の意味・機能を記述する。また、3章で述べた「まったく」と同様、「ちょっと」にも単独で用いられる＜副詞用法＞がある。そこで、本節では、「ちょっと」の＜副詞用法＞を非単独使用の場合と単独使用の場合に分けて記述する。

4.1.1.1. 非単独使用の場合

上述したように、＜副詞用法＞の「ちょっと」は、状態性の語と共起すると程度が低いことを表し、動作性の語と共起すると量が少ないことを表す。以下では、まず、「ちょっと」が状態性の語と共起する場合から見ていく。

1) 状態性の語と共起する場合

状態性の語と共起する「ちょっと」は程度が低いことを表す副詞として働く。この場合は、「少し」と言い換えられる。しかし、上述したように、必ずしも程度が低いことを表すとは言い難い場合がある。以下では、「ちょっと」が状態性の語と共起する場合を「少し」に言い換えられる場合と言い換えられない場合に分けて述べていく。

1-1) 「少し」に言い換えられる場合

程度を限定する「ちょっと」は、形容詞と共起するのが基本であるが、状態性の動詞とも共起する⁴⁶。程度性が問題となるのは、ある基準にてらして、それとの比較のなかで物事を捉える文のタイプであって、(169)のように話し手のこれまでの経験や社会的な基準などと比較する文や、(170)のようにいわゆる比較構文で用いられる⁴⁷。

(169) 「こないだのさー、お寿司、おいしかったね、でもちょっと高かったからママさ、びくついてたよね、パパがビールおかわりするたび、眉ひくひく動いてたもん」
(空中庭園)

(170) 篠原利世の家で作った怪我は、真新しいかさぶたで覆われていた。そこから青っぽくなった内出血が手の甲全体に広がっているが、小指の古い傷跡だけはなぜか浸食から免れ、奇妙に白く浮かびあがっている。
「傷はふさがってるでしょ。たしかに小指だけいつもほかよりちょっと冷たいけど、こすってれば、じきにぬくもってくる。(略)」
(まほろ駅前多田便利軒)

⁴⁶ 程度副詞と共起する状態性の語については、西尾（1972：155-158）、工藤（2000：170）、朴（2011：51）に詳しく述べられている。基本的に形容詞と共起するが、状態性の動詞や名詞とも共起することができる。

・「(略)でもさ、普通、二重人格って、いい人と悪い人で裏表だろ。いい人といい人の二重人格ってあるのかな？ 裏も表もいい人」「それ、二重って言わないでしょ？」「種類が違うんだよ。ちょっと違ったタイプのいい人が、二人」(パーク・ライフ)

・「どうしたの、眠そうな顔して」母には深夜のパートのことは話していなかった。心配させたくないからではなく、あれこれうるさく言われるのがかなわないからだ。「うん、ちょっと睡眠不足」「だったら別に来なくていいのに」それは最近の母の口癖だ。(プラナリア)

⁴⁷ このことについて、渡辺（1990）にも指摘があり、「多少」「少し」「ちょっと」などは、計量構文（Xは—Aだ）にも比較構文（XはYより—Aだ）にも立つ「潜在比較」の副詞として位置づけられている。

1-2) 「少し」に言い換えられない場合

上記の(169)(170)とは違って、次の(171)(172)の「ちょっと」は「少し」に言い換えられないと思われる。「ちょっと」が話し手の評価感情が前面化する文に用いられると、その程度が低いことを表すとは言い難い場合が生じる⁴⁸。(171)(172)は、話し手の「呆れる」「みっともない」という否定的評価感情が前面化しており、使用場面から考えてその程度が低いとは考えにくい。そのため、「少し」の使用が不適切になる。(171)(172)の「ちょっと」は、むしろ「まったく」に言い換えてもよいように思われる。

(171)「何しろ親戚までがついて来てましてね、出て来るとき、小耳に挟んだんですが、少し金を貸してくれなんて頼んでるんです。ちょっと呆れましたね」

全く人の世は金次第か……。純子は谷口に札を言って電話を切ると、ため息をついて会議室へ戻ろうとした。
(女社長に乾杯！)

(172)「今朝は何かあるの？」

「新社長の出社第一日でしょ。秘書が社長より遅く行ったんじゃ、ちょっとみっともないもんね」

「ああ、そう言えばそんなこと言ってたわねえ。冗談じゃなかったの？」

「失礼ね。正真正銘の本当よ」
(女社長に乾杯！)

このように、「ちょっと」が状態性の語と共起する場合は、基本的に、程度が低いことを表すが、話し手の否定的評価感情が前面化する文においては、程度が低いことを表さなくなる。

2) 動作性の語と共起する場合

「ちょっと」は、動作性の動詞と共起し、量を限定する副詞としても働くが、使用場面によっては量が少ないことを表さなくなる場合がある。ここでも、上述した状態性の語と共起する場合と同様、「少し」に言い換えられる場合と「少し」に言い換えられない場合に分けて、述べていく。

⁴⁸ 収集した用例を見ると、否定的評価感情が前面化する場合に多く用いられる傾向が見られる。用例の分布は、次の表10の通りである。

表10. 「ちょっと」と共起する語のタイプ（話し手の評価感情が前面化した場合）

否定的 評価感情	語彙的意味 によるもの	つらい、もったいない、きなくさい、おかしい、かわいそう、強引だ、卑猥だ、厄介だ、妙だ、みっともない、ずるい、変だ、下手だ、不機嫌だ、うっとうしい、調子にのる、(人が)抜けている、呆れる、ひどすぎる、荒っぽい、分かりにくい、難しい、無理だ、心配だ
	文法的否定形式 によるもの	よくない、分からない、思えない、追いつかない、身分を明かせない、想像がつかない、手が離せない
肯定的評価感情		いい(2)、面白い(2)、感動する(2)、うらやましい、かわいらしい、カッコいい、腕がいい、安心する、洒落た(お店)、贅沢だ

※ 用例数が2以上の場合は()内に示している。

肯定的評価感情の場合に用いられた「ちょっと」には、次のような例がある。

- ・「岡みどりさんって、この店にいますか?」「あら、みどりに用? 今日ねえ、九時すぎには来ると言ってたんだけど……。まだ見えないのよ」「そうですか」若者はちょっと不安げに表情を曇らせた。「何か言づけでもあったら、聞いてくけど」「いえ、結構です。ありがとう」若者は急ぎ足で歩いて行った。ホステスはそれを見送って、「ちょっといい男ね」と、微笑んだ。(社長に乾杯！)
- ・翌週の月曜日、徹夫が教室に入ってくるなり「ちょっとおもしろい話、店で聞いたんだけど……」とおまえに耳打ちした。(疾走)

2-1) 「少し」に言い換えられる場合

次の(173)(174)の「ちょっと」は、「戻る」「待つ」と共起し、距離や持続時間が短いことを表す。収集した用例を見ると、「ちょっと」が動作性の動詞と共起する場合は、(174)のようにさそいかけ文でよく用いられる傾向がある⁴⁹。

(173) 「ねえ、見てたらおなか空いちゃった。あたし焼きそば食べたいなー」

ミーナは餌やりに早くも飽きて、ふりかえってぼくに言う。

「じゃあ売店いこうか、**ちょっと**戻るけど」

言うとミーナは花が開くような笑みを見せる。

(空中庭園)

(174) 彼女はしばらく下唇をかんで考えこんでいたが、「**ちょっとお待ち下さい**。調べてみます」と言って、くるりとうしろを向き、コンピューターのキーボードに『ほにゅうるい』という単語をうちこんだ。二十ばかりの書名がスクリーンにあらわれた。(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

2-2) 「少し」に言い換えられない場合

上記の(173)(174)とは違って、「ちょっと」が量の少なさを表すとは言えない場合がある。2-1)で述べたように(注 49 の表 11 を参照)、収集した用例を見ると、「ちょっと」はさそいかけ文における使用が多い傾向がある。「ちょっと」がさそいかけ文で用いられた場合には、相手を配慮して要求を和らげるものとして働くことがある(①)。また、「ちょっと」は、「少し」とは違って、否定述語と共起することもできる(②)。さらに、動作性の語と共起する「ちょっと」にも、話し手の否定的評価感情が前面化した場面における使用が見られる(③)。いずれも「少し」に言い換えられず、「ちょっと」を省略しても文の意味に変わりはない。以下、①～③の場合の「ちょっと」について述べていく。

⁴⁹ 収集した用例の量的分布を見ると、次の表11に示したように、さそいかけ文での使用が多い。

文の通達タイプ（のべたてる文の場合）			用例数		
ものがたり文		ちょっと スル	12		
まちのぞみ文		ちょっと シタイ／シテイイ／シテモイイ	17		
さそいかけ文	命令	ちょっと シロ／シテ	124	129	199
		ちょっと シナサイ	5		
	依頼	ちょっと シテクレ／シテクレル／シテクレナイ	14	49	
		ちょっと シテクダサイ／シテクレマセンカ	35		
	勧誘	ちょっと シヨウ／シナイ	18	21	
		ちょっと シマセンカ	3		

その他には、「ちょっとサセテモライマス」(2例)、「ちょっとシテイタダケマスカ」(2例)、「ちょっとシテイタダケマセンカ」(1例)、「ちょっとシテホシイ」(1例)、「ちょっとシタラ」(1例)が見られた。

また、本論文では、奥田(1985・1986)に従って、文の通達タイプを分けている。通常の文の分類とは違って、奥田では、「もっぱらはなし手自身の意欲なり欲望、願望なり期待、決心なり覚悟をいいあらわす文」を「まちのぞみ文」と名づけて、次のように体系化している(以下は奥田1986: 22より引用)。

I のべたてる文

a ものがたり文 narrative sentence b まちのぞみ文 optative sentence c さそいかけ文 hortative sentence

II たずねる文

① 相手に配慮して要求を和らげる場合

まず、次の(175)(176)の「ちょっと」は、「言う内容の量」「ライターをつけている時間の量」が少ないことより、相手への要求を和らげるものとして働いていると考えられる。話し手が聞き手にはたらきかけて、ある動作の実行を求めるさそいかけ文は、さまざまな形式的手段によって、要求の程度を和らげることができる⁵⁰。(175)(176)の「ちょっと」は、省略しても文の意味はほとんど変わらない⁵¹。

(175) 「(略) 電話番号いわよ。一回しかいわないからよく聞いて、0120-444-799、書いた？ まちがえたらアウトだから、**ちょっと**いってみて」 (フルハウス)

(176) 岡みどりは、引ったくるようにそれを取ると、中を覗こうとした。

「——暗くて、見えないや。ね、**ちょっと**ライターをつけといてよ」

ライターが、カチリと音をたて、その火が、岡みどりの顔を暗がりの中へ浮かび上がらせた……。

(女社長に乾杯！)

また、「ちょっと」は、(177)(178)のように、聞き手に動作の中止を求める場合でも用いられる。この場合も、「ちょっと」は量が少ないことを表すのではない。

(177) 僕と美代子はクラスで、「デキテル」と噂されていて、もちろん僕も美代子もそのたびに打ち消して——ときには冷やかす連中を廊下まで追いかけていったが、少なくとも僕は、本気で怒鳴ってはいなかった。悪い気はしない。「**ちょっと**やめてよ、変なことを言わないでよ」と怒る美代子の横顔を盗み見て、微妙に頬がゆるんでいると、胸がふわっと浮き立つこともある。 (その日のまえに)

(178) そういうと湯川は踵を返し、歩きだした。草薙はあわてて彼を追った。「どこへ行くんだ」

「帰るんだよ、決まってるだろ」

「**ちょっと**待てよ」草薙は湯川の肩を掴んだ。

(容疑者 X の献身)

② 否定述語の場合

次に、「ちょっと」は、(179)(180)のように、動詞の否定形式と共起することができる。「ちょっと」と共起する動詞の否定形式は、意味的には不可能や困難を表すものが多い⁵²。ここでも「ちょっと」は、少量であることを表しておらず、「少し」には言い換えられない。

⁵⁰ このことは村上 (1993) に詳しく指摘されている。村上 (1993 : 84-93) は、命令の程度や説明の強さを表現する方法として、①イントネーション、②「おい・こら・こらこら・なあ・さあ……」のようなよびかけの小詞、③接辞「よ・な・や」などを挙げている。村上 (1993) については、注30も参照されたい。

⁵¹ 次のように、自分の行動を軽く思わせて相手を配慮する場合もある。この場合は、挨拶などの慣用表現（「ごめんなさい」「失礼します」など）とともによく用いられる。

・石神は受話器をぎゅっと握りしめた。(略)「美里ちゃんはそこにいますか」「はい。**ちょっと**代わります」(容疑者 X の献身)

・そのとき机の電話が鳴った。「**ちょっと**ごめんね」伊良部が受話器を取る。「なんだよ、またおまえか」声を荒らげた。(イン・ザ・プール)

⁵² 副詞「ちょっと」の意味・機能については、朴 (2011) において既に詳しく指摘されている。朴 (2011 : 56-59) では、「ちょっと」が文法的否定形式と共起する場合、述語のタイプは可能表現の否定形式か不可能を表すものであることが指摘さ

(179) 酒が入ると森川はすこし巻き舌の冗舌になった。「原島さんのところは、このところ仕事量が増えて、二人ではちょっと追いつかない、という状況になっているようなんだね、そこでひとつ君に助けてもらいたい、とこう言ってきているわけですよ……」
(新橋烏森口青春篇)

(180) 「あの……武上真由美という人にお話があつて来たんです。警察の用なんです」
「あら、そうですか。今、ちょっと手が離せないんですけどね」
「すぐ終わりますので、呼んでいただけませんか」
「分かりました」
と女教師は肩をすくめて、「武上さん、ちょっとお客よ」
と声をかけた。
(女社長に乾杯！)

③ 相手への注意喚起の場合

最後に、次の(181)～(183)は、話し手の否定的評価感情が前面化された文における「ちょっと」の使用である。ここでも「ちょっと」は量が少ないことを表すのではない。(181)～(183)の「ちょっと」は話し手の否定的評価感情を伴う相手への注意喚起で用いられており、＜副詞用法＞と＜感動詞用法＞の中間的な使用と考えられる。

(181) 「ぐえっ」拓也がゲップをした。
「これ、拓也」と仁美。
「ぐえっ」達郎もわざとゲップをした。拓也がキャツキヤとよろこんでいる。
「ちょっとお、真似するでしょう」仁美が非難した。
「いいじゃん。マナーぐらい、大人になったら自然と身につけるさ」
「癖になったら困るじゃない」
(空中ブランコ)

(182) 襖をいきなり開けた。美里の、ひっという声が聞こえた。
「ちょっとあんた、何やってんのよ」靖子は声を尖とがらせた。
(容疑者 X の献身)

(183) 鍵は持っているけれどインターホンを押す。
「あーもうパパー、ちょっと一、ごはんにらないときいらないって言うてよう、四人ぶんと、三人ぶんと、同じようでちがうんだから！ それに何一、またビールうー？」
ドアを開けた絵里子が騒々しくまくしたてる。
(空中庭園)

4.1.1.2. 単独使用の場合

「ちょっと」は、相手からの質問や要求に対する受け答えの場合にも用いられる。次の(184)(185)のように、話し手が言いにくいことを回避しようとする場面で用いられる。「ちょっと」が単独で使用されるのが特徴的である。

(184) 「配送料、要らないんですか？」と和美が訊いた。
「ええ、地元密着型でやらせてもらってますので」

れており、実現の不可能性に関わる副詞として働く述べている。

- 「じゃあ、持ち帰りにしたら割り引いてくれますか？」
- 「は？ いや、あの一、それはちょっと……」 (その日のまえに)
- (185) 「(略) —何か用だったの？」
- 「ちょっとね」
- 「林君の〈ちょっと〉は怪しいのよね。何なの？」
- 「実はね、ちょっと会ってもらいたい人がいるんだ」
- 「誰？」
- 「大学の先輩でね、TV局に勤めてるんだよ」
- 「その人がどうしたの？」
- 「お見合いしたいって」
- 「林君！」
- 「冗談、冗談」 (女社長に乾杯！)

4.1.2. 感動詞的用法の場合

＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、文頭にくるか単独で用いられ、軽い呼びかけで使用される。既に指摘されているように、＜感動詞的用法＞では聞き手の存在が前提となるのが特徴的である。

「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴は、4.4 で詳述するが、以下では、＜副詞用法＞との違いを中心に、「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の概略を述べる。

4.1.2.1. 非単独使用の場合

次の(186)～(188)の「ちょっと」は、文頭にきて、聞き手に呼びかける感動詞として働く。呼びかけの感動詞「ねえ」に言い換えられると考えられる。

- (186) そのあたりで私は完全に睡魔につかまり、意識が遠のいていくのを感じた。なのに眠りの底まで下りていったちょうどその時、私はいきなり揺り起こされた。
- 「ちょっと、お母さん、起きてよ」
- 「うるさい」
- 反射的に断ってから、しばし考えて目を開けた。 (プラナリア)
- (187) 伊藤が、手に持ったボールペンを、叩きつけるような強さで机に置いた。
- おまえはハッとして、耳の焦点を戻す。
- 「ちょっと、先生の話、ちゃんと聞いてるの？」
- 「……はい、聞いてます」 (疾走)
- (188) 伊良部がスイングする。空振りだった。(略)
- 「ちょっと、バットを貸して」面倒くさいが手本を示してやることにした。
- 伊良部のトスする球を鋭く打つ。 (空中ブランコ)

4.1.2.2. 単独使用の場合

次の(189)(190)は、呼びかけの「ちょっと」が単独で使用されている場合である。

(189) 「ちょっと」

と純子は男の肩をポンと叩いた。男がギョッとして振り向く。

「何の用で私をつけ回すのよ」 (女社長に乾杯！)

(190) 草薙が第十三研究室を出て、薄暗い廊下を歩いていると、階段を一人の若者が上がってきた。(略)

「あ、**ちょっと**」草薙は声をかけた。戸惑った表情で振り返った常磐に、彼は笑顔を向けた。

(容疑者 X の献身)

4.1.3. 本節のまとめ

本節では、現代日本語における「ちょっと」の意味・機能を＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞に分けて記述した。その内容は、以下の通りである。

① 本来的なく副詞用法＞には、非単独使用の場合と単独使用の場合がある。

①-1 非単独使用の場合、「ちょっと」は程度が低いこと (A1)、量が少ないこと (B1) を表す。

しかし、必ずしも程度・量を限定するとは言い難い場合がある。話し手の否定的評価感情が前面化する場面に用いられた「ちょっと」は、程度が低いこと、量が少ないことを表さなくなる (A2、B2)。この場合の「ちょっと」は「少し」に言い換えられず、「ちょっと」を省略しても文の意味はほとんど変わらない。

①-2 単独使用の「ちょっと」は、相手からの質問や要求に対する受け答えで使われる (C)。

言いにくいことを回避しようとする場面で用いられる。

② ＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は文頭にきて、相手に軽く呼びかける感動詞として用いられる (D)。単独でも使用される (E)。

①②の概略を典型例で示すと、次のようになる。

副詞用法	非単独使用	A1 今日は昨日より ちょっと 涼しい。
		A2 「初日から遅刻するなんて、 ちょっと みっともない」
		B1 「 ちょっと お待ちください。すぐ調べます」
		B2 「 ちょっと やめてよ」
感動詞的用法	単独使用	C 「ご都合いかがですか？」 「水曜日は ちょっと 」
	非単独使用	D 「 ちょっと 、忘れ物ですよ」
	単独使用	E 「 ちょっと ！」

4.2. 類義語「少し」との比較

本節では、「ちょっと」の類義語「少し」を取り上げ、両者の比較を行う。4.1.1 で述べたように、「ちょっと」と「少し」には、相互に言い換えられる場合と言い換えられない場合がある。下に示したように、「少し」には＜感動詞的用法＞は派生しておらず、＜副詞用法＞の単独使用も見られない。両者の使用上の共通点が見られるのは、＜副詞用法＞の非単独使用の場合である。

用法と意味			副詞	
			ちょっと	少し
副詞用法	非単独使用	程度が低い／量が少ない	○	○
		話し手の評価感情の前面化	○	×
		相手を配慮する婉曲表現	○	×
	単独使用	否定的な受け答え	○	×
感動詞的用法	相手への軽い呼びかけ		○	×

上記のように、「ちょっと」と「少し」は、程度が低いこと、量が少ないことを表す点で共通している。次の 5)、6)のように、程度・量を限定する場合は、両者とも使用できるが、7)、8)のように、程度・量を限定するとは言い難い場合には、「少し」の使用は不適切であると思われる。

- 5) 今日は昨日より {**ちょっと／少し**} 寒い。
 6) ワインを {**ちょっと／少し**} 飲んだだけで、顔が真っ赤になった。
 7) あの花子さんという子、{**ちょっと／？少し**} いいよね。
 8) {**ちょっと／？少し**} やめてよ。

以下では、「ちょっと」と「少し」の文体的な違いについて確認したあと、両者の共通点と相違点について述べていく。

4.2.1. テキストタイプと「ちょっと」「少し」

まず、「ちょっと」と「少し」のテキストタイプ別用例分布を示すと、次の表 12 の通りである。表 12 から確認できるように、「ちょっと」は会話文で使用されやすく、「少し」は地の文で使用されやすい傾向がある。

表 12. テキストタイプ別用例の分布

副詞	ちょっと		少し	
テキストタイプ	会話文	地の文	会話文	地の文
用例数 (%)	657 (72%)	256 (28%)	224 (18.7%)	971 (81.3%)
合計	913 (100%)		1195 (100%)	

さらに、収集した用例では、会話文の「ちょっと」と「少し」の使用において、次の表 13 のような違いが見られる。

表 13. 文の通達的タイプによる用例の分布

共起する語と文のタイプ				副詞			
				ちょっと		少し	
状態性の語				123 (18.8%)		105 (46.9%)	
動作性の語	のべたてる文	ものがたり文		66 (10%)		56 (25%)	
		まちのぞみ文		32 (4.8%)		11 (4.9%)	
		さそいかけ文	命令	423 (64.4%)	274	47 (21%)	10
			依頼		104		17
			勧誘		45		20
	たずねる文		9 (2%)		4 (2.2%)		
合計				657 (100%)		224 (100%)	

表 13 のように、収集した「ちょっと」と「少し」の用例を共起する語と文の通達的タイプによって分類すると、動作性の語と共起する場合、「ちょっと」は、さそいかけ文での使用が多いのに対し、「少し」は、ものがたり文でもさそいかけ文でも用いられる。本節では、このことをふまえて、会話文と地の文における「ちょっと」と「少し」の使用上の共通点と相違点を述べていく。

4.2.2. 会話文の場合

表 12 で確認したように、「少し」は地の文で用いられやすい。収集した用例からは、次の(191)～(195)のように、デス・マス体の丁寧な言い方での使用が多い傾向が見られる。会話文の「少し」は、全て「ちょっと」に言い換えてもよいと思われる。

(191) 「(略) さむくはないですか？」

「ええ、窓をあけてると、すこし寒いですが、閉めておけば平気です」

(新橋烏森口青春篇)

(192) あたりを見回したが、柳のマネージャーらしき人影がない。

「柳さんのマネージャーは？」

「少し遅れるそうです。しばらくここで待っていただけませんか」

私たちはソファに腰を下ろした。

(一瞬の夏)

(193) 「ともかく、今は昼休みよ。少しのんびりしなさい。神経が参っちゃうわよ」

「そうね」

と伸子は微笑んでコーヒークップを取り上げた。

(女社長に乾杯！)

(194) 神父は皿を手におまえの前から離れ、廊下に顔を出した。

「エリ、少し休憩しませんか」

「あとで」とエリの声が聞こえる。

「あまり無理をすると、また膝を痛めますよ」

「だいじょうぶ」

(疾走)

(195) 「あ、何か注文しましょう。サンドイッチでも召し上がりますか？」

「サンドイッチ？ そうね……。あまりお腹は空いてないけど、少しいただこうかしら。コーヒーとね」

しかし、いざサンドイッチが運ばれて来ると、尾島久子は飛びつくように食べ始め、アッという間に平らげてしまった。
(女社長に乾杯！)

一方、「ちょっと」は、くだけた言い方でも用いられる。「少し」は、(196)のようなくだけた言い方ではその使用が不自然であると思われる。

(196) だが、健哉は「あそこ、食堂がないんだよね」と言った。

「みんな弁当なんだけど……ちょっとヤバいかな、って」

中学では給食があったが、来年の四月からは毎日弁当を持って行かなくてはいけない。健哉はそこを心配しているのだ。
(その日のまえに)

また、「ちょっと」は、丁寧な言い方でも用いられる。次の(197)(198)の「ちょっと」は、相手を配慮する婉曲表現として用いられている。「少し」にはこのような使用は見られず、(197)(198)では「少し」の使用が不適切である。

(197) 代わりに、山本さんは口調をあらためて言った。

「いま、お時間ありますか？ 近くまで来ているので、ちょっとお目にかかりたいんですが」

(その日のまえに)

(198) 靖子は腹をくくった。

「わかりました。あたしからお願いしたいこともありますので、じゃあ、ちょっと来ていただけますか」

「はい。今すぐに行きます」石神はいった。

(容疑者 X の献身)

表 13 で確認したように、「ちょっと」はさそいかけ文で用いられやすい傾向がある。上掲した(198)のように、「ちょっと」は、さそいかけ文に用いられ、相手を配慮して要求を和らげる働きをすることがある。しかし、「少し」は、さそいかけ文においても、量が少ないことを表すだけである。「しばらく」とも言い換えられることから確認できるように、時間量が少ないことを表す(199)(200)の「ちょっと」と「少し」は、相互に言い換えられる。

(199) 「北岡でございます」

「あ、奥様ですか。柳ですが——」

「あら、柳さん。お元気？」

「はあ。あの——ご主人は？」

とたんに、北岡夫人の口調がガラリと変わった。

「専務とおっしゃい！」

「はい？ あの——専務はおいででしょうか？」

「ええ、ちょっとお待ち下さい」 と、また急に穏やかになる。 (女社長に乾杯！)

(200) 「あの、原田さんのお宅ですか？」

と、ぼくはもう一度言った。

「すいませんが、瑞枝さんいらしたらお願いします」

「すこしお待ち下さい」

電話に出た声は原田瑞枝の母親とも違うようだった。 (新橋烏森口青春篇)

4.2.3. 地の文の場合

収集した用例を見ると、表 12 で示したように、地の文では「少し」の使用が多い。次の(201)～(204)の「少し」は、会話文での使用と同じく、程度が低いこと、量が少ないことを表している。文体差を問わないとすれば、全て「ちょっと」に言い換えてもよいと思われる。

(201) その他の写真もすべてこの髪の毛の長い女が水辺で精いっぱい躍動している、という風景が続いていた。**すこし**日本人離れた大きな胸と尻に迫力があつた。(新橋烏森口青春篇)

(202) 「サイズ、ぴったりだったね」

叔父の背広を着たおまえに、**少し**驚いたふうに言う。

「シュウジと叔父さんが同じ背丈なんて、なんか、ちょっと変だね」——首をかしげて、松葉杖で体を支え直す。 (疾走)

(203) 「そんなかんじですね。朝礼のときに、ポケットの中から緑色の蛇が顔を出していました」「見たか」

「ええ」

「もう一方のポケットの中には虫が入っているの知ってるか？」

「え？ 虫ですか？」

「うん」

ブロンディはそこで**すこし**笑った。笑うとこっちがどぎまぎするほどの童顔になった。

(新橋烏森口青春篇)

(204) 「先生は帝都大学の御出身ですか」

「そうですか」石神の細い目が**少し**大きくなった。やがてすぐに自分が手にしている郵便物に気づいたようだ。「ああ、これですか。学部のOB会の会報です。それが何か？」

「いえ、知り合いに帝都大の出身者がいるものですから」 (容疑者 X の献身)

4.2.4. 本節のまとめ

本節では、4.1 で確認した「ちょっと」と「少し」の言い換え関係をふまえ、「ちょっと」と「少し」が用いられた文のタイプに注目しつつ、テキストタイプ別に使用上の特徴を述べた。その内容をまとめると、次のようになる。

① 4.1 では、＜副詞用法＞の「ちょっと」が程度・量を限定する場合にだけ「少し」との言い換えが可能であることを確認した。

② ①のような両者の共通点は、テキストタイプ別に次のような使用上の違いを見せる。

②-1「ちょっと」と「少し」の文体差は、程度が低いこと、量が少ないことを表す場合において顕著である。会話文では「ちょっと」の方が用いられやすく、地の文では「少し」の方が用いられやすい。さらに、「ちょっと」はくだけた言い方でも丁寧な言い方でも用いられるが、「少し」はくだけた言い方では用いられにくいと思われる。

②-2「ちょっと」は特にさそいかけ文での使用が多く、相手を配慮する婉曲表現でも用いられるが、「少し」は、さそいかけ文においても、量が少ないことを表すだけである。相手に何らかの行動を求める、さそいかけ文での使用が多いことは、相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞の派生に繋がっているのではないかと考えられる。

4.3. 明治期における「ちょっと」の用法

以上、4.1～4.2 では、現代語における「ちょっと」の意味・機能を「少し」と比較しつつ述べた。本節では、明治期と現代における「ちょっと」の用例を取り上げ、比較対照を行う。

まず、明治期と現代の用例分布を形式別に示すと、次の表 14 のようになる。

表 14. 明治期と現代の「ちょっと」の用例分布

		ちょっと	その他	合計	
明治期	会話文	286 (31.7)	1 (0.2)	287 (31.9)	901 (100%)
	地の文	592 (65.7)	22 (2.4)	614 (68.1)	
現代	会話文	631 (69.1)	26 (2.8)	657 (72)	913 (100%)
	地の文	241 (26.4)	15 (1.7)	256 (28)	

※「ちょっとの」「ちょっとは」「ちょっとした」などは「その他」として分類している⁵³。

表 14 からは、明治期には地の文で用いられやすいが、現代には会話文で用いられやすいことが確認できる。さらに、両時期の「ちょっと」の用例を用法別に細分化して示すと、次頁の表 15 のようになる。

⁵³ 収集した用例の「その他」の内訳は次の通りである。

- ・「ちょっとの」：明治期＜地の文：6例＞／現代＜会話文：18例＞＜地の文：6例＞
- ・「ちょっとに」：明治期＜地の文：2例＞
- ・「ちょっとも」：明治期＜地の文：3例＞／現代＜地の文：1例＞
- ・「ちょっとは」：明治期＜地の文：1例＞／現代＜会話文：7例＞＜地の文：8例＞
- ・「ちょっとした」：明治期＜会話文：1例＞＜地の文：8例＞／現代＜会話文：1例＞
- ・「ちょっとにして」：明治期＜地の文：2例＞

表 15. 明治期と現代の「ちょっと」の用例分布（用法別）

	地の文		会話文						合計
	副詞用法		副詞用法			感動詞の用法		分類 に迷 う例	
	非単独使用		非単独使用		単独 使用	非単独 使用	単独 使用		
	状態性	動作性	状態性	動作性					
明	331 (37.7)	261 (29.7)	64 (7.3)	99 (11.3)	9 (1)	57 (6.5)	18 (2.0)	9 (1)	878 (100%)
現	134 (15.3)	107 (12.3)	124 (14.2)	194 (22.2)	49 (5.6)	130 (14.9)	102 (11.7)	32 (3.8)	872 (100%)

※ 内的独白の用例数は、記述の便宜上、会話文の（ ）内に提示し、百分率の表示も割愛する。また、「ちょっと手伝ってください」のように、＜副詞用法＞とも＜感動詞的用法＞とも考えられる用例については「分類に迷う例」として示している。

表 14 と表 15 のように、収集した用例を見る限り、前述した「もう」と「まったく」とは違って、「ちょっと」は明治期にも＜感動詞的用法＞での使用が見られる。ただし、明治期には地の文で用いられやすいが、現代には会話文で用いられやすい傾向がある。この点をふまえて、以下では、明治期における＜副詞用法＞と＜感動詞的用法＞の用例を提示していく。

4.3.1. 副詞用法の場合

収集した用例を見ると、＜副詞用法＞においては、両時期の間に違いは見られない。以下に、明治期における＜副詞用法＞の例を挙げておく。

1) 非単独使用

1-1) 状態性の語と共起する場合

α. 「少し」と言い換えられる場合

- ・「ちょっと」は、基本的に程度が低いことを表す。

(205) 彼等は申し合せた如く、素足に股引を高くまくって、近火の手伝にでも行きそうな風体に見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然として一言も発しない。主人も口を開かない。少時らくの間双方共睨めくらをしているなかに一寸殺気がある。 (我輩は猫である)

β. 「少し」に言い換えられない場合

- ・程度が低いことを表さない「ちょっと」は「少し」に言い換えられない。「ちょっと」を省略しても文の意味は変わらない。

〔話し手の評価感情が前面化する場合〕

(206) 若しこの事がかの六号活字子の耳に入って、雪江の親達は観世燃を燃ってるそうだ、一寸珍だね、なぞと素破抜かれては余り名誉でないと、名誉心も手伝って、急に始末気を出し、それからは原稿料が手に入ると、直ぐ多少余分の送金もして、他の物を燃っても、観世燃だけは燃ってくれるなどと言って遣った。(平凡)

1-2) 動作性の語と共起する場合

α. 「少し」に言い換えられる場合

- ・「ちょっと」は、基本的に動作を持続する時間量が少ないことを表す。

(207) 「少し心持が……」

「悪い？ 歩きつけないのを無理に歩いた所為だよ。それにこの人出じゃあ。どっかで一寸休もう。——
小野、どっか休む所があるだろう、小夜が心持がよくないそうだから」(虞美人草)

β. 「少し」に言い換えられない場合

- ・量が少ないことを表さない「ちょっと」は、「少し」との言い換えもできなくなる。「ちょっと」を省略しても文の意味は変わらない。

[相手に配慮して要求を和らげる場合]

(208) 宗助はそれまで全く能く寐ていたが、急に眼が覚めると、御米が、

「貴方一寸起きて下さい」と揺っていたので、半分は夢中に、
「おい、好し」とすぐ蒲団の上へ起き直った。(門)

[否定述語の場合]

(209) 日の夕暮に自分は嫂と階段の下で出逢った。その時自分は彼女に「どうです、兄さんは怒ってるんでしょうか」と聞いて見た。嫂は「どうだか腹の中は一寸解らないわ」と淋しく笑いながら上へ昇って行った。(行人)

2) 単独使用

相手からの質問や要求に対する受け答えで用いられる場合で、言いにくいことを回避する場面での使用である。

(210) 「もう宅へ帰るんですか」

女は二人とも答えなかった。

三四郎は又二歩ばかり女の方へ近付いた。

「何処かへ行くんですか」

「ええ、一寸」と美禰子が小さな声で云う。よく聞えない。三四郎はとうとう女の前まで下りて来た。しかし何処へ行くとも追窮もしないで立っている。(三四郎)

4.3.2. 感動詞的用法の場合

相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、明治期の用例でもその使用が見られる。

(211) 台所から婆さんが「どなたか一寸」と云う。与次郎は「おい」とすぐ立った。三四郎はやはり坐っていた。(三四郎)

- (212) (略) 何やら密々と話していた。それが中頃から時々時子の激した肝癪声に絡んで、隠居の慰藉するような声も聞えるようになり、やがて誰が泣くのやら、鼻汁を吸る音さえ漏れて、それが止むと又密々話になって、約そ物の二時間ばかりは話声が絶えず聞えていたが、その内にスラリと障子が開いて、時子の姿が半分縁に現われると、「一寸！」と隠居の声が呼止める。「え？」と振向いた時子の面の、内から漏れる火影に照されたのを見れば、上気して、額に肝癪筋を張り、眼に異様の湿みをさえ湛えていたが、(略)
- (其面影)

ただし、次の(213)～(215)のようなタイプの用例は、現代にしか見られない。全て話し手の否定的評価感情（非難・叱責）を伴った場合で、相手の注意を喚起するために用いられる「ちょっと」である（4.1.1.1 の例(182)(183)も参照されたい）。

- (213) 「ぐえっ」拓也がゲップをした。
- 「これ、拓也」と仁美。
- 「ぐえっ」達郎もわざとゲップをした。拓也がキャツキャとよろこんでいる。
- 「ちょっとお、真似するでしょう」仁美が非難した。
- 「いいじゃん。マナーぐらい、大人になったら自然と身につけるさ」
- 「癖になったら困るじゃない」 (空中ブランコ[前掲例 181])
- (214) 真一は新聞を丸めると、ロビー隅のゴミ箱に向かって投げた。壁に当たって跳ね返る。
- 「ちょっと。それは当病院の閲覧用ですよ」年配の看護婦に怖い顔で叱られ、あわてて詫びた。
- (空中ブランコ)
- (215) カウンターから布巾を受け取り、マナはテーブルを拭いている。(略)
- 「ちょっとー、タカちゃん、ぼうっとしてないで手伝って！お鍋を火にかけてあったまったらお皿に移してよー」
- ぼくは遠隔操作されるロボットみたいに台所へ移動する。 (空中庭園)

4.3.3. 本節のまとめ

本節では、明治期の「ちょっと」を取り上げ、現代との比較を行った。その内容をまとめると、次のようになる。

- ① 収集した用例を見ると、明治期の「ちょっと」は地の文で用いられやすい傾向がある。本来の＜副詞用法＞での使用が中心であると考えられる。
- ② 明治期にも相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞の「ちょっと」の使用が見られる。ただし、収集した用例に限って言えば、両時期の間には次のような使用上の違いが見られる。現代には、明治期には見られなかった、「ちょっと、真似するでしょう」(前掲例 213)のような、話し手の否定的評価感情を伴う注意喚起の＜感動詞的用法＞が見られる。

4.4. 感動詞用法の特徴

本節では、4.1～4.3 での記述をふまえ、「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の詳細を記述する。「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴は、次の①～⑤のような点である。

- ① 一語文：単独で文となる。
- ② 構文的位置：文頭にくる。
- ③ 発話場面における聞き手の有無：聞き手の存在が義務的である。
- ④ 評価感情：評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本であるが、場面によっては否定的評価感情を伴うことがある。
- ⑤ 文体：くだけた会話文に限定されない。

以下①～⑤の具体例を提示し、「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴を述べていく。

4.4.1. 一語文

4.1.2.2 で述べたように、「ちょっと」は単独で文となる。＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、(216)のように、人を表す名詞のはだか格を伴うことも多い。また、(217)のように繰り返された形でも用いられる。

(216) 伊良部が駆けだしていた。巨体でぐんぐん路地を進んでいく。

「先生、**ちょっと**」あわてて義雄が追いかけた。 (イン・ザ・プール)

(217) 「**ちょっとちょっと**モリちゃん……」

奥の三帖敷から声がかかり、森川が面倒くさそうに席をたった。どういうわけかマスターもその三帖敷に上ったきりになっていた。 (新橋烏森口青春篇)

4.4.2. 構文的位置

相手に呼びかける＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、文頭にくる。(218')(219')のように、呼びかけの「ちょっと」が文末にくることは不自然である。

(218) そのあたりで私は完全に睡魔につかまり、意識が遠のいていくのを感じた。なのに眠りの底まで下りていったちょうどその時、私はいきなり揺り起こされた。

「**ちょっと**、お母さん、起きてよ」

「うるさい」

反射的に断ってから、しばし考えて目を開けた。 (プラナリア[前掲例 186])

(218')? 「お母さん、起きてよ、**ちょっと**」

(219) 伊良部がスイングする。空振りだった。(略)

「**ちょっと**、バットを貸して」面倒くさいが手本を示してやることにした。

伊良部のトスする球を鋭く打つ。

(空中ブランコ[前掲例 188])

(219)? 「バットを貸して、**ちょっと**」

また、収集した用例を見ると、＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、＜副詞用法＞の場合と同様、さそいかけ文での使用が特徴的である。しかし、構文的位罫において＜副詞用法＞との違いがはっきりする。次の(220)と(221)を比較されたい。(220)は「ちょっと」が「手伝う」の直前に位罫しているが、(221)はそうにはなっていない。さらに、音声的にも(221)は、後にポーズ（「、」）を置いたひきのばしの音調となっており⁵⁴、後続する文との切れ目を表示している。(221)の「ちょっと」は、呼びかけの感動詞「ねえ」と言い換えができるが、(220)は副詞「少し」に言い換えられる。

＜副詞用法＞

(220) 「ルルー、ちょっと手伝ってよ」

台所にいたハイシーに呼ばれ、ルルは「はあい」と立ち上がった。

(まほろ駅前多田便利軒)

＜感動詞的用法＞

(221) カウンターから布巾を受け取り、マナはテーブルを拭いている。(略)

「**ちょっとー**、タカちゃん、ぼうっとしてないで手伝って！お鍋を火にかけてあったまったらお皿に移してよー」

ぼくは遠隔操作されるロボットみたいに台所へ移動する。

(空中庭園[前掲例 215])

また、「ちょっと」は、次の(222)(223)のように、発話の途中に現れることもある。ただし、(222)は「ちょっと」の形でよいと考えられるが、(223)は「ちょっと」だけでは不自然な文になると思われる。

(222) 「あんたも何とか言いなさいよ！」

「え？」

「さっきから何も言わないじゃないの。ケーキばっかし食べてないで、何とかおっしやいよ！」

「あの——つまり——」

〈曖昧〉嬢はおどおどしながら、「私は思ったんだけど——まあ、**ちょっとね**——その、考えついたっていうだけで——あんまり、まあ——いい考えかどうか——でも——」

「はっきりしなさいよ！」

と〈短気〉嬢がかみつきそうな顔で言った。

(女社長に乾杯！)

(223) ぼくは両手を伸ばし飯塚の肩をおさえる。

「わかった、悪かった、ちがうんだ、あなたがどうじゃなくて、**ちょっとほら**、今うちADSLとかいう

⁵⁴ 文の途中に置かれる休止 (pause) については、上村 (1989) に詳しく述べられている。上村 (1989 : 217) は、休止 (pause) に関わる音声的変種のひとつとして、ひきのばしの音調を取り上げ、「構文論的きれ目の直前にくる単語の最後の音調の音節の母音フォネームもしくははねる音を同一のたかさ、つよさで、そしてさしておおきくない音量でながくひきのばして発音するもの」と述べている。

いろアレで、ちょっと電話の調子悪くて、みんなに訊いてるだけなんだよ、いたずら電話なんて言ってないじゃないか、勘違いだよ」
(空中庭園)

4.4.3. 発話場面における聞き手の有無

次の(224)(225)のように、相手に呼びかける「ちょっと」は、使用場面に聞き手が必ず現われる⁵⁵。前章で取り上げた「もう」「まったく」は、話し手の評価感情の表出で用いられるため、発話場面における聞き手の存在が問題とならず、特に「まったく」は内的独白でも用いられる。しかし、「ちょっと」は、発話場面の聞き手の存在が義務的である。

〔話し手：有島 聞き手：刑事〕

(224) 「おい、ちょっと——」

有島は腰を浮かして呼び止めようとしたが、**刑事**はさっさと出て行ってしまった。(女社長に乾杯！)

〔話し手：母親 聞き手：息子（トシくん）〕

(225) その夜、母ちゃんのご機嫌だった。仕事から帰ってくるなり、上着も脱がずに、「**ちょっとトシくん**、あんた知ってる？」と勢い込んで話しかけてきた。(略)

「駅前ですごいの見ちゃった」
(その日のまえに)

4.4.4. 評価感情

「ちょっと」は、評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本であるが、否定的評価感情を伴うことがある。まず、次の(226)(227)は、話し手の感情を特に伴わない、単なる呼びかけとしての使用である。

(226) 「ちょっと」

と純子は男の肩をポンと叩いた。男がギョッとして振り向く。

「何の用で私をつけ回すのよ」
(女社長に乾杯！[前掲例 189])

(227) 草薙が第十三研究室を出て、薄暗い廊下を歩いていると、階段を一人の若者が上がってきた。(略)

「あ、**ちょっと**」草薙は声をかけた。戸惑った表情で振り返った常磐に、彼は笑顔を向けた。

(容疑者 X の献身[前掲例 190])

⁵⁵ 次は、内的独白における「ちょっと」の使用である。内的独白は話し手自身への発話で、ここの「ちょっと」は呼びかけではなく、話し手の否定的評価感情を表すものとして用いられている。

・二人、三人と広美の周りに集まってきた。ますますカメラが引く。**ちょっとオ**。あんたたち、図々しいんじゃないの。わたしが撮られてるのに。一人が身を乗りだし、カメラに向かって投げキッスをした。レンズがズームし、アップになったのがわかった。なんてことだ。いちばんおいしいところを、ほかの女に——。(イン・ザ・プール)

しかし、「ちょっと」は、次の(228)(229)のように、否定的評価感情を伴うことがある。相手の注意を喚起するために使用された「ちょっと」は、使用場面（波線部）で分かるように、話し手の否定的評価感情（怒り・非難）を伴うことができる⁵⁶。

(228) 帽子は取れたが、ガムテープが髪にくっついていて、頭頂部も、側頭部も。帽子の中全体に仕かけられたのだ。

めまいがした。ショックと怒りで全身が震えた。

「**ちょっと**オ、エミリン」声を荒らげた。「どこよ、出てらっしゃい！」

女たちが広美から離れていく。かかわり合いたくないという様子だ。

「こんなことして、ただじゃ済まないわよ」

（イン・ザ・プール）

(229) 伸子は手近な角をヒョイと曲がった。

足音が近付いて来て、待ち構えていた伸子の前に、男が現れた。

「**ちょっと！**」

伸子は精一杯の怖い目つきをして見せた。

「どうして私の後を尾けるんですか？」

相手はギョッとして、立ちすくんだ。

（女社長に乾杯！）

収集した用例を見る限り、＜感動詞的用法＞の「ちょっと」が明らかに肯定的評価感情を伴う用例は見当たらない。この点は、「もう」との相互言い換え関係においてより顕著な特徴となる。＜感動詞的用法＞における「もう」と「ちょっと」の比較は、5.3で詳述することにする。

4.4.5. 文体

「ちょっと」はくだけた言い方でも丁寧な言い方でも用いられる。(230)(231)のような丁寧な言い方での「ちょっと」は、相手に声をかけたり、注意を喚起するための単なる呼びかけである。しかし、(232)(233)のようなくだけた言い方での「ちょっと」は、話し手の評価感情が前面化された場面での使用である。

(230) おばさんが奥に向かって首を伸ばした。「**ちょっと**、サヨコさん」

「あの、ちょっとだけ聞いてもらえませんか」汗がどっと噴き出てきた。

奥から三十がらみの女が現れた。「お義母さん、どうしたんですか」

（イン・ザ・プール）

(231) 「……もしもし？ どういうことですか？」

「自殺するぞ」

「もしもし？ **ちょっと**あなた、名前教えてもらえませんか」

「すぐに中止にしろ。走るのをやめさせろ」

⁵⁶ 村上（1993）の指摘のように、話し手の様子を描写する文や「ちょっと」の口調に対するコメント的な説明文によって、「ちょっと」が否定的感情（怒り・非難）のイントネーションで発話されていることが感じとられる。また、「ちょっとオ」「ちょっと！」のように、ひきのぼしの音調や「！」で表示されるつよめの音調によっても、話し手の感情が強く表現された呼びかけであることが分かる。村上（1993）については、注30も参照されたい。

「……警察に連絡しますよ」

(疾走)

(232) 「あーもうこきつかうこきつかう。コウー、ごはんー、あれっ、コウ、今日ミーナ先生の日？ ちょっとコウ！ 開けてよ！ なんで教えてくれないのー、ミーナ先生きてたら早く帰ってきたのにーっ」

「**ちょっと**マナっちうっさいよ、たたくなよドア。言ったよ、昨日ごはんのとき。マナっち心霊写真特集
食い入るように見てて無視したんだろ」
(空中庭園)

(233) 女子の色紙の絵をあらためて見つめた。(略)

「**ちょっと**、やだ、そんなにじっくり見ないでよお」肩を軽くぶたれた。
(その日のまえに)

4.4.6. 本節のまとめ

本節では、「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴について、次の①～⑤のような点を述べた。

- ① 単独で文となる。
- ② 文頭にくる。
- ③ 発話場面に聞き手の存在が義務的である。
- ④ 評価感情に中立的な呼びかけが基本であるが、話し手の否定的評価感情を伴うことがある。
- ⑤ くだけた会話文に限定されず、丁寧な会話文でも使用できる。話し手の評価感情が前面化された場面においては、くだけた言い方で使用される。

4.5. 本章のまとめ

本章では、「ちょっと」を取り上げ、本来の＜副詞用法＞から派生的な＜感動詞的用法＞までの意味・機能について述べてきた。＜感動詞的用法＞の派生について、＜副詞用法＞との連続性をまとめると、次のようになる。

副詞用法	非単独使用	述部の前	A1 今日は昨日より ちょっと 寒い。 A2 この問題は ちょっと 難しい。私にはとても無理だ。
			B1 「 ちょっと お待ちください。すぐ調べます」 B2 「 ちょっと やめてよ」 B3 「水曜日は ちょっと 無理です」
	単独使用		C 「ご都合いかがですか？」 「水曜日は ちょっと 」
感動詞的用法	非単独使用	文頭	D1 「 ちょっと 、忘れ物ですよ」 D2 「 ちょっと 、何やってるの！」
	単独使用		E 「 ちょっと ！」

① A1、B1 の「ちょっと」は述部の前にきて、程度が低いこと、量が少ない（短時間である）ことを表す。この場合、類義語「少し」に言い換えることができる。ただし、A2、B2、B3 の場合は次のようになる。

①-1 A2 は場面によっては話し手の否定的評価感情が前面化され、必ずしも「ちょっと」が程度の低さを表すとは言い難い。これは A2 の「ちょっと」が省略されても文の意味にほとんど変わらないことから分かる。「少し」との言い換えもできなくなる。

①-2 B2 は話し手の否定的評価感情が前面化された文での使用である。そして、B3 は実現の不可能や困難を表す文で用いられている。A2 と同様、B2、B3 も「ちょっと」を省略しても文の意味は変わらず、「少し」との言い換えもできない。

② C の「ちょっと」は単独で使われる＜副詞用法＞である。質問や要求に対する受け答えで、B3 の「無理です」のような、話し手が言いにくいことを回避しようとする場面で使われる。ここでは、B3 との連続性が考えられることで＜副詞用法＞としているが、＜感動詞的用法＞に位置づけた方がよいかもしれない。

③ D の「ちょっと」は相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞での使用ある。収集した用例に限って言えば、D1 のような「ちょっと」の＜感動詞的用法＞は、明治期にもその使用が見られる。ただし、D2 のように話し手の否定的評価感情を伴った注意喚起の「ちょっと」は、現代にしか見られず、現代に特徴的な＜感動詞的用法＞であると考えられる。

④ ＜感動詞的用法＞の「ちょっと」は、D のように文頭にくるか、E のように単独で用いられる。また、発話場面に聞き手の存在が義務的である。文体的には、D1 のような単なる呼びかけの場合は、丁寧な言い方でも用いられるが、D2 のような話し手の評価感情が前面化される場合は、くだけた言い方で使われる。

以上、本章では、「ちょっと」を取り上げ、＜副詞用法＞から＜感動詞的用法＞までの意味・機能について実例を挙げつつ記述した。次章では、これまで記述してきた「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴をふまえ、相互比較を行う。

第5章 感動詞的用法の相互比較

以上、第2章から第4章では、「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞がどのように派生しているのかを述べてきた。本章では、これまで述べた「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の相互比較を行う。まず、5.1 では、「まったくもう」という形からも分かるように、基本的な意味・機能において共通性を持っている「もう」と「まったく」の比較を行う。続いて5.2～5.3 では、部分的な共通性を見せる「まったく」「ちょっと」と「もう」「ちょっと」を比較する。最後に5.4 では、本章のまとめとして、5.1～5.3 で述べたことをふまえ、「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞における共通点と相違点をまとめる。

5.1. 「もう」と「まったく」の比較

「もう」と「まったく」は、話し手の評価感情を表出する＜感動詞的用法＞が派生している点で共通している。本節では、「もう」と「まったく」の相互言い換え関係に注目しつつ、両者の＜感動詞的用法＞に見られる共通点と相違点を考察する。

まず、ここに2.4と3.4で述べた「もう」と「まったく」の＜感動詞的用法＞の特徴を再度示す。

特徴	もう	まったく
①一語文	単独で文となる。	単独で文となる。
②構文的位置	文頭にも文末にもくる。	文頭にも文末にもくる。
③評価感情	否定的評価感情も肯定的評価感情も表せる。	否定的評価感情しか表せない。
④文体	くだけた会話文に限定される。	くだけた会話文に限定されない。

上記から分かるように、「もう」と「まったく」は、①単独で文となる点、②文頭にも文末にもくる点、③否定的評価感情を表す点で共通しているが、③肯定的評価感情を表すかどうか、④文体的にくだけた会話文に限定されるかどうかにおいて違いが見られる。＜感動詞的用法＞における「もう」と「まったく」の共通点をまとめると次のようになる。

一語文となるか（①）、文頭か文末にきて（②）、話し手の否定的評価感情を表出する（③）。文体的には、くだけた会話文で使用された場合、相互言い換えが考えられる（④）。

そして、「もう」と「まったく」は、次のような点で違いを見せる。

「もう」は肯定的評価感情も表すことができるが、「まったく」は否定的評価感情に限定される（③）。文体的に「もう」はくだけた会話文に限定されるが、「まったく」はくだけた会話文に限定されない。

本節では、以上のふまえ、「もう」と「まったく」の言い換え関係を次の A～C に分けて、＜感動詞的用法＞における共通点と相違点を記述する。

- A. 「もう」と「まったく」いずれも使用可能な場合 (5.1.1)
- B. 「もう」の使用の方が適切な場合 (5.1.2)
- C. 「まったく」の使用の方が適切な場合 (5.1.3)

以下、A～C の順に述べていく。

5.1.1. 「もう」と「まったく」いずれも使用可能な場合

上述したように、「もう」と「まったく」は、文頭でも文末でも用いられ、単独で文になる点で共通している。さらに、「もう」と「まったく」は、話し手の否定的評価感情を表す点において共通性を持つ。

まず、文頭にくる「もう」と「まったく」の場合から見てみる。(234)～(237)の「もう」と「まったく」は話し手の否定的評価感情を表しており、相互に言い換えてもよいと思われる。

(234) そんな風に歩いていると危ないよ——そう声をかけようとした時、少女は何かに躓いたらしく、前に転んだ。途端に大声で泣きだした。

草薙はあわてて駆け寄り、少女を抱き起こした。膝から血が出ていた。

「あ、どうもすみません」母親と思われる女性が走ってきた。「**もう**、だから一緒に歩きなさいっていったのに。どうもすみません。ほんとうにもう、だから家で待ってればよかったのに」

娘を叱るより、こんな真夜中に火事場見物するのは控えたほうがいいといたかったが、草薙は黙って少女を母親に引き渡した。(探偵ガリレオ[前掲例 16])

(234') **まったく**、だから一緒に歩きなさいっていったのに」

(235) 私の母が若作りなのかもしれないが、朝丘君の母親は祖母と呼んでも違和感がないくらい歳をとって見えた。私は「はじめまして」と頭を下げながらどぎまぎと彼の方を見る。

「さっき突然来たんだよ。**まったく**連絡くらいして来ればいいのに」

台詞と裏腹に朝丘君は嬉しそうですらあった。本当に突然来たのだろうか。今までそんなことは一度もなかったのだから、嘘ではないにしろ、突然息子のアパートを訪ねたくなるようなことを、彼が母親に言ったのではないかと私は疑った。(プラナリア)

(235') **もう**連絡くらいして来ればいいのに」

(236) 椿は行き昏れた子供のように路上に佇み、黒い鞆の中から携帯電話機を取り出した。

☆のボタンを押す。長い発信音のあとで、マヤのあわただしい声のはね返ってきた。

「もしもし、なによっ！ こっちはいま大変なんだから、急用じゃなかったら後にして」(略)「ど、どうしたんですか。もしや宗教戦争でも」

「思い切ってつまらないことは言わないで。特別運送措置法の違反者が出たのよ。**もう、サイッター！**
私の管理能力が問われる。きつと始末書じゃすまないわ。リストラよー！ 目の前まっくらよー！」

(椿山課長の七日間[前掲例 65])

(236)「**まったく**、サイッター！」

(237) 崇がテーブルに肘をついて尋ねた。

「それって、いぬたまの帰りに見た、あの女？」

「そう」

「浮気ぐらい平気だって、言ってたじゃないか」

「もちろん平気よ。でも、女によるわ。その女が、泣いて、信くんが好きとか、別れてください、とか言うならわかるわよ。それが、信くんにしつこくデートにさそわれたから仕方なく付き合ったって、こう言うのよ、**まったく、頭にくるわ**」

言いながら、るり子はトーストを留る。歯形がくつきりと残る。

(肩ごしの恋人)

(237)「**もう**、頭にくるわ」

次に、(238)～(240)は「もう」と「まったく」が文末にくる場合である。この場合も互いに言い換えることができる。

(238)「それから、さっき純子さん、何か言いかけたわね」

「え？——ああ、馬鹿らしい話なのよ」

純子はちょっと今はまずいな、と思った。伸子が自信を失いかけている。こんなときに放火の疑いを持たれてるなんて言ったら……。

「刑事がどうかって言ったでしょ」

「うん……。後で話すわ」

「今、話して。業務命令よ」

「ずるいんだから、**もう！**」

純子は渋々、昨日の刑事の言い分を話した。

(女社長に乾杯！[前掲例 18])

(238)「ずるいんだから、**まったく！**」

(239) 二人が病室の前に立っていると、その刑事が戻って来た。

「自宅へは戻っていないようです」

「そうか。どこへ行っちまったんだろうな、**全く**」

「申し訳ありません。ほんのちょっとウトウトした隙に……」

「とにかく、この近辺を捜すんだ。まだ近くにいないかもしれない」

「はい」

と刑事が走って行く。

(女社長に乾杯！[前掲例 157])

(239)「どこへ行っちまったんだろうな、**もう**」

(240) 伸子はポカンとしていたが、

「——じゃ、あなたが殺したんじゃないのね？ よかった！」

と息をついた。

「僕が？ 冗談じゃないよ！」

昌也は目を丸くした。「岡みどりってホステスにも電話で警告した。それなのに、あの女——欲を出して犯人をゆすろうとしたのに違いない。馬鹿だよ、**全く**！」

「あのバーへ行ったのは、あなた？」

「そうさ。話をするつもりだった。でも、結局、間に合わなかった」

「誰なの、犯人は？」

と伸子が訊いた。そのとき、二人の頭上で足音がした。

(女社長に乾杯！)

(240') 「馬鹿だよ、**もう**！」

最後に、(241)のような単独使用の場合も、話し手の否定的評価感情を表出する「もう」と「まったく」は、相互言い換えが可能である⁵⁷。

(241) 「お前……」くわえて火をつけながら、貢は言った。

「すぐ向こうへ帰るのか」

「ああ。そのつもりだけど」

「すぐって、すぐか」

「俺だってそんなに暇じゃない」

「で？ またそれっきりになっちゃうつもりか」

黙っていると、「**まったく**……」貢はあきれたように首を振った。

「お前ももうガキじゃあるまいし。いつまで拗ねてるつもりだ」

「拗ねる？」暁は眉を寄せた。

(星々の舟[前掲例 124])

(241') 黙っていると、「**もう**……」貢はあきれたように首を振った。

5.1.2. 「もう」の使用の方が適切な場合

上述した(234)～(241)とは違って、次の(242)(243)は、「もう」の使用が適切な場合である。いずれも、感動・感嘆や親しみの表明など、話し手の肯定的評価感情の表出で用いられている⁵⁸。そのため、否定的評価感情しか表せない「まったく」の使用は不適切である。2.4.2 で述べたように、「そ

⁵⁷ 次の例では、波線部のように、「もう」が完全に否定的評価感情を表すとは言えないが、呆れた気持ちを表すため、「まったく」に言い換えることができると思われる。

・「お昼、まだよね？」「ああ、何も。起き抜けだから」「じゃあ、すぐ作る。冷し中華でいい？」「悪いね、いつも」

「**もうッ**」あや子は笑った目で永嶋を睨んだ。(臨場[前掲例23])

→「悪いね、いつも」「**まったく**」

⁵⁸ 次の例は、否定的評価感情表出の場合ではあるが、「もう」が一定の決まった形式（「腹が立って腹が立って腹が立って」のような感情表現形式の重複形）と用いられている場合、「まったく」の使用は不適切である。

・「(略)『天皇や軍上層部に責任があるのは当然ただ、ひたすら流されて突き進んだ兵隊や国民の一人ひとりにも戦争責任はあるはずだ』。そうほざきやがった。俺は**もう**、腹が立って腹が立って腹が立って」(星々の舟)

れ見てるだけで感動しちゃうんだから、もう」「田中君たらあ、もう」と、「もう」を文末において
もよい⁵⁹。

(242) 「誰も立ち止って聴いてなんかないんだけどね、一所懸命歌ってるの。寒いじゃない、あそこ吹きさらし
だから。ホッペなんて真っ赤になってて、でも必死で歌ってんのよ、**もう**、それ見てるだけで感動しちや
うんだから」 (その日のまえに[前掲例 60])

(242')? 「**まったく**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」

(243) まずはホテル内の会席料理店から運ばれた御膳弁当を食べ、三人で世間話を交わす。「**もう**、田中君た
らあ」麗奈が田中相手にしきりにシナを作った。 (空中ブランコ[前掲例 75])

(243')? 「**まったく**、田中君たらあ」

5.1.3. 「まったく」の使用の方が適切な場合

次の(244)～(246)は、「まったく」の使用が適切な場合である。「もう」を使用しにくい理由とし
ては、①文の構造的な違いと②文体的違いの2点が考えられる。

① 文の構造的な違い

収集した用例を見ると、次の(244)(245)のように、主語と述語がある整った文では、「まったく」
の方が使用される傾向がある。「もう」の用例には、このような文のタイプでの使用は見られない。

(244) 「その彼とお父さんの問題というより、要は君の成功恐怖なんじゃないの？ 君だって心理学かじったん
だろう」

あっさり言われて私は肩を落とす。

「やっぱりそうですか？」

「なんだ、分かってるんじゃないか。それなら話が早い。半端な気持ちで仕事されたらまわりが迷惑だか
らね。その男を養うくらいの気持ちで働いてくれよ」

「いやですよ」

「何を勉強してきたんだ。**まったく**学費出した親は泣くよ」そこで私たちは声を合わせて笑った。

(プラナリア)

(244')? 「**もう**学費出した親は泣くよ」

(245) 「ここんどこ、上の連中が患者を回してくれはくてさあ。うちら、もう二週間も注射打ってないんだよね」

太っちょの医師が鼻の穴を広げている。「**まったく**内科は融通が聞かないんだよなあ。風邪はすべて心身
症にしろって言ってるのに」 (イン・ザ・プール[前掲例 111])

⁵⁹ 収集した用例では、「もう」が肯定的評価感情を表す場合、話し手が女性であるという特徴が見られる。例えば、次の例の
話し手は、 の部分に現われているように、女性である。

・「**もう**、田中君たらあ」麗奈が田中相手にしきりにシナを作った。(空中ブランコ[例442])

・「**もうッ**」あや子は笑った目で永嶋を睨んだ。(臨場[前掲例23])

(245)? 「**もう**内科は融通が聞かないんだよなあ」

② 文体的な違い

話し手の評価感情表出という基本的な意味・機能の面で共通している「もう」と「まったく」には、文体的な違いが見られる。収集した用例を見ると、次の(246)のように、「まったく」は丁寧な言い方でも使用される。くだけた会話文での使用が特徴的な「もう」は使用されにくい。

(246) 「婦人服課の椿山課長のこと、ご存じですね」

そう訊ねたとたんに、マスターの顔色は暗く沈んだ。

「ええ、毎朝その席でね、コーヒーを一杯。タバコを一服。**まったく**人間の命なんて、わからないものですね。お引取り先ですか？」(略)

「椿山さんとは新入社員のところからのおなじみだから、お通夜ぐらいは何おうと思ったんですけど、デパートの人たちにまじってお焼香をするのも何だかさしでがましいようで、失礼しちゃったんです。あなたは、いらっしゃいましたか」
(椿山課長の七日間[前掲例 164])

(246)? **もう**人間の命なんて、わからないものですね。

5.1.4. 本節のまとめ

以上、本節では、「もう」と「まったく」の相互言い換え関係の観点から、両者に見られる共通点と相違点を述べた。本節の内容をまとめると、次のようになる。

① 「もう」と「まったく」いずれも使用可能な場合

「もう」と「まったく」は一語文となるか、文頭にも文末にもくるという構文的特徴で共通している。また、否定的評価感情を表す点でも共通している。そのため、次のように、相互に言い換えられる場合がある。

- ・「**もう**、だから一緒に歩きなさいっていったのに」(前掲例234)
→「**まったく**、だから一緒に歩きなさいっていったのに」
- ・「**まったく**連絡くらいして来ればいいのに」(前掲例235)
→「**もう**連絡くらいして来ればいいのに」

② 「もう」の使用の方が適切な場合

「もう」は肯定的評価感情も表す点で、「まったく」と異なっている。次のように、感動・感嘆や親しみの表明のような肯定的評価感情を表す場合、「まったく」の使用は不適切である。

- ・「**もう**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」(前掲例242)
→ ? 「**まったく**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」

③「まったく」の使用の方が適切な場合

収集した用例を見ると、主語と述語のある整った文では「まったく」の方が使用されやすい傾向がある。

・「何を勉強してきたんだ。**まったく**学費出した親は泣くよ」(前掲例 244)

→? 「**もう**学費出した親は泣くよ」

また、「まったく人間の命なんて、わからないものですね」(前掲例 246)のように丁寧な言い方でも、「もう」は使用されにくいと思われる。

5.2. 「まったく」と「ちょっと」の比較

本節では、「まったく」と「ちょっと」を取り上げ、＜感動詞的用法＞の相互比較を行う。

まず、3.4 と 4.4 で述べた「まったく」と「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴を下にまとめると、次のようになる。

特徴	まったく	ちょっと
①一語文	単独で文となる。	単独で文となる。
②構文的位置	文頭にも文末にもくる。	文頭にくる。
③発話場面における聞き手の有無	聞き手の存在が任意的である。 (内的独白でも使用される。)	聞き手の存在が義務的である。
④評価感情	否定的評価感情しか表せない。	評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本であるが、否定的評価感情を伴うことがある。
⑤文体	くだけた会話文に限定されない。	くだけた会話文に限定されない。

上記のように、「まったく」と「ちょっと」は、①⑤で共通しているが、文末にくるかどう(②)、聞き手の存在が義務的かどうか(③)、話し手の否定的評価感情に関わるかどうか(④)では、共通点と相違点を持つ。＜感動詞的用法＞における「まったく」と「ちょっと」の共通点をまとめると次のようになる。

一語文となるか(①)、文頭にきて(②)、聞き手に対する(③)否定的評価感情に関わる(④)。文体的には、くだけた会話文に限定されない(⑤)。

そして、「まったく」と「ちょっと」は、次のような点で相違している。

「まったく」は文末にもくるが、「ちょっと」が文末にくることは不自然である(②)。「まったく」は発話場面における聞き手の存在が任意的であるが、「ちょっと」は聞き手の存在が義務的で

ある(③)。基本的に、「まったく」は否定的評価感情表出で用いられ、「ちょっと」は評価感情に中立的な呼びかけで用いられる(④)。

本節では、以上をふまえ、「まったく」と「ちょっと」の言い換え関係を次のA～Cに分けて、＜感動詞的用法＞における共通点と相違点を記述する。

A. 「まったく」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合 (5.2.1)

B. 「まったく」の使用の方が適切な場合 (5.2.2)

C. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合 (5.2.3)

5.2.1. 「まったく」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合

3章と4章で述べたように、「まったく」と「ちょっと」は、基本的には、評価感情の表出なのか、呼びかけなのかという、異なった意味・機能で用いられる。そのため、両方とも使用可能な場面であっても、言い換えによって、それぞれ違う側面が前面化されるようになる。そこで、以下では、いずれも使用可能な場合を、「まったく」から「ちょっと」への言い換えの場合と「ちょっと」から「まったく」への言い換えの場合に分けて、用例を見ていく。

1) 「まったく」から「ちょっと」への言い換え

「ちょっと」に言い換えられる「まったく」は、次の(247)(248)のように、文頭にくるか単独で使用され、発話場面の聞き手に否定的評価感情を表出する場合である。ただし、(247)(248)のように、「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、相手に対する注意喚起の側面が前面化される。

(247) カウンターに顔を押しつけて、すっかり寝込んでいるるり子を見て、萌は思わず息を吐き出した。

「待ってたのよお」

文ちゃんが、ホッとしたように肩をすくめた。

「ごめんなさい」

「まったくどうにかしてよ。もう、大変だったんだから」

萌はるり子に近付き、肩を揺すった。

「るり子、帰るわよ」

るり子はその手を面倒臭そうに払い、自律の回らない声で答えた。

「やだ、まだ飲む。今夜はとことん飲んでやる」

「もう、十分飲んだでしょ」

(肩ごしの恋人)

(247) 「ちょっとどうにかしてよ。もう、大変だったんだから」

(248) 「お前……」くわえて火をつけながら、貢は言った。

「すぐ向こうへ帰るのか」

「ああ。そのつもりだけど」

「すぐって、すぐか」

「俺だってそんなに暇じゃない」

「で？ またそれっきりになっちゃうつもりか」

黙っていると、「**まったく……**」貢はあきれたように首を振った。

「お前ももうガキじゃあるまいし。いつまで拗ねてるつもりだ」

「拗ねる？」暁は眉を寄せた。

(星々の舟[前掲例 124])

(248) 黙っていると、「**ちょっと……**」貢はあきれたように首を振った。

2) 「ちょっと」から「まったく」への言い換え

次の(249)(250)の「ちょっと」は、「まったく」に言い換えることができる。波線部からも分かるように、ここで「ちょっと」は、否定的評価感情を伴った注意喚起で用いられている。ただし、(249)(250)のように「まったく」に言い換えると、否定的評価感情表出の側面が前面化される。

(249) 「ぐえっ」拓也がゲップをした。

「これ、拓也」と仁美。

「ぐえっ」達郎もわざとゲップをした。拓也がキャツキャとよろこんでいる。

「**ちょっとお、真似するでしょう**」仁美が非難した。

「いいじゃん。マナーぐらい、大人になったら自然と身につけるさ」

「癖になったら困るじゃない」

(空中ブランコ[前掲例 181])

(249) 「**まったく、真似するでしょう**」

(250) 帽子は取れたが、ガムテープが髪にくっついていて、頭頂部も、側頭部も。帽子の中全体に仕かけられたのだ。

めまいがした。ショックと怒りで全身が震えた。

「**ちょっとオ、エミリン**」声を荒らげた。「どこよ、出てらっしゃい！」

女たちが広美から離れていく。かかわり合いたくないという様子だ。

「こんなことして、ただじゃ済まさないわよ」

(イン・ザ・プール[前掲例 228])

(250) 「**まったく、エミリン**」 声を荒らげた。

なお、5.3 で述べるが、否定的評価感情を伴う注意喚起の「ちょっと」は、「もう」との言い換えも可能である。

5.2.2. 「まったく」の使用の方が適切な場合

「ちょっと」の使用には発話場面における聞き手の存在が義務的であるが、「まったく」の使用では重要ではない。次の(251)～(253)のように、「まったく」は、内的独白部分（または、内的独白に近い形）でも使用され得る。(251')～(253')のように、聞き手が存在しない場面における「ちょっと」の使用は不自然である。

(251) 《3 の 3、ルーキー鈴木全開》《新・若大将、開幕スタメンへまっしぐら》**まったく**マスコミときたら、
たかだかオープン戦で、二線級の投手からヒットを打ったぐらいで——。真一はスポーツ新聞を丸めると、
室内練習場のゴミ箱に放り投げた。(空中ブランコ)

(251')? **ちょっと**マスコミときたら、たかだかオープン戦で、二線級の投手からヒットを打ったぐらいで——。

(252) 私が帰る際、店主はエレベーターまで見送りに来てくれ、私はますます心苦しくなった。

「このビルは何という名前でしたっけ？」

「大嶺ビルだね」

最後にそんな会話を交わし、札を言って、私はエレベーターに乗った。

焼け跡は確かに一階にあった。ごみ収集日のパネルが貼られたあたりに、燃えたと思われる木製の置き
場があった。写真を撮る。ついでに五階を見上げて、不動産屋の看板も撮った。**まったく**、と思った。

「朝日不動産が燃やされた」などと紛らわしい言い方をしないでほしいものだ、と春に文句を言いたくな
る。正しくは、大嶺ビルが燃やされた、と言うべきだろうに、と。(重力ピエロ[前掲例 165])

(252')? **ちょっと**、と思った。

(253) 無職になってそろそろ二年になる。最初は「三十四歳、無職」という響きが犯罪者のように思えて恐ろ
しかったが、それもすぐに慣れた。**まったく**自分の適応能力に私ながら呆れる。今ではすっかり「三十八
歳、無職」に身も心もなじんだ。(プラナリア[前掲例 162])

(253')? **ちょっと**自分の適応能力に私ながら呆れる。

5.2.3. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合

「ちょっと」の使用が適切な場合は、話し手の評価感情を特に伴わない、単なる呼びかけの場合で
ある。次の(254)(255)の「ちょっと」は、聞き手に声をかける場面での使用である。評価感情に中立
的な単なる呼びかけの「ちょっと」は、「まったく」に言い換えることができない。

(254) タクシーに乗って、一分とたたない内に、三枝は眠り込んでしまった。これで安心、と気が緩んだのだ
ろう。

「**ちょっと**、行き先を変えて」

と智美が運転手に声をかけた。「——この料亭へ行ってちょうだい」

タクシーは〈雪路〉へと向かった。

(女社長に乾杯!)

(254')? 「**まったく**、行き先を変えて」

(255) おまえはエリに近づいて、言った。

「いまからでも走れるかもしれない」

「え？」

「**ちょっと**、これ、貸して」

エリの手から松葉杖を取った。

(疾走)

(255)? 「まったく、これ、貸して」

5.2.4. 本節のまとめ

以上、本節では、「まったく」と「ちょっと」の＜感動詞的用法＞における相互言い換えの関係を述べた。本節の内容をまとめると、次のようになる。

① 「まったく」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合

「まったく」と「ちょっと」は、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる点で共通点を持っているが、相互言い換えが可能である場合でも、言い換えによって、それぞれ違う側面が前面化される。「ちょっと」に言い換えられる「まったく」は、発話場面にいる聞き手に向けられた、話し手の否定的評価感情の表出である。ただし、「ちょっと」に言い換えると、注意喚起の側面が前面化されるようになる。

・「**まったく**どうにかしてよ。もう、大変だったんだから」(前掲例 247)

→「**ちょっと**どうにかしてよ」

逆に、「ちょっと」を「まったく」に言い換えると、話し手の評価感情表出の方が前面化される。

・「**ちょっとお**、真似するでしょう」仁美が非難した。(前掲例 249)

→「**まったく**、真似するでしょう」

② 「まったく」の使用の方が適切な場合

発話場面に存在しない対象や自分自身への否定的評価感情を表す場合は、「まったく」の使用が適切である。「まったく」は内的独白でも使用される。

・**まったく**自分の適応能力に私ながら呆れる。(前掲例 253)

→？**ちょっと**自分の適応能力に私ながら呆れる。

③ 「ちょっと」の使用の方が適切な場合

評価感情を特に伴わない、相手に軽く声をかける場面では「ちょっと」の使用が適切である。

・「**ちょっと**、行き先を変えて」と智美が運転手に声をかけた。(前掲例 254)

→？「**まったく**、行き先を変えて」

5.3. 「もう」と「ちょっと」の比較

本節では、「もう」と「ちょっと」を取り上げ、相互言い換え関係を考察し、＜感動詞的用法＞における共通点と相違点を記述する。

2.4 と 4.4 で述べた「もう」と「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴をまとめると、次のようになる⁶⁰。

特徴	もう	ちょっと
①一語文	単独で文となる。	単独で文となる。
②構文的位罫	文頭にも文末にもくる。	文頭にくる。
③発話場面における聞き手の有無	聞き手の存在が任意的である。	聞き手の存在が義務的である。
④評価感情	否定的評価感情も肯定的評価感情も表せる。 (ただし、肯定的評価感情の場合において、さそいかけ文とともに用いられる例は見当たらない。)	評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本だが、否定的評価感情を伴うことがある。 (明らかに肯定的な評価感情を伴う場合は見当たらない。)
⑤文体	くだけた会話文に限定される。	くだけた会話文に限定されない。

収集した用例に限って言えば、「もう」と「ちょっと」は、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる場合において相互言い換えが考えられる。「もう」と「ちょっと」の共通点を簡単にまとめると次のようになる。

一語文となるか (①)、文頭にきて (②)、聞き手に対する (③) 話し手の否定的評価感情に関わる (④)。文体的には、くだけた会話文で使用された場合、相互言い換えが考えられる (⑤)。

そして、「まったく」と「ちょっと」は、次のような点で違っている。

「もう」は文末にもくるが、「ちょっと」が文末にくることは不自然である (②)。「もう」は発話場面における聞き手の存在が任意的であるが、「ちょっと」は聞き手の存在が義務的である (③)。基本的に、「もう」は話し手の否定的・肯定的評価感情表出で用いられ、「ちょっと」は評価感情に中立的な呼びかけで用いられる (④)。文体的にも「もう」はくだけた会話文に限定されるが、「ちょっと」はくだけた会話文に限定されない (⑤)。

⁶⁰ 収集用例のなかで「ちょっと」に言い換えられる「もう」は、次のように、さそいかけ文が後続する場合使用であった (後述する5.3.1を参照)。次の例で「もう」は、話し手の否定的評価感情を表している。

・「家裁の結果も聞いたのか」「いや、そこまでは」「審判不開始の決定だ。問題ねえだろう」「それにしたって凶器準備集合ってのは物騒だ。一体やつは何をやらかしたんです?」「知らねえ」「**もう!** 惚けないでくださいよ。校長が知らないはずないでしょうが」(臨場[前掲例68])

→「**ちょっと!** 惚けないでくださいよ」

2.4.3で述べたように、「もう」は否定的評価感情も肯定的評価感情も表すことができるのだが、収集した用例を見る限り、肯定的評価感情を表す「もう」の場合において、さそいかけ文とともに使用される (さそいかけ文が後続する) 例は見当たらなかった。ここでは、この点に留意して、「もう」と「ちょっと」の言い換え関係を考えることにする。

本節では、以上をふまえ、「もう」と「ちょっと」の言い換え関係を次の A～C に分けて、＜感動詞的用法＞における「もう」と「ちょっと」の共通点と相違点を述べていく。

- A. 「もう」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合 (5.3.1)
- B. 「もう」の使用の方が適切な場合 (5.3.2)
- C. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合 (5.3.3)

5.3.1. 「もう」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合

5.2.1 で述べた「まったく」と「ちょっと」の言い換え関係と同様、「もう」と「ちょっと」も、評価感情表出なのか、呼びかけなのかという、基本的に異なる意味・機能で用いられ、言い換えによって、それぞれ違う側面が前面化されるようになる。そこで、本節でも、「もう」から「ちょっと」への言い換えの場合と、「ちょっと」から「もう」への言い換えの場合に分けて記述する。

1) 「もう」から「ちょっと」への言い換え

次の(256)のように、話し手の否定的評価感情を表出する「もう」は、「ちょっと」に言い換えることができる。収集した用例のうち「ちょっと」への言い換えが考えられる例は、(256)の 1 例しか見当たらない。「もう」の単独使用であるが、「惚けないでくださいよ」といったさそいかけ文が後続している。ただし、(256')のように、「ちょっと」に言い換えると、注意喚起の側面が前面化される。

(256) 「家裁の結果も聞いたのか」

「いや、そこまでは」

「審判不開始の決定だ。問題ねえだろう」

「それにしたって凶器準備集合ってのは物騒だ。一体やつは何をやらかしたんです？」

「知らねえ」

「もう！ 惚けないでくださいよ。校長が知らないはずないでしょうが」

(臨場[前掲例 68])

(256') 「ちょっと！ 惚けないでくださいよ」

2) 「ちょっと」から「もう」への言い換え

上述したように、「ちょっと」は、評価感情に中立的な呼びかけとしての使用が基本となる。しかし、使用場面によっては、「ちょっと」が否定的評価感情を伴うことがある。否定的評価感情を伴う注意喚起の「ちょっと」は、「もう」に言い換えることができる。ただし、「もう」に言い換えると、話し手の否定的評価感情の方が前面化されるようになる。

(257) 「ぐえっ」拓也がゲップをした。

「これ、拓也」と仁美。

「ぐえっ」達郎もわざとゲップをした。拓也がキャツキヤとよろこんでいる。

- 「ちょっとお、真似するでしょう」仁美が非難した。
「いいじゃん。マナーぐらい、大人になったら自然と身につけるさ」
「癖になったら困るじゃない」 (空中ブランコ[前掲例]181)
- (257)「**もう**、真似するでしょう」
- (258)「そうだ、今日はおばさんに挨拶しなきゃ。」両隣にな川と絹代にぶつからないよう縮こまって靴を脱ぎながら、小声で言った。
「別にいいよ、めんどくさいし。静かに廊下歩いて、そのままおれの部屋に行けばいい。」
「ちょっとー、いいわけないでしょ。」
絹代がなんの躊躇もなく、奥からテレビの聞こえる居間の襖を開けた。 (蹴りたい背中)
- (258)「**もう**、いいわけないでしょ」
- (259) 帽子は取れたが、ガムテープが髪にくっついていて。頭頂部も、側頭部も。帽子の中全体に仕かけられたのだ。
めまいがした。ショックと怒りで全身が震えた。
「ちょっとオ、エミリン」声を荒らげた。「どこよ、出てらっしゃい！」
女たちが広美から離れていく。かわり合いたくないという様子だ。
「こんなことして、ただじゃ済まないわよ」 (イン・ザ・プール[前掲例 228])
- (259)「**もう**、エミリン」声を荒らげた。

収集した用例からは、明らかに肯定的な評価感情を伴った「ちょっと」の例が見られず、評価感情に中立的か、否定的評価感情を伴った例しか見られない。そのため、「もう」との言い換えが可能になるのも、上掲した(257)～(259)のような否定的評価感情を伴った場合であると考えられる。また、この場合は、5.2.1 で述べたように、「まったく」を使用してもよい⁶¹。「もう」「まったく」「ちょっと」の相互言い換えについては、5.4 で総合的に記述することにする。

5.3.2. 「もう」の使用の方が適切な場合

話し手の否定的・肯定的評価感情の表出で用いられる「もう」は、その感情が向けられた対象が目の前にいる話し手でなくてもよい。次の(260)(261)のように、聞き手とは関係なく、もっぱら話し手の感情表出で用いられた「もう」は、「ちょっと」に言い換えられないと思われる⁶²。

⁶¹ しかし、収集した用例には、1例ではあるが、「もう」にしか言い換えられない「ちょっと」の例が見られる。(257)～(259)とは違って、次の例は否定的評価感情ではあるものの、聞き手への親しみを感じさせる「もう」である。「まったく」は相手への親しみの表明では用いられないため、次の例ではその使用が不適切であると思われる。ここでも「ちょっと」を「もう」に言い換えると、評価感情表出の側面が前面化されるようになる。

・女子の色紙の絵をあらためて見つめた。(略)／「**ちょっと**、やだ、そんなにじっくり見ないでよお」肩を軽くぶたれた。(その日のまえに[前掲例233])
→「**{もう／？まったく}**、やだ」

⁶² 肯定的評価感情が前面化された文においても、「ちょっと」を使用することがある(例えば「あの花子さんという子、**ちょっと**いいよね」のような場合。4.1.1.1の注48を参照)。しかし、この場合の「ちょっと」は、＜感動詞的用法＞の「もう」とは違って、話し手が肯定的評価感情を直接的に表出するとは言い難い。そのため、次の例のような肯定的評価感情表出で用いられた「もう」は、「ちょっと」に言い換えにくいと考えられる。

(260) 椿は行き昏れた子供のように路上に佇み、黒い鞆の中から携帯電話機を取り出した。
☆のボタンを押す。長い発信音のあとで、マヤのあわただしい声のはね返ってきた。
「もしもし、なによっ！ こっちはいま大変なんだから、急用じゃなかったら後にして」(略)「ど、どうしたんですか。もしや宗教戦争でも」
「思い切ってつまらないことは言わないで。特別運送措置法の違反者が出たのよ。**もう、サイッテ**ー！
私の管理能力が問われる。きつと始末書じゃすまないわ。リストラよー！ 目の前まっくらよー！」
(椿山課長の七日間[前掲例 65])

(260')? 「**ちょっと**、サイッテ

(261) 「誰も立ち止って聴いてなんかないんだけどね、一所懸命歌ってるの。寒いじゃない、あそこ吹きさらしだから。ホッペなんて真っ赤になってて、でも必死で歌ってるのよ、**もう、それ**見てるだけで感動しちゃうんだから」
(その日のまえに[前掲例 60])

(261')? 「**ちょっと**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」

5.3.3. 「ちょっと」の使用の方が適切な場合

話し手の評価感情を特に伴わず、聞き手に呼びかける場面で用いられた「ちょっと」は、「もう」に言い換えられない。「もう」が単なる呼びかけで用いられることはなく、(262')(263')のように使用できない。

(262) タクシーに乗って、一分とたたない内に、三枝は眠り込んでしまった。これで安心、と気が緩んだのだろう。
「**ちょっと**、行き先を変えて」
と智美が運転手に声をかけた。「——この料亭へ行ってちょうだい」
タクシーは〈雪路〉へと向かった。
(女社長に乾杯！[前掲例 254])

(262')? 「**もう**、行き先を変えて」

(263) 常磐のほうも草薙に気づいたらしく、小さく会釈してから通りすぎようとした。
「あ、**ちょっと**」草薙は声をかけた。戸惑った表情で振り返った常磐に、彼は笑顔を向けた。
「少し訊きたいことがあるんだけど、時間あるかな？」
常磐は腕時計を見てから、少しだけなら、と答えた。
(容疑者 X の献身)

(263')? 「あ、**もう**」草薙は声をかけた。

・「ほら、ストリートミュージシャンっているじゃない、ギター弾いて歌ってる子。いたのよ、それが。一人で歌ってるんだけど、かーわいいの、カッコいいの。外国の歌でね、曲もちょっと変わってるんだけど、いい声してるの、細くて、高くて、ボーイソプラノみたいな。顔もかわいいし、小柄でスリムだし、**もう、サイコー**なのよ」(その日のまえに[前掲例73])
→ ? 「**ちょっと**、サイコーなのよ」

5.3.4. 本節のまとめ

本節では、＜感動詞的用法＞における言い換え関係の観点から、「もう」と「ちょっと」の共通点と相違点を記述した。本節の内容をまとめると、次のようになる。

① 「もう」と「ちょっと」いずれも使用可能な場合

「もう」と「ちょっと」は、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる場合において、相互言い換えが考えられる。収集した用例からは、明らかに肯定的な評価感情を伴った「ちょっと」の例が見られず、評価感情に中立的か、否定的評価感情を伴った例しか見られない。そのため、「もう」に言い換えられる「ちょっと」は、否定的評価感情を伴ったものである。ただし、言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化されるようになる。逆に、「ちょっと」を「もう」に言い換えると、聞き手への注意喚起の側面が前面化される。

- ・「**もう**！ 惚けないでくださいよ。校長が知らないはずないでしょうが」（前掲例 256）
→「**ちょっと**！ 惚けないでくださいよ」
- ・「**ちょっとお**、真似するでしょう」仁美が非難した。（前掲例 257）
→「**もう**、真似するでしょう」

② 「もう」の使用の方が適切な場合

聞き手とは関係なく、もっぱら話し手の評価感情表出で用いられる「もう」は、「ちょっと」に言い換えられない。

- ・「(略) 特別運送措置法の違反者が出たのよ。**もう**、サイッター！」（前掲例 260）
→？ **ちょっと**、サイッター！

③ 「ちょっと」の使用の方が適切な場合

評価感情に中立的な単なる呼びかけの場面で用いられる「ちょっと」は、「もう」に言い換えられない。

- ・「**ちょっと**、行き先を変えて」と智美が運転手に声をかけた。（前掲例 262）
→？「**もう**、行き先を変えて」

5.4. 本章のまとめ

本章では、＜感動詞的用法＞における「もう」「まったく」「ちょっと」の比較を行い、相互の言い換え関係について記述した。その内容は、次のようにまとめられる。

- ① 「まったくもう」という複合形式があることから確認できるように、「もう」と「まったく」は意味・機能的に共通点を持っている。両者は、話し手の評価感情表出という基本的意味・機能で共通しており、否定的評価感情の表出で用いられた「もう」と「まったく」は相互に言い換え

ることができる。次の A、B'のように言い換えても、話し手の否定的評価感情を表すということに変わりはない。

A **もう**、だから一緒に歩きなさいっていったのに。

A' **まったく**、だから一緒に歩きなさいっていったのに。

B **まったく**、連絡くらいして来ればいいのに。

B' **もう**、連絡くらいして来ればいいのに。

- ② しかし、「もう」は、次の C のように肯定的評価感情を表すこともできる。この場合は、否定的評価感情しか表せない「まったく」に言い換えられず、「もう」の使用が適切である。一方、「まったく」には、文の構造と文体的特徴から「もう」に言い換えられない場合がある。D のように主語と述語が整った文や丁寧な言い方での「まったく」は「もう」に言い換えられない。文体的に「もう」はくだけた会話文に限定される。

C **もう**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

C' ?**まったく**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

D **まったく**学費だした親は泣きますよ。

D' ?**もう**学費だした親は泣きますよ。

- ③ 次に、「まったく」と「ちょっと」も相互言い換えができる場合がある。「もう」と「まったく」とは違って、言い換えると、それぞれの個別的な側面が前面化される。次の E'のように「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、注意喚起という側面が前面化する。逆に、F'のように「ちょっと」を「まったく」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化する。

E **まったく**どうにかしてよ。

E' **ちょっと**どうにかしてよ。

F **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

F' **まったく**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

- ④ しかし、次の G、H のような場合は、「まったく」や「ちょっと」の使用が適切である。発話場面における聞き手の存在が任意的である「まったく」は、G のように、その場面に存在しない対象や話し手自身への評価感情表出でも、内的独白でも使用される。一方、H のように、話し手の否定的評価感情を伴わず、単なる呼びかけで用いられた「ちょっと」は「まったく」に言い換えることができない。

G **まったく**自分の適応能力に私ながら呆れる。

G' ? **ちょっと**自分の適応能力に私ながら呆れる。

H **ちょっと**、忘れ物ですよ。

H' ? **まったく**、忘れ物ですよ。

- ⑤ 最後に、「もう」と「ちょっと」を比較してみると、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる場合において、相互言い換えが考えられる。収集した用例からは、明らかに肯定的評価感情を伴った「ちょっと」の例が見られず、評価感情に中立的か、否定的評価感情を伴った例しか見られない。そのため、「まったく」と「ちょっと」の場合と同様、否定的評価感情に関わる場合において、使用上の共通性が見られる。また、「もう」と「ちょっと」も、言い換えると、それぞれ違う側面が前面化されてくる。Iでは注意喚起という側面が前面化され、Jでは話し手の評価感情表出の側面が前面化される。

I **もう**、惚けないでくださいよ。

I' **ちょっと**、惚けないでくださいよ。

J **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

J' **もう**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

- ⑥ また、「もう」と「ちょっと」においても、「もう」や「まったく」の使用が適切な場合が考えられる。Kのように、聞き手とは関係なく、もっぱら話し手の評価感情表出で用いられた「もう」は、「ちょっと」に言い換えられない。そして、Lのように、話し手の評価感情を特に伴わず、聞き手に声をかける場面で用いられる「ちょっと」は、「もう」に言い換えられない。

K **もう**、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

K' ? **ちょっと**、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

L **ちょっと**、忘れ物ですよ。

L' ? **もう**、忘れ物ですよ。

以上、①～⑥で述べてきたように、「もう」「まったく」「ちょっと」は、＜感動詞的用法＞において、＜話し手の肯定的・否定的評価感情の表出＞、＜話し手の否定的評価感情の表出＞、＜聞き手への軽い呼びかけ＞といった個別的な特徴を持つが、相互言い換えが可能な場合が出てくる。上掲したA～Lのうち3つとも使用可能な場合を再度示すと、次のようになる。

M	もう、惚けないでくださいよ。	<否定的評価感情表出>
M'	まったく、惚けないでくださいよ。	<否定的評価感情表出>
M''	ちょっと、惚けないでくださいよ。	<否定的評価感情+注意喚起>
N	まったく、どうにかしてよ。	<否定的評価感情表出>
N'	もう、どうにかしてよ。	<否定的評価感情表出>
N''	ちょっと、どうにかしてよ。	<否定的評価感情+注意喚起>
O	ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。	<否定的評価感情+注意喚起>
O'	もう、そんなことしたら子供が真似するでしょう。	<否定的評価感情表出>
O''	まったく、そんなことしたら子供が真似するでしょう。	<否定的評価感情表出>

<感動詞的用法>において、「もう」「まったく」は話し手の評価感情表出で用いられるが、「ちょっと」は聞き手への注意喚起で用いられ、その基本的な意味・機能を異にしている。しかし、上掲した M、N、O のように、聞き手に向けられた、話し手の否定的評価感情に関わる使用場面においては、「もう」「まったく」「ちょっと」の相互言い換えが可能になる。ただし、言い換えると、それぞれの個別的な特徴が前面化されてくる。「もう」「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、注意喚起の側面が前面化されるようになる。逆に、「ちょっと」を「もう」「まったく」に言い換えると、評価感情表出の側面が前面化される。つまり、<感動詞的用法>の「もう」「まったく」「ちょっと」は、相互言い換え関係において、<話し手の評価感情表出>なのか<聞き手への注意喚起>なのかといった個別的な特徴を保ちつつ、話し手の<否定的評価感情>に関わるといった共通性を持つ。

第三部 結論

第三部となる第6章では、本論文で述べてきたことをまとめ、今後の課題を提示する。

第6章 おわりに

本論文では、「もう」「まったく」「ちょっと」を対象に、類義語「既に」「全然」「少し」と比較しつつ、時間、完全否定、程度・量という異なる意味を表す＜副詞用法＞から、どのような感動詞的用法＞が派生してきているのかを記述した。そのうえで、明治期との比較を行い、現代日本語における「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴を記述し、相互比較を行った。本章では、まず、本論の内容をまとめ（6.1）、本研究における今後の課題について提示する（6.2）。

6.1. 本論文のまとめ

従来の研究において指摘されてきたように、副詞と感動詞は近い関係にあり、両方の意味・機能を有する単語（形式）が見られる。本論文で取り上げた「もう」「まったく」「ちょっと」は、次の1)～3)に見られるように、時間的意味（事態が実現した後）（1A）、完全否定（2A）、程度の限定（程度の低さ）（3A）で用いられる一方、話し手の評価感情表出（1B、2B）、聞き手への注意喚起（3B）としても用いられる。「もう」「まったく」「ちょっと」が、それぞれ A と B のような意味・機能で使用されることは、国語辞典や先行研究において既に明らかになっている。

1A) 彼は**もう**韓国に帰国した。

1B) **もう**、惚けないでくださいよ。

2A) 彼は英語が**まったく**分らない。

2B) **まったく**、どうにかしてよ。

3A) 今日は昨日より**ちょっと**涼しい。

3B) **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

本論文では、「もう」「まったく」「ちょっと」における A のような使用を＜副詞用法＞、B のような使用を＜感動詞的用法＞とし、先行研究の指摘をふまえて、本来の＜副詞用法＞からどのような＜感動詞的用法＞が派生しているのかを記述した。そのうえで、＜感動詞的用法＞におけるそれぞれの使用を比較し、本来の＜副詞用法＞では異なった意味・機能を持つ「もう」「まったく」「ちょっと」が、派生的なく＜感動詞的用法＞では一定の共通性を見せることを述べた。実際、上記の B は、次の B'のように、相互に言い換えることができる。ただし、言い換えによって、＜話し手の評価感

情表出>かく聞き手への注意喚起>かの側面が前面化されるといった違いもあるが、いずれも話し手の<否定的評価感情>に関わるという点で共通している。

1B') {もう／まったく／ちょっと}、惚けないでくださいよ。

2B') {もう／まったく／ちょっと}、どうにかしてよ。

3B') {もう／まったく／ちょっと}、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

以下では、B'のような言い換えが可能になることについて、本論の各章で述べてきた「もう」「まったく」「ちょっと」の<感動詞的用法>の特徴とそれらに見られる共通点と相違点をまとめる。

①「もう」の意味・機能

「もう」は、Aのように、現在・過去（非未来）のことを表す文で用いられると、事態が実現した後であることを表す。このような「もう」は「既に」に言い換えられる。しかし、現在・過去のことを表す文であっても、話し手の評価感情（事態の実現が予想より早いといった話し手の驚き）が前面化されたA'では、「既に」の使用が不適切になる。また、文体的にも「既に」はA'のようなくだけた会話文では用いられにくい。「既に」とは違って、話し手の評価感情が前面化され、くだけた会話文に使用されやすい「もう」からは、<感動詞的用法>が派生している。

A 彼は**もう**韓国に帰国した。

A' あれ、**もう**戻ってきたの？

B **もう**、惚けないでくださいよ。

収集した明治期と現代の用例を比較してみると、現代になって「もう」の<感動詞的用法>の使用が増加していると考えられる。現代語に特徴的な<感動詞的用法>の「もう」は、Bのような否定的評価感情表出だけでなく、「もう、それ見てるだけで感動しちゃうんだから」のような肯定的評価感情表出でも用いられる。また、「惚けないでくださいよ、もう」のように、「もう」が文末にくることもでき、「もう！」のように一語文にもなる。

②「まったく」の意味・機能

「まったく」は、Aのように否定述語と共起して、完全否定を表す。このような「まったく」は「全然」に言い換えられる。しかし、A'のように「まったく」が文頭にくると、話し手の否定的な評価感情（話し手の呆れた気持ち）が前面化され、「全然」に言い換えにくくなる。また、「まったく」といった形も、Aでは不可能だが、A'Bでは可能である。話し手の評価感情が前面化され、会話文での使用範囲が広い⁶³「まったく」の方からのみ、<感動詞的用法>が派生している。

⁶³ 収集した用例では、肯定形式と共起する場合において、「まったく」の方が「全然」に比べ使用範囲が広いことが確認できた。「異なり」を表す場合は両者とも使用できるが（例、会場の雰囲気が前とは{まったく／全然}違う。）、「同一」「欠如」を表す場合や（例、彼の話にはまったく{同感だ／無関心だ}。）、話し手の驚きや否定的感情が前面化された場合（例、彼の言動にはまったく驚いた。／まったくしつこい人だ。）は、「全然」は使用されない。

- A あいつったら英語が**まったく**分からないんだよ。
A' **まったく**あいつったら英語が分からないんだよなあ。
B **まったく**、どうにかしてよ。

収集した用例から言えば、「まったく」の＜感動詞的用法＞は明治期にはその使用が見られない。現代語に特徴的な「まったく」の＜感動詞的用法＞は、Bのように、否定的評価感情しか表せない。また、「どうにかしてよ、まったく」のように、「まったく」が文末にくることもでき、「まったく！」のように一語文にもなる。

③「ちょっと」の意味・機能

「ちょっと」は、Aのように程度・量を限定し、程度の低さ、量の少なさを表す。しかし、A'では「ちょっと」が程度・量を限定するのではない。これは「少し」との言い換えができなくなることから確認できる。A'のように、話し手の評価感情（否定的評価感情）が前面化された場合は、Aとは違って、「ちょっと」を省略しても文の意味は変わらない。くだけた会話文では使用されにくく、もっぱら程度・量を限定する「少し」からは、＜感動詞的用法＞が派生していない。

- A 今日は昨日より**ちょっと**涼しい。／ ワインを**ちょっと**飲んだら、気分がよかった。
A' この問題は**ちょっと**難しい。私にはとても無理だ。／ **ちょっと**やめてよ。
B **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

収集した用例では、相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞は明治期からその使用が確認できる。ただし、収集した用例に限って言えば、Bのように否定的評価感情を伴った注意喚起としての使用は、現代語に特徴的であると言える。

以上、①～③で述べたように、「もう」「まったく」「ちょっと」は、本来の＜副詞用法＞では全く異なった意味・機能で用いられるが、話し手の評価感情が前面化され、くだけた会話文で使用されやすいという点で共通していることが、それぞれの類義語「既に」「全然」「少し」との比較で確認できた。最後に、「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の概略をまとめ、＜感動詞的用法＞における共通点と相違点について述べる。

④ 感動詞的用法の相互比較

「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の特徴は以下のようにまとめられる。

特徴	もう	まったく	ちょっと
一語文	単独で文となる。	単独で文となる。	単独で文となる。
構文的位罫	文頭にも文末にもくる。	文頭にも文末にもくる。	文頭にくる。
発話場面における聞き手の存在	任意的である。	任意的である ⁶⁴ 。	義務的である。
評価感情	否定的評価感情も肯定的評価感情も表せる ⁶⁵ 。	否定的評価感情しか表せない。	評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本だが、否定的評価感情を伴うことがある ⁶⁶ 。
文体	くだけた会話文に限定される。	くだけた会話文に限定されない。	くだけた会話文に限定されない。

④-1 「もう」と「まったく」の共通点と相違点

<共通点>

- ・一語文となるか、文頭か文末にきて、話し手の否定的評価感情の表出で用いられる。

<相違点>

- ・「もう」は肯定的評価感情の表出でも用いられる。
- ・「もう」はくだけた会話文に限定されるが、「まったく」は丁寧な言い方でも用いられる。

「もう」と「まったく」は、話し手の評価感情表出という基本的意味・機能で共通しており、1B'、2B'のように、くだけた会話文で用いられた場合、相互に言い換えることができる。しかし、1C、2C では、相互言い換えができない。1C のように、肯定的評価感情を表す場合は、「もう」の使用が適切である。また、2C のように、主語と述語が整った文や丁寧な言い方の場合は、「まったく」の使用が適切である。

1B) **もう**、惚けないでくださいよ。

1B') **まったく**、惚けないで下さいよ。

2B) **まったく**、どうにかしてよ。

2B') **もう**、どうにかしてよ。

1C) **もう**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

1C') ?**まったく**、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

2C) **まったく**学費だした親は泣きますよ。

2C') ?**もう**学費だした親は泣きますよ。

⁶⁴ 収集した用例では、「まったく」は内的独白での使用も特徴的である。

⁶⁵ ただし、収集した用例を見る限り、「もう」が肯定的評価感情を表す場合において、さそいかけ文とともに用いられる例は見当たらない。

⁶⁶ 収集した用例では、「ちょっと」が明らかに肯定的な評価感情を伴う場合は見られない。

④-2 「まったく」と「ちょっと」の共通点と相違点

<共通点>

- ・一語文となるか、文頭にきて、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる。
- ・くだけた会話文に限定されない。

<相違点>

- ・基本的に、「まったく」は評価感情表出で用いられ、「ちょっと」は呼びかけで用いられる。
- ・「まったく」は文末にもくる。
- ・「ちょっと」は発話場面における聞き手の存在が義務的である。

「まったく」と「ちょっと」も相互言い換えができる場合がある。ただし、「もう」と「まったく」の場合とは違って、言い換えると、それぞれの個別的な側面が前面化されてくる。2B'のように、「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、聞き手への注意喚起という側面が前面化されるが、3B'のように、「ちょっと」を「まったく」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化する。しかし、2D、3C のような場合は、相互に言い換えることができない。2D のように、聞き手に向けられた評価感情ではなく、話し手自身に対する評価感情の場合は、「まったく」の使用が適切である。そして、3C のように、評価感情に中立的な単なる呼びかけの場合は、「ちょっと」の使用が適切である。

2B) **まったく**、どうにかしてよ。

2B') **ちょっと**、どうにかしてよ。

3B) **ちょっと**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

3B') **まったく**、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

2D) **まったく**自分の適応能力に私ながら呆れる。

2D') ? **ちょっと**自分の適応能力に私ながら呆れる。

3C) **ちょっと**、忘れ物ですよ。

3C') ? **まったく**、忘れ物ですよ。

④-3 「もう」と「ちょっと」の共通点と相違点

<共通点>

- ・一語文となるか、文頭にきて、聞き手に対する話し手の否定的評価感情に関わる。

<相違点>

- ・基本的に、「もう」は評価感情表出用いられ、「ちょっと」は呼びかけで用いられる。
- ・「もう」は文末にもくる。
- ・「ちょっと」は発話場面における聞き手の存在が義務的である。
- ・「もう」はくだけた会話文に限定されるが、「ちょっと」は丁寧な言い方でも用いられる。

「もう」と「ちょっと」の場合も、くだけた会話文で用いられ、話し手の否定的評価感情に関わる場合において、相互に言い換えられる場合が見られる。収集した用例を見る限り、「ちょっと」が明らかに肯定的である評価感情を伴う場合は見られず、「もう」との言い換えも否定的評価感情の場合にしかできないと判断される。ただし、この場合も、1B'のように「もう」を「ちょっと」に言い換えると、注意喚起という側面が前面化されるが、逆に、3B'のように「ちょっと」を「もう」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化される。また、1Dのように聞き手とは関係なく、もっぱら話し手の感情表出で用いられた「もう」や、3Cのように評価感情に中立的な単なる呼びかけで用いられる「ちょっと」は、互いに言い換えることができない。

1B) もう、惚けないでくださいよ。

1B') ちょっと、惚けないで下さいよ。

3B) ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

3B') もう、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

1D) もう、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

1D') ?ちょっと、サイッター！ リストラよー！ 目の前まっくらよー！

3C) ちょっと、忘れ物ですよ。

3C') ?もう、忘れ物ですよ。

以上のように、本論文では、＜感動詞的用法＞における「もう」「まったく」「ちょっと」の相互比較を行った。「もう」「まったく」「ちょっと」が＜感動詞的用法＞を持つことは、従来の研究でも既に指摘されていたことであるが、本論文では、＜感動詞的用法＞の「もう」「まったく」「ちょっと」の間に、互いに共通している側面があり、相互言い換えが可能になる場合があることを確認することができた。本節の冒頭で挙げたいずれも使用可能な場合を再度示すと、次のようになる。

- | | |
|--------------------------------|----------------|
| 1B) {もう／まったく}、惚けないでくださいよ。 | [否定的評価感情表出] |
| ちょっと、惚けないでくださいよ。 | [否定的評価感情＋注意喚起] |
| 2B) {まったく／もう}、どうにかしてよ。 | [否定的評価感情表出] |
| ちょっと、どうにかしてよ。 | [否定的評価感情＋注意喚起] |
| 3B) ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。 | [否定的評価感情＋注意喚起] |
| {もう／まったく}、そんなことしたら子供が真似するでしょう。 | [否定的評価感情表出] |

④で述べたことを総合的に言うと、＜くだけた会話文＞において、＜聞き手に対する＞、話し手の＜否定的評価感情＞と関わる場合、「もう」「まったく」「ちょっと」はいずれも使用可能となり、相互に言い換えることができる。しかし、これらが全く同じ意味・機能で用いられるのではない。

「もう」と「まったく」では＜話し手の評価感情表出＞の側面が前面化されるが、「ちょっと」では＜聞き手への注意喚起＞の側面が前面化され、個別的な意味・機能上の特徴を保ちつつ、相互言い換えが可能になるのである。

6.2. 今後の課題

最後に、本論文で明らかにできなかった点を中心に、今後の課題として以下にまとめておく。

① 品詞論的観点からの理論的考察

本論文では、副詞と感動詞に関する品詞論的観点からの理論的な考察が全く欠けている。従来指摘されてきたように（鈴木 1973、国語学会 1980、山口 1984、金田一 1988 など）、副詞と感動詞の認定についてはさまざまな議論がなされており、両者が近い関係にあることが明らかになっている。特に、副詞が感動詞としても使用されることについて、佐久間（1940：132）では、「もしもし」「ちょいと」のような「単語くずれ」ともいうべきものがあるとし、さらに「コソアド系のもので呼びかけに用いられる」ものが種々あることが指摘されているが、現在の筆者には、品詞論における感動詞の認定及び他品詞からの転成の問題について理解が及んでいない。今後は、なぜ本来の副詞から感動詞としての用法が派生するようになったのかについて、理論的な観点から考察を進めていかなければならない。

また、原則的に、発話の場面にしばられる＜感動詞的用法＞においては、発話意図や話し手と聞き手の関係などによって、アクセントやイントネーションが違ってくる場合が多いと思われるが、この点についても考察が及ばなかった。Leech（1983：15）では、（i）話し手と聞き手（addresser and addressee）、（ii）コンテキスト（context）、（iii）発話の意図（goals）、（iv）発話内行為（illocutionary act）、（v）発話（utterance）といった5つの要素に、発話の時間と場所といった要素が含まれて、「発話場面（speech situation）」という概念が成り立つことが指摘されている。Leech（1983）の指摘通りに、「発話の場面との関連での意味に関わる」という語用論的観点からの考察が必要となる。この点についても、今後の課題としたい。

② 徹底的な用例調査

本論文では、事例に基づいて、「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞を記述したが、豊富な用例からの帰納的記述を十分には行うことができなかった。まず、明治期の用例は、電子コーパス（『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』）の非常に限られた作家（二葉亭四迷、田山花袋、森鷗外、夏目漱石）の作品より得られたものであった。また、＜副詞用法＞から＜感動詞的用法＞がどのように派生しているのかその経緯を考察するためには、明治と現代だけではなく、大正と昭和の用例についても調査する必要があるのだが、本論文では実施できなかった⁶⁷。明治期から＜感動詞的

⁶⁷ 本論文では、明治期と現代の比較にあたって、明治後期（1887年～1912年）と1980年以降に発表された小説にデータを限定しており、その間の用例については扱うことができなかった。

用法>が見られる「ちょっと」に関しては明治期以前の用例も調査する必要がある。今後、豊富な実例に基づいて、「もう」「まったく」「ちょっと」の<感動詞的用法>を慎重に検証し記述していきたい。

③ 他の言語における副詞の<感動詞的用法>との比較対照

程度が低いこと、量が少ないことを表す副詞に<感動詞的用法>が派生している現象は、日本語だけではなく、韓国語でも見受けられる。本論文で取り上げた「もう」「まったく」に関しては類似した現象が見られないが、「ちょっと」に関しては、韓国語においても類似した<感動詞的用法>が派生している。

「ちょっと」に相当する韓国語副詞「조금 (cogum) / 좀 (com)」は、A のように少量を表す場合はいずれも使用可能であるが、B のように、さそいかけ文において、相手を配慮し命令を和らげる場合においては、一方しか使用できない。「ちょっと」と「少し」との間に見られる意味・機能上の違いが韓国語の副詞「조금 (cogum) / 좀 (com)」にもあるように考えられる。

A (요리강습하면서) 설탕을 {조금 (cogum) / 좀 (com)} 넣으세요.
 (料理教室で) 砂糖を {少し／ちょっと} 入れてください。

B {?조금 (cogum) / 좀 (com)} , 그만해!
 {?少し／ちょっと} 、 やめて!

今後は、日本語と韓国語の副詞において、<感動詞的用法>でも用いられる副詞にはどのようなものがあるのかを確認するとともに、その具体例の分析として、日本語の「ちょっと」と韓国語の「조금 (cogum) / 좀 (com)」の比較対照も試みたい。どちらの言語の分析においても、語用論的観点も必要になると思われるが、本論文ではこの点に関する理論的考察に至らなかった。今後の課題としたい。

④ 副詞の<感動詞的用法>に関する記述の網羅性・包括性

本論文では、<感動詞的用法>が派生している副詞として「もう」「まったく」「ちょっと」の3つを取り上げたが、その他にどのような副詞が<感動詞的用法>を持っているのかまでは言及することはできなかった。今後は、副詞全般を見渡して、<感動詞的用法>を持つ副詞の一群を取り上げるとともに、それらの<感動詞的用法>に共通する特徴を見出すことができるかについても考察を試みたい。

以上、本論文における今後の課題について述べてきた。今後、これらの点を中心に、考察を深めていきたい。

【用例出典】

※ 小説の短編集は、書名で示す。単行本の出版年順に提示するが、使用した文庫版の出版年も末尾に示しておく。

〔小説〕

村上春樹(1982)『羊をめぐる冒険（上・下）』 講談社文庫(2004)
宮部みゆき(1989)『火車』 新潮文庫(2010)
角田光代(1994)『まどろむ夜の UFO』 講談社文庫(2008)
柳美里(1995)『フルハウス』 文春文庫(2007)
東野圭吾(1998)『探偵ガリレオ』 文春文庫(2002)
奥田英朗(2000)『イン・ザ・プール』 文春文庫(2006)
重松清(2000)『ビタミン F』 新潮文庫(2003)
山本文緒(2000)『プラナリア』 文春文庫(2005)
浅田次郎(2001)『椿山課長の七日間』 朝日文庫(2005)
唯川恵(2001)『肩ごしの恋人』 集英社文庫(2004)
石田衣良(2002)『アキハバラ@DEEP』 文春文庫(2006)
吉田修一(2002)『パーク・ライフ』 文春文庫(2004)
角田光代(2002)『空中庭園』 文春文庫(2005)
伊坂幸太郎(2003)『重力ピエロ』 新潮文庫(2003)
小川洋子(2003)『博士が愛した数式』 新潮文庫
奥田英朗(2003)『空中ブランコ』 文春文庫(2008)
重松清(2003)『疾走（上・下）』 角川文庫(2005)
綿矢りさ(2003)『蹴りたい背中』 河出文庫(2007)
村山由佳(2003)『星々の舟』 文春文庫(2006)
坂元裕二(脚本)・小泉すみれ(ノベライズ)(2004)『ラストクリスマス』 マガジンハウス（単行本）
横山秀夫(2004)『臨場』 光文社文庫(2007)
重松清(2005)『その日のまえに』 文春文庫(2010)
東野圭吾(2005)『容疑者 X の献身』 文春文庫(2008)
三浦しをん(2005)『まほろ駅前多田便利軒』 文春文庫(2009)

〔シナリオ〕

『シナリオ作家協会編 01'年鑑代表シナリオ集』 映人社(2002)
森ら いみ「風花」
熊井 哲「日本の黒い夏〔冤罪〕」
経塚 九雄「連弾」
宮崎 駿「千と千尋の神隠し」
村上 修「ターン

宮藤官九郎「GO」

富川元文・天願大介・今村昌平「赤い橋の下のぬるい水」

古厩智之「まぶだち」

橋口亮輔「ハッシュ！」

青島武「光の雨」

『シナリオ作家協会編 02'年鑑代表シナリオ集』 映人社(2003)

荒井晴彦「KT」

万田邦敏・万田珠実「UNLOVED」

西岡琢也・佐々部清「陽はまた昇る」

成島出「笑う蛙」

山田耕大「ごめん」

鄭義信「OUT」

山田洋次・朝間義隆「たそがれ清兵衛」

中村義洋・鈴木謙一「LAST SCENE」

天願大介「AIKI」

丸山昇一「夜を賭けて」

木皿泉(2006)『野ブタ。をプロデュースシナリオ BOOK』 日本テレビ

〔電子コーパス〕

『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』 新潮社

壺井栄(1952)『二十四の瞳』

福永武彦(1954)『草の花』

三島由紀夫(1956)『金閣寺』

開高健(1957)『パニック・裸の王様』

井上靖(1953)『あすなろ物語』

石川達三(1958)『青春の蹉跎』

三浦哲郎(1960)『忍ぶ川』

水上勉(1961)『雁の寺』

安部公房(1962)『砂の女』

北杜夫(1962)『楡家の人びと』

山本周五郎(1963)『さぶ』

吉行淳之介(1963)『砂の上の植物群』

新田次郎(1964)『孤高の人』

井伏鱒二(1965)『黒い雨』

倉橋由美子(1965)『聖少女』

立原正秋(1968)『冬の旅』

三浦綾子(1968)『塩狩峠』

有吉佐和子(1966)『華岡青洲の妻』
井上ひさし(1970)『ブンとフン』
曾野綾子(1973)『太郎物語 高校編・大学編』
筒井康隆(1977)『エディプスの恋人』
星新一(1977)『人民は弱し官吏は強し』
沢木耕太郎(1980)『一瞬の夏』
赤川次郎(1982)『女社長に乾杯!』
村上春樹(1985)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』
椎名誠(1987)『新橋烏森口青春篇』

『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』 新潮社

二葉亭四迷(1887)『浮雲』
夏目漱石(1905)『我輩は猫である』
二葉亭四迷(1906)『其面影』
夏目漱石(1906)『坊っちゃん』
二葉亭四迷(1907)『平凡』
田山花袋(1907)『蒲団』
夏目漱石(1907)『虞美人草』
夏目漱石(1908)『坑夫』
夏目漱石(1908)『三四郎』
田山花袋(1909)『田舎教師』
夏目漱石(1909)『それから』
森鷗外(1910)『青年』
夏目漱石(1910)『門』
森鷗外(1911)『雁』
夏目漱石(1912)『彼岸過迄』
夏目漱石(1912)『行人』

【参考文献】

- 秋田恵美子(2005)「現代日本語の「ちょっと」について」『創価大学別科紀要』17 創価大学 pp.7
2-89
- 池田英喜(1999)「「もう」と「まだ」—状態の移行を前提とする 2 つの副詞—」『阪大日本語研究』
11 大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座 pp.19-35
- (2000)「状態の移行前を表す「もう／まだ」について」『阪大日本語研究』12 大阪大学大
学院文学研究科 日本語学講座 pp.49-56
- 石神照雄(1978)「時間に関する<程度性副詞>「マダ」と「モウ」—<副成分>設定の一試論」『国
語学研究』18 東北大学文学部 pp.26-38
- 上村幸雄(1989)「日本語のイントネーション」『ことばの科学3』 むぎ書房 pp.193-254
- 岡本佐智子・斎藤シゲミ(2004)「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北海道文教大学
論集』5 北海道文教大学 pp.65-75
- 奥田靖雄(1956)「ことばの組み立て」『講座日本語1 民族とことば』 大月書店
- (1985)「文のさまざま(1) 文のこと」『教育国語』80 むぎ書房 pp.41-49
- (1986)「文のさまざま(2) まちのぞみ文(上)」『教育国語』85 むぎ書房 pp.21-32
- 川端善明(1964)「時の副詞(上)—述語の層について その一—」『国語国文』33-11 京都大学
pp.1-23
- 金田一春彦・林大・柴田武編(1988)『日本語百科大辞典』 大修館書店
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』 明治書院 pp.176-188
- (1985)「日本語の文の時間表現」『言語生活』403 筑摩書房 pp.48-56
- (2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』 岩波書店 pp.161-
234
- 工藤真由美(2000)「否定の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 岩波書店 pp.93-150
- (2002)「日本語の文の成分」『現代日本語講座 第5巻』 明治書院 pp.101-119
- 古座暁子(1984)「たずねる文」『教育国語』79 むぎ書房 pp.2-13
- 国語学会編(1955)『国語学辞典』 東京堂出版
- (1980)『国語学大辞典』 東京堂出版
- 佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』 厚生閣
- 佐藤里美(1992)「依頼文—してくれ、してください—」『ことばの科学5』 むぎ書房 pp.109-174
- (2009)「一語文的な名詞文の意味・機能」『日本東洋文化論集』15 琉球大学法文学部
pp.211-241
- 鈴木一彦(1973)「感動詞とは何か」『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』 明治書院 pp.135-
175
- 鈴木一彦・林巨樹編(1973a)『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』 明治書院
- (1973b)『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』 明治書院
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 鈴木英夫(1996)「『全く』の用法の推移と副詞としての特性について」『国語学論集』山口明徳教授

- 還暦記念』 明治書院 pp.458-484
- 鈴木浩(2010)「言語学研究会の「文の成分」論 その特徴とうつりかわり」『国文学 解釈と鑑賞』75-7 pp.33-41
- 全紫蓮(2011)「副詞「もう」「すでに」の分析」『韓国日本語学会第 24 回国際学術発表予稿集』韓国日本語学会 pp.159-169
- (2014a)「副詞「もう」の意味と機能—明治期と現代の比較研究—」『日語日文学研究（日本語学・日本語教育篇）』88-1 韓国日語日文学会 pp.97-120
- (2014b)「「ちょっと」の意味と機能—く副詞的用法>とく感動詞的用法>の連続性を中心に—」『日本学報』101 韓国日本学会 pp.75-89
- たかき かずひこ(2010)「独立語の特殊性」『国文学 解釈と鑑賞』75-7 至文堂 pp.77-86
- 竹内美智子(1973)「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』 明治書院 pp.71-146
- 時枝誠記(1950)『日本文法 口語論』 岩波書店
- 中道真木男(1991)「副詞の用法分類—基準と実例—」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』 大蔵省印刷 pp.149-151
- 西尾寅弥(1972)「程度」『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版 pp.155-176
- 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 野田春美(2000)「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量言語学』22-5 計量国語学会 pp.169-182
- 朴秀娟(2011)『現代日本語における極性に関わる副詞の記述的研究』 大阪大学大学院文学研究科 博士学位論文
- 橋本進吉(1934)『国語法要説』 明治書院
- 服部匡(2007)「大規模コーパスを用いた副詞「全然」の共起特性の調査—朝日新聞と Yahoo!知恵袋の比較—」『同志社女子大学学術研究年報』58 同志社女子大学 pp.1-8
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
- 藤原浩史(2005)「副詞「ちょっと」の意味構造」『国文目白』44 日本女子大学国語国文学会 pp.68-78
- 彭飛(2004)「「チョット」の使用と「配慮表現」（気配り表現）における「和らげ」と「暗示的強調」」『日本語の「配慮表現」に関する研究—中国語との比較研究における諸問題—』 和泉書院 pp.139-177
- 松村明(1957)「東京語の成立と発展」『江戸語東京語の研究』 東京堂出版 pp.86-118
- 松下大三郎(1924)『標準日本文法』 紀元社
- 村上三寿(1993)「命令文—しろ、しなさい—」『ことばの科学』6 むぎ書房 pp.67-115
- 村木新次郎(2012)『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』 角川書店
- 原田登美(1981)「否定との関係による副詞の四分類—情態副詞・程度副詞の種々相—」『国語学』128 国語学会 pp.122-138

- 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的観点から—』 明治書院
- 三宅節子(2003)「程度小を表わす副詞の一研究—「すこし／ちょっと」を対象に—」『日本語・に本文化』29 大阪外国語大学留学生日本語センター pp.115-136
- 吉村あき子(1989)「yet についての一考察 —yet, already, still, any more と「まだ」と「もう」—」
Osaka Literary Review 28 大阪大学大学院英文学談話会
- 山口堯二(1984)「感動詞・間投詞・応答詞」『研究資料日本文法 4』 明治書院 pp.125-157
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』 宝文館
- 渡辺実(1971)『国語構文論』 塙書房
- (1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23 上智大学国文学会 pp.1-16
- (2001)『さすが！日本語』 ちくま新書
- Leech, G.N. 1983 *Principles of Pragmatics*. London : Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店)

〔国語辞典類〕

- 金田一春彦、池田弥三郎編(1988)『学研国語大辞典 第二版』 学習研究社
- 金田一京助、山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄編 (1997)『新明解国語辞典 第五版』 三省堂
- 松村明編(2006)『大辞林 第三版』 三省堂
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典 第二版』 小学館
- 西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編(2011)『岩波国語辞典 第七版新版』 岩波書店
- 山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄、上野善導、井島正弘、笹原宏之編 (2012)『新明解国語辞典 第七版』 三省堂

<謝 辞>

この拙い論文を作成するにあたり、ご多忙のなか、多大なるご指導とご鞭撻を賜りました、指導教員である工藤真由美教授に、心からお礼を申し上げます。研究テーマの設定から、研究の方法、論文の執筆など全てにおいて、懇切丁寧にご指導を賜りました。時に応じて厳しくご指導いただいたこと、また温く励ましてくださったことを通して、私自分の至らなさときちんと向き合うことができました。今後の努力の大きな糧になると思います。改めて深く感謝申し上げます。

韓国での指導教員である韓国外語大学の鄭相哲教授にも、深くお礼を申し上げたいと思います。大阪大学に留学できたのも、鄭先生のご指導と激励があったからこそでした。研究のことをはじめ、留学生活について、何かと貴重なご助言を賜りました。心より感謝しております。

齊藤美穂先生、朴秀娟先生にも感謝申し上げます。ゼミの先輩でもあるお二方には、研究生の時から現在にわたり、研究や留学生活の悩みについて、懇切に相談にのっていただき、何度もお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

日本語学講座の先生がたや研究室の皆様、日頃よりいろいろとご意見、ご指摘くださった文法ゼミの皆様にもお礼を申し上げます。そして、本論文の日本語チューターを引き受けてくださった、森田耕平さんにも感謝の意を表したいと思います。

最後に、幾度もくじけそうになった私を温かく見守り、励ましてくれた家族と友人に、心から感謝いたします。

全 紫蓮